

## 第二卷 浦の藻屑

### 一。濃厚會社開業式の祝詞

明治十あまり。三とせといふ年の。七月のはしめの八日を。生日の足日とをらひ定めて。濃厚會社の開業の式をなん行はれける。抑此會社は。わか美濃國になり出るものゝつかさなる。生糸の改良をむねとし。そのなりはひを盛にせむとの目的にて。今の世にあたりて。最かくへからざるまうけなれば。はやくあかたつかさにも。こゝに眼をつけて。かた糸のよりくゝに。さとしまめされければ。そのすちの人々まけいとのと繁さを厭はず。ともにかたらひはかり。力を合せて。ふとくゝいかしき基をたて。つひに。かくすみやけく。開業の式をあくるに至れるは。我も心のひくかたにて。いとくゝうれしくよろこばしくなむ。あのれけふしも。此むしろにっらなりて。つらく思ひはかるに。今より此會社のなりはひは。いやすみにすすみ。いやさかえにさかえて。さら糸のためるとなく亂るゝふしなく。なほくたゝしく。かくはしき名を海の外なるまと國までも傳へて。わか日のもとに。並ひなきほまれを得るにいたらむとも。あのくゝかつとめの力によりて。遠きにはあらざるへしと。行末かけて悦ひ思ふ心を。やかつてけふのまとのほき言にかへてかくなむ。

### 二。酒銘の記

百しね美濃國は。いにしへより。たなつもの。よく實のり榮ゆる國にしあれば。其枕詞にも。百の稻いねの實と。つゝけたりと。ある人のいひしは。さることにて。さはかり稻のめてたさも。そのもとは土と水との。よきによれるものにて。昔より此國にして。この水をくみ。このよねをもて。造りとつくる酒の香の。よもにかをりみちては。あれと。いまた東の都に。かくはしき名のあらはれざるなむ。ひとつのうらみなりける。さるを武儀郡に。門ひろく榮えたる。酒田、武井、西部、村井、小阪、平田の氏の人たち。此事をうれたみ。かたらひはかりて。あのくゝ力を合せ。心をむすひて。此度上有知の里に。ひとつの社をまうけ。更に此國のすくれたるよねをえらひ。清らなる水をくみてよき限りの酒をかもし。ひろく東京にはこひあくりて。都人のもとめに充むとせらるゝは。うへもよくちもひよられたるものかな。こはよろつあらたまり行。今の世のいさほひにつれて。さもあらまほしき心まらひにこそあんなれ。いましてその酒すてになりぬ。そのまな兄と弟と二くさあり。それか名をつけてよと。乞はるゝにつきて。つらつら思ひめぐらすに。かの淵にすむてふ龜は。藏六とて。甲ひとつに。首尾手足の六つをかくし。千萬の齡をまたくするものゝよし。古くいひつたへ。述異記といふ文に。龜壽一萬年。これを靈龜といふと見えて。いとくゝめてたきものにしあれば。これになすらへて。

此美酒の名よ。兄のかたを。靈龜おとのかたを。萬代となむなつけたりける。今よりさき。此六人の人々か。むつをかくし心をひとつにして。甲のまどくかたくあつらに。かしら尾のどのひ。手足のはたらき。皆よろしきにかなひ。いやますくは。この酒の。東京はもとより。四方の國々にも。其名ひろこり。月に日にもとめ多く。萬代までも。この菱六社の。立さかえむとを。祈りことほきて。いざ、かそのよし。書るすになむ。明治十あま四とせの十一月。

### 三。五社考のはしかき

我かみの國。かなふの里に。ひとりの翁あり。うつせみの世に。ましらふ心もなく。明くれ窓の燈をむつひ。のきはの雪にまたしみて。いそのかみふるとの學ひにふけり。花にたはふれ。月にうそふきては。敷まのやまと歌に思ひをのへて。みつからたのしみとす。まかのみならず。鳥の跡をさへ。うるはしく。書得られければ。その名おのつから。世に聞えて。年月に。その門に立よるともから多かりけり。さるに此翁。この文月はかりに。桐の一片に先たちて。夕の露とちりうせられしこそ。をしみても。なほあまりあるとなりしか。こゝにそのなかれをくめる。福田忠太郎といふ人。ひと日。我柴の戸をとひ来て。一まきの書をとり出して。こはかの翁のあらはし。厚見郡五社考といへるふみなり。こたひ同じ心の友とち。あひはかりて。活字もて。すり巻に。ものせむとするを。いかてこれかはしにひと言をといはるゝに。おのれ

此翁の世に在し日。うとからぬ中らひなりしかは。その人の著しふみのいま世に顯はれむとするとの。いとうれしきを。まして此五社考はしも。いにしへより人のまとはしくせしこといもを。をちか年ころ心をこめて。廣くかうかへ。つはらにたゝして。ものせられたる。いみしきまるへふみにしあれば。世のため人の爲にも。いとくよろこはしからしやは。またかく思ひよられける。福田ぬしのためなるころさしも。おほろけならずおほゆれば。なほまもえあらて。みしかき筆のゆくへもたとらす。たゝにありつるまゝを。一くたりかきそへて。そのせめをふさぐになむ。翁姓は廣江。名は徳方。もとの加納藩の人にて。うせにし年六十になむありける。明治十八年三月。

### 四。布引の琵琶のゆゑよしをさるせる文

柿崎干城ぬしのもたまへる。布引といへる琵琶は。いとふるき世のものにて。甲の板のうらに。其銘をさるし。文治の年號をかきつけありとなむ。いかなれば。布引と名つけけるにや。そはさるへからねと。此ひはの傳はり。來つるゆゑよしを。きくに。そのかみ。さつまの宰相の君。老て仕へをしそき。景山公といひしは。江戸の品川のなりところにて。まつかに。世をさけてなむ。おはしける。此君琵琶を好みて。さきに都に名高かりし。檢校荻野なにかしより。平曲の秘事を。ならひ傳へて。其業にあやしきまで。すくれたまひけるか。そのころ。江戸にて物す

る平曲は。都のとはふしも異に。まらへもゆうならず。心つきなしとて。月の夕。雪のあしたのほれくにも。只ひとりのみひきならしつゝ。友とする人のなきをのみなむ。なげきあはしけるに。天保のころほひ。尾張の殿人羽鳥清雄の父松邊といふ人。江戸に在て平曲の上手なるよし。傳へ聞たまひて。品川のなり所に。まねきたまひけるに。これなむかの萩野かなかれにて。こよなかりしかは。みこゝろにかなひて。その曲のたえなるを愛たまふあまりにや。青地の錦の袋にいれたるを。とり出てこは。我久しくひめもてる琵琶なるか。後の世に名をのこすへき。同好の人に傳へむと思ひしを。いまその此道に。こゝろさしあつきにめて。これをあたふるそとて。給はりけり。この後松邊を又なき琵琶のあそひかたきとして。道のましはり。あさからさりしか。つひに萩野より。傳へうけたまひし。大秘事の曲をさへに。松邊にさつげ給へりけり。かくて松邊年ころへて。國に歸るとき。此ひはをたつさへ來て。家にのこしけるよりそ。永く羽鳥氏のためとは傳はりける。さるをちかきころ。あゆ知人にて平曲このむなにかしとか。さるへきゆかりありて。今の羽鳥氏のあるし。清永といへる人に。いとねむころにこひもとめて。そのひはを傳へ。ひめもてりしを。ゆゑありて干城ぬしのものとは。なりにけるなりとぞ。干城ぬし。ひととなり。たけくをしく。はたみやひにして。ふみをこのみ。いとまあればひはをかきなてて。いさめる氣を養ひ。たのしひとす。まことにそのこゝろさし。いうにやさしくもあるかな。いま天の下に。ふたつとなき。此布引を得て。ぬしのよろこひ。

いかばかりならむ。布引もまた。ぬしにあひて。あま聞まられむこと。うれしとまをいおもふへけれ。此琵琶のゆるよしを。おのれにまゐりてよとこはるゝに。いなひかたくて。きけるまゝをかくいものしつ。明治十八年九月。

### 五。眞堅木舎のあるしの詠草の序

此一卷は。わか友。眞堅木舎のあるしの。詠草なり。ぬしは。かこしまの人にて。其家にとり傳へたる。弓矢の道は。さらにもいはす。皇國學ひに。心をよせ。歌をよくよみ。書をさへ拙なからす。ものせられければ。はやく其藩のまうけに従ひ。京都にのほりて。すまれにき。その頃。桃岡八田うしの。なかたちにて。おのれと。たかひに。逢みしとはなけれど。文かよはず事となりて。ふるき友とちのとくになむましはりけるか。今ちよひをりてかそふれば。はや二十年あまりの昔になりぬ。ぬしは近きとしころ。大隅國加治木のこぼりつかさにてつつかへて。朝よひにつとめのわざのいとしけかるを。さすかにすきの道とて。いさゝかのいとまのひまにば。歌をよみつゝ心をなくさめられける。その歌ともつもりく。つひに此一まきとなむなれりけるを。され見てよしあしいひてよ。又はしかきもと。はるくおのれかもとにひひちこされけるは。ちろかなる身にはいと思はすなるものから。其志のうれしさはさらにはいへくもあらず。つねに遠きさかひをへたて。よろつちほつかかなかななるにつきても。いとゝそのこ

との葉のなつかしく。机の上に置いていとまあるとにくたひとなくくり返しつゝ。玉のひきき  
に耳をすまし。金の光に目をよるこはきめ。近きあたりの友かきにも見せなとして。はからす  
も久しくとめおきけるを。今はさのみりとて。この巻を返すにつけて。よろこひいひかてら。  
いさゝかひととかきそへつるを。やかてはしふみとはなしぬ。明治廿年六月一日。

## 六。酒銘記

上有知里人。村井正軌か家に。今年はしめて醸ける酒の。にひさけのあらはひいとうまくて。  
四方の里より。あかなひもとむる人も。日にけに庭もせに來りつとひける。かれこの酒  
に。ふさはしからむ名つけよと、まへるに。ひかし息長帯姫尊。酒賀の御歌に。此御酒は。わ  
かみきならず。くすの神。常世に在す。石立す。少御神の。かひほきほき狂ほし豊饒ほきもと  
ほし。奉りこし。御酒ぞ。と詠たひましける。御との葉を。かしこけれと思ひよりて。豊ほさ  
とぞ。名つけたりける。今より此家の酒の泉。わさいつるかと思せすたへせす。久志の神のみ  
たま太はりに千代に百代に。いやすすくも。いへのなまさかえなむかしと。とほきつゝ。こ  
のよしえるしぬ。明治六年の師走。

## 七。水車の記のはし書

河にそひ谷によりて。轆車を造るとは。いとあかる世よりや有けむ。大寶の令にも。碾磑の事  
見へたれば。水碓もあして知へし。されといにしへのは。いまのことくたくみにはあらぬなる  
へし。こゝに松森のさとに。篠田なにかしといふものあり。其家川のなかれにのをみて。水車  
をまうけ。米麥などを。つきまらくるわさをなせり。其さまひとつの横木に。あまたの杵をな  
らへまうけ。水にまたかひて。かはるく隙なくうすつくさま。たとへは。秋田にあさる鶴の  
嘴の。むらかりはむか如く。昔から國にて。杜預といひける人の造りし。連機碓なと云ひけむも。  
是にはまさらしとさそほゆれ。こは其遠津祖の代に。才ある人ありて。かゝるたくみを。考  
へ出して。其頃までは。美濃の御封の内に。木わた實をうりあつかふとなかりしかは。そを買  
あつめて。水車にて春たらむには。村々の爲にもよかるへきよしを。おほやけにうたへ申し  
かは。さるへき事とて。やかてゆるされしのみならず。永く此水くるまの税を。のそかれしと  
ぞ。いま地方古義といふ書を考ふるに。まさるとまかなむありける。年は貞享の四とせなりけ  
り。まかしよりこのかた。其わさ水の流ともたゆるときなく。いく年波を小車のめぐりく  
て。今の世までもつたはれるは。常盤なる松もりの名にあえて。猶八千とせの行すゑもたのもし  
く。いとめてたきためしになむ。其水車の故よしまるせる。此ふみのはしに言くつゝとあるに

まかせて。短き筆のゆくへもたとらす。打おも入るまじき。そゝろにまゐりしつけてかへしつ。  
慶應四年辰五月。

八。吾母刀自の六十賀の歌の序

ねほよそ。人の子の親につかへて。つくは山まけき陰をあふき。富士の峯の高きよはひをねか  
ふり。上下のへたてなく。皆あなし心になむ有けらし。ことし吾母刀自の。六十の齡に満ぬる  
まほを待つて。千とせつむへき船よそひをなむ。おもひよりぬるに。よもの海ちたしく。波  
風いと静けき世にさへあなれは。何事かは心のかきり盡さくらむ。あはれこのとき逢ぬるり。  
いみじきさちとも幸なれは。限りなき御代のめくみをよろこひかてら。たらちねの老をなくさ  
め。今をいはひ行末をいのらむと。此をりをすくすましうちほへて。ことしそちとせの坂のはし  
めなれり。つくともつきぬためしにと。一ふしに千世をこめたる杖を切とり。添しきぬわたへ。  
行末の齡をかたとりて。たかくつみあき。さては門田わせの。にひまほりを。みかのはら満な  
らへ。うからやからあつまり。人人をまねきつとへて。けふしも底すめる。長良川のほとり。  
朝日のたゞさす。小倉山のふもとなる家に。まどゐのむしろをひらき。時雨ふりにしいにしへ  
の跡まのはる。山の名なれは。敷島の道にり。いとしもよせあるこゝ地して。山賤の身にお  
はぬわさなから。わか國のとわさなれはとて。しかも所からなる。山によすてふ事を題にて。

六十首のいはひうたをあつめて是を講し。ひねもすに簾をめくらし。うちあけあそぶその言葉  
とも。春の林の花よりもまけく。秋の紅葉のいろよりもこまやかにして。あるは若草山に若か  
へる老をなくさめ。かゝみ山かはらぬ影をたのみ。あるは高き齡を千とせ山によそへ。久しき  
ためしに龜の尾山をひき。あるは萬代のさるを南の山にき。まなぬ薬を心の山のちくにもと  
め。あるは末の松山にちたひこをなむと波をかそへ。塵ひちのやまと積らむ行末をいはふた  
くひ。野邊の千草のさまゝに。たか山の高き雲のより。短山のすへか末なるものかとちまて。  
心々をのへつらねしは。たとへむかたなく。數ならぬふせ屋におひし。はゞきいもあもてを起  
して。足引の山のかひある。けふの此日のことほかひになむ。猶今より後の。なんそち八十ち  
はさらにもいはず。もよも千世もくりかへし。玉の緒山の末永くめぐりあはむとしをかそへ  
て。かくこそはいはいめと。後瀬山後もみむため。こたひの歌ともまゐりしとめぬるついでに。こ  
とのよしをいさゝか筆にまかせつ。ままとやひのとの卵のとし。霜月の廿日あまみ三日と  
ふ日なりけり。

九。上田重子のもとへ遣はす文

御歌のまうなりぬとて。とほきざかひをおくりたまはせたるなむ。御ころろさし淺からすうれ  
しう思ひたまへ侍る。はやくよりかくれなき御名は。吹かせの音にききて。またはしう思ひわ

たり侍りしを。さるへきみすかもなくなむ。けふまですくし侍りし。此御歌のしうをひらき見るに。春は花にむかひて。風まつほと命をはかなみ。夏は蓮葉の露にうき世をあはれみ。秋はつまなきやとに月をなかめ。冬は時雨ふりにし身をなけきなど。折にふれつゝ。さまゝ思ひつゝ。此たまへる意詞の。いひしらすめてたくあはれなるに。なつかしさもうちをひて。くり返しまさ返せは。さなからまのあたり。かたらひ聞えさするこゝちさへ。せられ侍りてなむ。此一巻は。永く机のものと重寶となし侍るへし。そのうれしさを一とよろこひ聞えかてらかくなむ。あなかしこや。七月はつかあまりふつか。

#### 十。赤澤のたきに遊ぶ記

鹽原の。旅やとりに在けるほど。ひと日高崎大人の。あか澤の瀑見にもし給ふに。従ひていてたつと有けり。八月中の七日はかりにて。のこるあつさのまたたへかたきほとなるに。深山の奥のたきのさまゆかしくて。むすめみな子をたつさへ。同じやとりなる。近藤もと子の刀自をもいさなひて。朝風のまた涼しきころより。あないのをの子をさきにたてゝ。やま路ふみわくるに。夏草心のまゝにおひまけり。露ところせく置みたれて。行さきも見へかわす。いとうとまし氣なるを。さすかに。朝顔わすれ草などの葉かくれに。かつゝ花の見ゆるも。なつかしう哀なり。やうゝのほり行くまゝに。いとけはしきつゝをりをりになりぬ。元子の刀自は。や

まひの後の力なく。いとたゆげなるを。高崎大人は屢ふり返り見つゝ。いかにくるしかるらむ。静になとのたまふに。何かいとさしいらへて。いと足もかるけに見ゆれば。

つゝをりいはかねつたと行道も君としゆげはくるじくもなしと。刀自の心をおしはかりにいへは。久良梯山ならはと。若かへり思ふらむもあかし。かくて木こりならては。かよふへくもあほえぬ。さかしき山の腰をめぐりて。谷にちりゆくほど。かなたの木かくれより。かすかに聞へ来るは。まかふへくもあらぬ音なりかし。皆人こゝろいられてして。岩にとりつき。藤かつらにすかりつゝ。やうゝありはてい。うち向ひたる時の心地よさ。さらに何ともおほへす。其たきのさま。まどに世に似ざりけり。高さ二丈はかりもあるらむ巖の上より。たゞ眞白に落来るは。千筋の糸をみたせるとく。岩角にあたりて碎くるは。數まらぬ玉をまろはし。なりひく音ははやちの吹おこるらむやうにてすさましく。遠く見れば夏をわすれ。近くよれば冬をおほゆ。あたりは年経たる樹ともの生しけりて。日の目も見へす。千引の大岩屏風をめぐらしたらむやうに立そひえていと物すこし。み名人思ひゝに。そこなる木のね。いはかねに。尻うちかけて。たきをみつゝいさふ。とはかりありて大人まつうたひ給ふ。つゝをりあへきのほりし苦しさも忘れはてゝ瀧を見るかな。ちく山の瀧のきらなみたちまちに汗にひたりじろもかはさぬ。わかとちは。たゞ此けしきに心うはれて。なにと打いてむ言の葉もなけれと。さてのみやは

とて。

たさとしも誰なつけし水引の白糸とこそいふへかりけれ  
瀧つ瀬のまふさは寒しいはかねの昔の衣を着むよしもかな  
もと子の刀自。

くるしさも忘れくへて君とよもに瀧の糸にそ引れ来るける  
岩ほのみかさなる山のたかねより碎けて落つる瀧を冷しき  
みな子も。

いはねより落ちくる瀧の白糸のかゝる所にすむよしもかな  
奥山の日のめも見へぬ木かくれに落くる瀧の眞白なるかな  
かへる道に。つゝしのかた枝うす紅葉せるか見へたるを。大人は是なむ八しほどいひて。春は  
花さき秋はいとようもみつる木なりと。引よちをりてもと子に見せ給ひて。

奥山の八さほのもみち君かためまつ一さほを染てみすらむ  
と。うちすむし玉ふにそ。元子はその枝をふしいたゝきて。御返しせまほしき。おもゝちなり  
しかと。とみにいてこぬさまなりしをかしかりき。此あたりさまく目なれぬ木立とも多か  
る中に。五葉松の立ましれるか。いとめつらしくて。

とさわなる深山の松のいつはとはわかぬ縁も夏ぞすしき

なと口すさひつゝ。山をくたり大人をおくりてやとりて歸りしゆ。うまのまへ十一時なりき。  
明治二十二年八月。

### 十一。上有知里記

玉きはる。有知のさとは。順の和名鈔にのせて。いと古き地名なりけり。いつの頃よりか。上  
下ふたつにわかれて。今は上有知下有知といへり。其なからに。松森の里とてあるは。是もま  
た有知のさとのわかれなるへし。つらく此あたりの地理を見るに。西は郡上川のなかれをた  
へ。北より東へ山々つらなりめぐりて。垣のことく。壁のことく。落そのうち在りて。  
たとへは人のふところのことき土地なれば。そのかみ内の里とは名つけけらし。また中ころ。  
何人の莊園たりしにや。西は郡上川より。ひかしは津保川をかきりて。有知の里につらなれる  
村々。十餘郷を富元莊といへり。けにとみもとの名むなしからす。中にも。此上有知の里の  
にきはひや。市には飛彈郡上をはしめ。近郷諸色。の土産をつとへ。湊には。伊勢名古屋、  
其外國々の荷物。上りくたりの船と絶ゆる事なし。慶長の頃。金森氏あらたに小倉山にきつき  
て。町屋を今の地にうつし。地子諸役をゆるし。月六齋の市を定められしより。繁昌いにし  
へにいやましぬ。いはむや今かしこ君のおほむいづくしみ。野山の末までも春雨のあまねき  
御代に達て。家ことにとみ。人ことに足ぬれば。誰か鼓腹のたのしみを極めざらむや。そのう

へ山水のけしきにさへとみて。みる所眼をよるこはせずといふことなし。さるは霞たつ春のあした。長の瀬の田居にありたりては。芹つみてきみにさしけしためしをぢもひ。雪ふかき冬の夕。臥龍山にのほりては。三たひかへりみしふる事を忍ひ。また夏は鶴かひのかゝりのもとに。川を鮎見といふ事をあまんし。秋はくまなき月のまへに山ををくらといふ事をいふかるたくひ。情をのへ興をそへて。時につけをりにふれ。當るたのしみ。盡ることなかなかりける。志かはあれとも。樂去て哀來る。人の世のならひ。教泉寺の花は盛者必衰の色をあらはし。清泰寺の鐘は諸行無常の響をつたふ。富貴又ときによればひとへのたのむへからず。嗚呼佐藤氏三代まで。此里のぬじたりしも。物かはり星うつりて。いくそはくの秋そや。今其城跡をみれば。古松枝をましへ。石壘苔ふかく。寂々寥々として。むなしく孤猿の白雲に叫ぶのみそ。あはれなりける。此城山を藤白ととなへて。小くらと東西に相對し。ともに空しき跡をとくむ。かの小倉は法印の名つけしにちこり。藤白は宗祇かなをつたへて。關こえてこいも藤まるみさかいな宗祇とともに其名たかく。口の野樋か洞はとほく桃源に入。はるかに天台をたどる心地して。更に塵外の地とやいはむ。又見坂を過ては。小笹の露に遠き木曾路の旅を思ひ。信濃路や木曾の御坂の小さしはらわげゆく袖もかくやつゆけき下わたりには。藍見川の名に近き。喪山喪山在大の矢田村の跡をしたふも。吟人の情なるへし。此川邊を志はらくさりて。森の内にいかめしき。美都のみあらかたせ給ふは。石清水のさよさをうつす。八幡宮にましゝて。むかしより此里をまつめ守らせ給ふとかや。されは五日の風枝をならさず。十

日の雨土くれをうたす。としのみのりゆたかに。民のかまと煙まけく。彌さかえに榮え行。神と君とのおほむめくみは。仰くにもなほあまりあるへし。

### 十二。衣笠の郷に三浦義明の墓を尋ぬる記

さかみの國。三浦郡大津に。鹽湯あみさむと。そこなる大津館に。とくまりわたるころ。一日やとのあるしに三浦大介か戦死せし。衣笠の城跡はいつこなりやと問ひけるに。南の方をさして。此山のむかふに。義明か墓あり。道のほと拾町あまりもやあらむといへは。さは近きあたりなり。いさゆきて見むと。たゞ一人やかて大津館を立出て。前なる射的場を南へとほり過て。山あひをわつかにゆけは。田島打ひらけたる所に出たり。二二三丁はかり行て道の傍に標杭の立るを見れば。こゝを森崎村といふなりけり。田かへすをの子にとへは。義明の墓は。大矢部村なる満昌寺といふ寺にあり。此道を今四五丁もゆけり。門前に松ある禪寺。すなはちそれなりとをしふ。四五町行けとも寺は見へす。又道行人に問へは。いま四五町ゆく先にありといふ。ゆきゝてやうやく満昌寺に到りつさぬ。森崎村より拾町あまりもあるなりけり。さて山門を入りて見れば。正面に本堂左の方に鐘樓あり。其奥に苦なめらかなる道ありて。高く石階をのぼれり。三間四方許の堂宇あり。さきに村人か道にて。義明公の御靈屋といひしはこれなり。額に御靈大明神とあり。又そのうしろに石階あり。これをのぼれば。土塀をめぐらして五輪石た



てり。即ち義明の墓所なり。傍に誰ともまれぬ墓石三つはかり並へたり。さて寺に入りて和尚やいますとへは。老嫗いて来て。和尚はこのころ遠き所へ行て。留主なりと答ふ。せむかたなくて。一つふたつちうなに問ふとあれと。いらふちからもあらされは。堂にのほりてそこらみありくに。片隅に古き制札あり。其文に云。禁制。相州三浦郡満昌寺。一、軍勢甲乙人等亂妨狼籍事。一、放火之事。一、對寺家門前非分申懸事。右之條々於有違犯輩忍可被處嚴科者也。天正十九年。本堂の柱にかけたる聯に。右平義明公德鎮那須九尾夜袂。左満昌寺殿功輔鎌倉三代□王。とあり。義明の木像もあるよしなり。この寺は建久中。源頼朝公三浦義明か追福の爲に。右京亮仲業に命して勸立し。義明山満昌寺と稱す。鎌倉建長寺末にて。臨濟宗なりといふ。かの義明は平氏にして。小字綠丸大介と稱す。驍勇智略ありて。忠烈人にすくれしとは世のまる所なり。治承四年八月廿七日。衣笠城にて戦死す。ときに年八十九。法諡満昌寺殿と云。維新前までは。朱印の地もあり。且諸侯に三浦某。又紀侯の重臣三浦某。これらの家よりつけとけも有けるか。今はさるともなくてなど。嫗か語るをきけは。けにさもとほへて。御靈明神のついちも所々こぼれちち破れたれと。つくろふこともせず。打すてあり。偕又義明か戦死せし。衣笠の城あといつ方にやと問ふに。こゝより四五町奥に山をのほれり。曹洞宗大禪寺といふ寺あり。城跡は其あたりなるへしといらふれり。やかてその大禪寺にたつね行たるに。此寺の和尚もたま無きほとにて。童子一人留主まてゐたり。此童子のい

ふをきけは。本堂に安置せるは義明の守本尊不動明王にて。後の山に鎮座ましますは。藏王権現。この天平元年の勸請なり。又三浦家の系圖一卷あり。當山の西の方少し戌亥へむきて。樟山といふ山あるほとりを城あととさし侍り。然れとも石垣などやうの物もなく。いつこをそれと。ましかたしなとかたりぬ。かくて歸り道に老翁にあひてとへり。此寺のあたり四方の山々かけて。すへて一面に昔は城郭なりしさまに侍りといふ。さる事にもやあらむ。猶よくとひたゝさまほしかりしかと。物まれる人に。尋ねあはさりしり。ほいなかりき。衣笠村はわつかに三十餘戸の小村なれと。此あたりの總名にて。今は大矢部小矢部森崎金谷平作を合せて。衣笠村となりぬとぞ。かの大禪寺は。山の上において。風景よし。藏王権現は石階を登ると。六七十段の上なれば。いと高く猶其上にいたゝきはありて。海上をのそむと云。此村すへて山の中に。かなたこなたを平らけて。民家ところ／＼に散在す。畑は大かた山のあはひにありて。麥菜種などを植たり。地勢を見るにいにしへの城郭なりしとほほゆ。寺より一町はかり下りたる所に。ちまたあり。北へは横須賀。南へは竹村へゆく道なりとぞ。こゝに茶店あるにまじりかけて。まはらくいこふ。衣笠村の入口なり。これより大矢部を経て。森崎にいてたるころ。日中になりて。汗まといになりたり。やうやくあへさ／＼。もとまじ道を大津には歸りつきぬ。

于時明治二十三年四月十日。

十三。 故従一位源朝臣のひつきの御前にまをすまのひ言

明治二十三年六月七日。三浦千春謹て。故従一位源朝臣の君。のひつきの御前に。うなねつき  
抜てまをさく。去年の春君にまみへ奉りし時。君はあのれにむかひて。そのとしは。いくつ  
になれりやと。とひたまひけるに。答へて六十路あまり二つになり侍りと申しければ。さては  
我と同年なり。そこは元名古屋藩にありて。わかきころ懿公に仕へしなるへし。懿公は我が兄  
にておはせしなりとのたまひしかは。さに侍りかの君尾張の御家をつかせ給ひけるか。おの  
わかきほとにて侍りきと。申しけるに。そゝる昔こひしき御こゝちやうかひ給ひけむ。いとね  
むもころに。さま／＼のおほせこともありて。かたしけなさ身にあまり。涙をさへおとしけ  
るは。またきのふか。ちとつ日のととおほゆるに。あはれうつせみの世は。はかなきものか。  
君はこのさみたれの空に。雲かくれてうせ給ひぬ。いはまくもかしてけれと。君は天地をつら  
ぬくまめ心もて。天の下にならひなきおほみ功を立たまひ。國の柱。石すゑとあふかれ。よせ  
おもくおはしけるも。老て目白のみたちにまりそき。月花を友とし。やまと歌に志をやしな  
ひおはしましては。安らかに平らかに。御身は百世も千世も。かはりまさしとこそ思ひ奉りた  
りしを。悲しきかな。悔しきかな。今よりは御こと棄もうかゝひ得す。御すかたをあふきみむ  
ともかなはずなりぬ。君は我と同年にておはせしなり。さるに君は先立ちて我はのこれり。た

ふとくかしこきはさりて。飛くつたなきはとまりぬ。まことにせむかたなきは命にあそ有けれ。  
あはれかなしきは此世にこそありけれ。此なけきは。ひとりわかなきにあらす。天の下の人  
のなけきなり。されは我身のちちなきを忘れて。かくまのひ言するを。天かけりてもはるかに  
さこしめせと。かしくみかしくみまをす。

十四。 第三回勸業博覽會の記

三月二十六日。あしたより空うらくかに晴わたりて。いとのとやかなり。けふは第三回勸業博  
覽會の開會式行はるへしとて。そのことにかゝつらへる人には。朝またきより。上野に來つと  
ひて。みゆきを待奉る。主上はささいの宮と。御もろともに。午前九時いてましありて。會場  
にのそませ給ふ。御道すから御くるまををかみ奉らむとて。むれあつまれる人々。ちまたにみ  
ちてまはしは。行かひもと。まるはかりなりしと。かくて十二時には。還幸あらせ給へり。こ  
の日のれは。さはるとありて。妻子らを出したてゝやりけるに。いさゝか時おくれ。みゆ  
さを得をかみ奉らざりしは。いとほいなかりけれと。満山はなのさかりにて。白妙に咲みちか  
るは。さなから春の梢に。冬の雪のふれるかとうたかはれて。心も空になり侍りきなど。歸り  
來てかたれば。そゝるにもよほされて。夕つかたよりうかれぬ。上野にいたりつきて。まつ  
南ちもての坂口を見やれば。百千の球燈を高くともしつらね。こなたの橋の際に。いと

るはしき縁門をたかやかにまつらひ。これにも火をともし。右も左も家とに。ともし火の光か  
かやきわたたりたり。山にのほりて見るに。こたひ博覧會によりて。國よりきそひ出したる賣  
物たな。いくらともなくあらたに建ならへたるは。其たなにかきわたしたる。球燈の數かさ  
りもなく。星のときらめきあひて。さすかにひろき山のうちに。咲つゝきたる花の色も。こよ  
ひはかつかつきあさるゝはかりなり。さるに又。所に電氣燈をたかくかゝけたる。其光のあ  
たりももちの夜の月のさしのほれるとく。てりかゝやきて。行かふ人のすかたかたちも。まら  
くまき見ゆ。

よるまらぬ國かとはかりてらす火もおもへは御代の光なりけり  
けふのみゆきまら得し。花の心もおもひやられて。

櫻はなふみほころひてみゆるかなちもふとなきさみか代なれば  
うらくとのとけき春の花さかりかくて一とせあらせてしかな  
なとうちうめきつゝ。その夜はさて歸りぬ。

二十七日。よへより雨ふりいてたり。上野の花おほつかななくて。午後より行て見るに。盛のい  
ろをねたまし氣に。雨のうちそゝくも。けに世の中のならひかくこそと。あはれに心ほそし。

ぬれくも見にこそ來つれ櫻花けふをかざりの盛りとおもへは  
世の中に雨と風とのなかりせははなにはものをおもはさらまし

うへのやま花の平に花見ると我かたちぬれしはなのまつくに  
ぬれ佛のあたりにたゝすみて。

ふる雨もよしやいとほし花蔭に佛もぬれてたてりとおもへは  
雨をは人のいとへはや。馬くるまの行かひも。けふはいとまねにて。まめやかに花見むには。  
こよなき日なりるへし。

世の人の身は張子にもあらなくに雨降日とてなとかいてこぬ  
二十八日。けふも雨ふりいていとほし。午後よりいて、淺草にいたり。観音堂にのほりて。あ  
たりの櫻うち見やりたるけしき。似るものなくいとをかし。

ことさらにぬれても見まくほしきかな花よりつたふ雨の平に  
公園のうちをかなたこなた。見ありくに盛も今はと見へて。

さくら花ちりしきにけり御佛も雪のみやまやれもひいつらむ  
常ならぬ世もかくこそと櫻花ささてとく散るあさくさのてら  
春雨に花ちりかゝる甲斐さかささしなからさそ家つとにせめ  
行かふ人もとたへて。ひるもさひしけなり。

雨ふれい花も見にこそ淺草のあさはひとのころなりけり  
さく花をれもひおもはすふる雨にためしてひとの心ぞを見る

かくて藤井行まろの庵を訪ひけるに。あるし出向へて。かゝる日には。いかてかいましたるなといふ。このいほは。公園の内なれと。いとまつかみやひたるすまひなれは。心のかに。あるしとさしむかひて。うち物かたらふほとに。雨の日のつれくも忘れて時うつりぬ。此あひたに。うす茶たてし出しにけり。そのうつはのいとをかしけなれは。たか作にかととふに。わか手つくねなりといらへければ。

手つくりのうすはいとよし木芽よしのみつゝをれば降雨もよし  
福羽美静翁も。さきつころ。此公園のうちに。さゝやかなる家をもとめ得て。花の盛には來やとらむ。心かまへなれば。遠からすこゝにこらるへしなといふ。あるしは。福羽翁とは。同じ國のうまれにて。いとむつまじさ中らひなるとか。さて歸るころ雨なほやます。雷門のあたりより。馬車にのりて。

のりあひの車にたすけのせられてこのふるあめに花見してけり  
此馬車のうちに。さまゝの。ひろめとものかきてはり出しあるか中に。向島の遊園のを見れば。隅田川花の名所は松小島。わつか貳錢のあそひその料。とあるか何とはなれと。あつから歌のやうに聞なざるゝもあかしかりけり。道のついてなれば。又も上野に立よりて。

あつとつ日も昨日もけふもさつれともあかぬは花の木陰なりけり  
花にはすきものゝ名やたちなむ。さてもかく打つゝきたる春雨に。ぬれまをれたる梢の。やう

やうちりかたになりゆくこそあはれなれ。何かし法師か。花もやうくけしきたつほとこそあれ。折しも雨風うちつゝきてといへるは。けに此ころの空をかし。東照宮のやしらの前に來てみるに。まめの内の花も。猶たのみかたけなり。

天の下もほひしほととの袖もあらはあめには花をまかせさらなむ  
けふはたゝ神のみまへにねかふと花のいのちのほかなかりけり  
白妙ににほへる花のこのまより見ゆるはいけのみとりなりけり  
石のきたはしを。西さまにくたれば。不忍池なり。辨才天の社は。中島に見えて。汀の柳うちけふりたるもをかし。池のほとりをめぐりて。たそかれ時になむ。本郷の家には。かへりつきぬる。

### 十五. 名所月といふまこと

今宵は十五夜なり。近からは更科の山にも遊び。須磨明石の浦つたひもすへかめれと。はるけき海山をへたてければかひなし。せめては。向ふまきあたりになに。せうをうせはやと。また暮あへぬほとより。友とち二人三人して出たるに。はし塲のわたりするころ。月まろ見へて。ひむかしのかたあかるうなりぬ。かの庵崎。まつち山なといふは。このあたりなりといへど。まとはこゝにはあらて。そのかみ辨基か。ひとりかも寝むとよめる。すみた河原は。紀の國にこ

そあめれと。一人かいへは。又一人か。そはともあれ。業平の中將の都鳥に。おととひけむは此川にて。紀の國よりは。かへりてまゝこそ。こよなき名ところにはあれ。といふもをかし。かゝるあひたに。月やうく高くさしのほりて。空にはちりはかりの雲たになく。川上はるくくと。とほまろく見へわたりたるけしき。何にかはたとへむ。

水やそら空や水ともわかぬ夜にあそふは月のみやこ鳥かも

かれかはしと足とのありきも。かくれぬ夜のさまなり。かくて打きようしつゝ。かゆきかく行。あゆみつかれて。人芝生にありて。いこひかてら。歌よまむとするに。いつこよりか若ものともあまたひれ来て。酔こゝちにいと大まゑして。あらぬ歌ともうたひのしれは。打まされて思ひよりしことしも。みな消うせぬ。折から月も雲間になりぬれば。

あなにくや空の月さへむらくものかゝるさはりはある世なりけり

なと打つふやきてこそ歸りしか。于時明治二十五年九月十九日。

### 十六。野徑時雨といふことを

神無月のはしめつかた。残る紅葉を尋むとて。友とちひとり二人して。小倉山のあたりにゆく。と有けり。をりしも。小春の空うち晴てのとやかなれば。かなたこなたせうえうして。あるは琴ひき橋を過ては。小督の君か明月の夜のつま音をおもひ。あるは小倉山をわけては。定家の

卿か時雨の亭のふるとを志のひ。見るもの聞とにつけ。さまくおもひいつるととも多し。山の紅葉は大かた散過たれと。あなちち盛をのみ見るものかはと。遅く尋ねつるまけし魂に。ちち葉を拾ひて。ほめのしるもをかし。

小くら山神の手向とちりにけり紅葉のにしきかせのまにくといへは。また一人か。

小くらやま散るもみち葉の錦にはまきものなしと神もみるらむ

かくてかへさは嗟峨野にかゝり。枯のこる尾花。りんとうの花なとふみわけて。ちもしろき野中の道に。うかれゆくほとに。さはかり晴たりし空の。にはかにかきくもりて。はしたなくうちまくれさぬ。あなくるし笠やとりせむ陰もなきをと。さわさまとひて走るに。からうして一ツ屋のあるにたとりつきつ。門に立よりて袖まほりなとしつゝ。さても思ひかけぬ時雨よなど。さしめきいふさゑや内に聞へけむ。十二三はかりなる女の童出きて。こちりてといふけはひはつかしけなり。さし入りて。やをらすのまに尻かけて。うちのやうたいを見るに。すへて人すくなにて。心ほそけなるありさまながら。窓のもとには。文机に硯りやうしを置き。かたへにつくし琴立かけたるなど。いとこゝろにくし。ふすまをへたてて。けはひなどは。つれく聞へたるを。ゆかしとちもふに合せて。かなたより空たきの。いひまらぬ句ひの。さとかをりいでたるこそ。心とさめきていとをかしけれ。家あるしは女なめりと見へて。人目なき山里と

もいはす。よろつに心つかひしたり。木立ものふりたる庭に。もみち散みたれ。やり水のとお  
いはまにむせひて。いはむかたなし。かゝる所に。いかてすこすらむと。心くるしく。とかく  
思ひめぐらすあひたに。時雨のあめはやくも。よそにふり過ぎて。ゆふ日の影。花やかにさし  
わたれば。

契ある一木のかけのやとりそとちもへは雨もうれしかりけり  
とひそやかに口すさひつゝ。心のこしてこそ出にしか。いかなる人の家なりけむと。今もわす  
れかたくてなむ。

### 十七。 かまくら郡片瀬に遊へる時の筆すさひ

八月五日。巳時はかりにかた瀬につきぬ。此里は。海にそひて。鎌倉にかよふ大路なれば。さ  
すかに旅人やとす家ぬ。あさものうるたななとも見えて。にきつしく。東は腰越の里につゝさ  
て。あまのやとも軒をならへたり。龍口寺といへる。寺の前のちまたより。すこし引いりて。  
海ちかく岡へによりたる家をかりて。わかたひの。旅ぬのやとりとさためつ。松かせにたく  
ひて。波の音はるかにきこゆる方に。尋ねのほれば。日さかりも猶いとすしく。なか／＼春  
秋の花紅葉の盛なるよりは。たゞそこはかとなくまげれる。陰ともいとをかじきに。かなたの  
松の。むら／＼と立るかたを。うしろにして。ものさひしう遊りなしたる。かやふきのろうめ

く家あり。柴垣まわたして。庭の木たちわさとならぬ。せむさいなどのこゝろはへ。よしあり  
て見ゆるは。かの入道の。明石の家もおほえて。琴の音なども。さくらむこゝちをするや。

かよふらむ松の風こそゆかしけれ岡への宿は誰とまらぬと

後にさけは。曾根何かしか。なり所となむいふめる。さらは松によしある家なりけりとをかし。  
この岡をこえて。濱邊にいつれば。はる／＼と。もの／＼とこほりなき海つらにて。さし向ひ  
に。由井かはま。稻むらかさきなど。手にとるやうなり。すこし打かすみたるは。三浦みさき  
なるへし。右のかたには。くけぬま。大磯の浦。など見へわたりて。あかすおほゆるに。まし  
てけふ富士の山のいたゞきの。雲間よりさしのそきたらむやうに。ほのかにあらはれたる。所  
から殊になつかしう。をかじきうらのみるめなりけり。

雲の波立もさへなは富士の山浦のみるめやかひなからまし

日もやう／＼未の盛りになりぬれば。うしほにあみてむとて磯におりゆく。なまきには白き、  
くろき、あるはすはうなる。なま／＼の色うるはしき。貝石とも。時ちらしたらむやうなるに。  
青やかなるうきみる、なのりもなどの。波にうちあけられて。みたれなひけるも。いとさよけ  
なり。玉やひろはひなとと。忍ひやかに打すしつゝ。とみかうみ。みれば。沖の方ははるはる  
と。雲のつゝきて。かさりもまらぬ大海原より。吹來る風は。浪とともに秋やたつらむとと  
へまほへて。夏ともなきに。まして其うしほにあり。かつきたるこゝち。たとへむかたなく。

罪も病ものこりは。あらしといふはやかに。すしなといへば。ちろかなり。  
からき世にまつ病もわすれけり此まほらみにけふはうかひて  
むつかしき汗まみさるもぬき捨て波にとひいるそのこゝちよは  
をとめらは白きすしひとへきて笠きて波にかつきをそする  
沙にいりいては磯にはらはひてれもひなけなる人のさまかな  
白かみはいよ／＼まろしまほ風にふかれていろは黒くなれとも  
これなみに多かれと。わつらはしとて。昔はふきつ。

### 十八。江の島かたり

ある日。江の島にもせむとて。あしたのほとに。れいのまほあみ。ますましていてたつ。けふ  
は。海の面いとまつかに。なきわたりたるに。此浦人にやあらむ。地引あみといふ物。引の  
しり。とかうするなとも見ゆ。濱邊の道は。島までひとつ／＼の。自すなにて。をりしも。  
潮ざめによりくる浪。なきさのほりて。足もとをひたすなるを。かち人は打けふしつ。ふ  
み行ほとに。思ひかけす。ひと波高くおそひくるを。あなやとさくるひまなく。をむなとちは。  
裳すそぬらしなとすめるも。中々すしけにてをかし。道はたはひわたるほとなれば。かた  
とさのまにいたりさぬ。此江のま。今はかう、くかつ／＼なれとも。いにしへは。海の中に

さしはなれたる。島にてなむありしといふ。けにさもありぬへき。ところのさまなり。島の口  
にとりわたてり。それよりのほりさまに。壺丁はかりのあひた。たてつらなれる家ぬ。ところ  
せきさまにて。むね／＼しきは。大かた皆やとやなめり。又貝細工といふものうるたないど  
し。坂をのほりたるうへに。邊津宮とて。いとかめしき御社。立たまへり。これより奥に。  
ちなしさまなる。みやしろ。二ところちはしますを。中つ宮。奥津宮。とそ申すなる。いつれ  
も。木たちものふり。神さひたるさま。いととうとし。

かなたの切きしにありてゆけは。海にのそみて。おほいなる巖。ならひそはたちて。あるは屏  
風を立たらむとく。あるは獅子のくるひ。とらのいかれるとく。目なれぬさま。から書にかき  
たらむやうなるに。其いはほのもとに。波いと白く打よせて。春もええらぬ。花をさかせたる  
など。めつらかにをかし。岩屋のあるに。いりて見れば。いと奥ふかふ。うちはをくらくて。と  
もし火のひかりに。やう／＼見れば。さ／＼やかなる社あり。辨さいてんといふなるへし。あま  
とも此ほとりの岩の上などにて。海に入りて。鮑貝とるわさをして。旅人にあしをこふ。ま  
とはかの貝をこに入れて。海にまつめ。たくはへまきてとるを。さもまらて見る人もあるらむ  
かし。ちこかふち。といふところのあなるは。むかし白菊といひしちこ。わりなき戀ゆゑに。  
身をまつめしふちとなむ。かのちここに來て。道にあへる島人に。ことつてけるやうは。も  
しわれを尋ねてきたる。法師あらむとき。これを見せてよとて。一首の歌をなむのこしむきけ

る。その歌

老ら菊を志のふの里の人とはし思ひ入江の汐とこたへよ

はたして。一人のほうし。跡より尋來て。是を見てまことに悲しとや思ひけむ。やかて其おな  
しふちに入りて。みくつとなりけるよし。語りつたへ侍りと。島人のいふは。いともあはれ  
なる。昔かたりになむ。金龜樓にのほりぬ。こは島のこたかき所の。海に向ひたるかたを。平  
らにならして。かまへたる家なれば。うしろは山松の蔭まけく。前は目にさへさるものなく。  
はるくとして。けに海山のなかめを。ひとつにあつめたる所とそいふへき。此たかとのさ  
ま。見ところありといふはかりにはあらざなれと。ところにつきたる。まつらひともあるへか  
しう。まなしたれば。かた瀬のやとりなとよりは。こよなくはれくしうおほゆ。くたもの、  
茶など。めやすきさまにもていて。あるしのをとこ。なにやかやと。けいめいしありく。あ  
つければ。湯あみなどして。ひんむしのかたの。かうらむによりぬて。沖のかたを見やれば。  
いさりの船とも。ほこらしけに。並ひうきて。釣するあまの。袖かへるなとも見ゆ。午になり  
ぬとて。をしきもて出で。飯すむ。あはせの魚は。やさたる。なまなる。いとあざむらげきぞ。  
てうし。ことそきたるものから。うつはとも。きよけにて。いとよし。かくてひちを枕に。ね  
ふるともなくまほ風にふかれ。ふしたるこゝ地。たとへむかたなく。かんたんのまくらも。あ  
りはとおほゆ。さはいへ。かゝるところに。長ぬせむり。たつきなきわさなれば。伴ひつるむ

すめにもよほされて。西日にならぬさきにと。いとさかへりぬ。

### 十九。なるの災にあひて失にし人々の靈祭りに手向の言葉

世におそろしき事は。さま／＼あれども。なるのわざひはかり。恐るべきものは。あらしか  
し。いかつちは夏おこり。野わきの風は秋多けれと。なるはいつといふ時わかす。夜中曉をい  
はす。不意におこりて。甚しきは。地さけ。水わき。家たふれ。人おされて。あまつさへその  
倒れし家ともより。火もえ出で。市、まち、宮、寺、の嫌ひなく。ふき失なひ。人の命を亡ぼす  
と。あまたなり。かゝるためし。ふるき書に。多く見えなれとも。まさしく。眼前にこの災の  
起りしは。去年の十月二十八日。の朝またきなりけり。中にも岐阜縣は。このなるのもとにて。  
美濃國根尾谷の村々を。はしめて。大垣、竹ヶ鼻、笠松、岐阜、高宮、などことにはけしく。其  
時天地なりひいさ。大浪のうつか如く。山もをかとふるひ動き。今や世も亡ひなむと思ひしか。  
あはやと見るまに。幾千々の家を倒し。いくちの人の命を殺しけむ。其ありさまの恐ろしく。  
すさまじかりしと。中々語りも盡しかたければ。まして筆には書つゝるへうもあらず。今も目  
をとつれば。まほろしにうかひ。人とかたれば。身の毛よたちて。こゝろおののき。また其折  
にうたれも、やかれもして。むさむにも。亡ひし人々のうへを思ひ出れば。そゝろに悲しさ身  
にせまりて。なみたあさへかたし。ことし十月廿八日。岐阜日々新聞。社員諸君の催しにて。



去年なるの災にかゝりし人々の靈をなくさめむと。岐阜市その所にて。盛なる祭典を行ひ。かつ手むけの詩歌を。弘く集めらるゝと聞て。あのれ今此東京のかりすまひに。住むといへとも。岐阜は故郷にしあれば。其日は殊さらにも。まうてまほしけれと。さはるとありて。思ふに任せねは。せめて拙き一言をたにと。まこゝろのかたはしをのほへて。玉串にとりそへて。手向と爲すになむ。

なののあとの焼野は里となりぬれとかへらぬ靈の行へかなしも

## 二十。つくはねの考

つくはねの。わか美濃國武儀郡大矢田山の名産なり。本草綱目啓蒙に云へるを見るに。此木種々の名稱あり。天台山にては。こきのこたからまむといひ。仙台にては。こきのき、はこのきといふ。其葉はいほたらうの葉に似て。葉のさき尖り。二葉つゝならひ出つ。夏になりて枝の先に花を開く。其花四瓣にして。大きさは三分ばかり。色は薄緑なり。花咲きて後。實を結ぶ。實の大きさは大豆の如し。實の上に細長き葉四個ありて。春の始に女兒の弄ぶ、羽子の状の如し。故につくはねと名く。鹽漬にして貯へ置て。これを食ふに。其味榧の實のことしと云り。大矢田のも之に違はず。鹽漬は年の始。八寸などに盛て。用たる最よきものなり。忍艸といふ書に。或本草者の云へるは。吳越春秋に胡鬼樹「ウキキ」と云ふものあり。此つくはねのまとなりとかや。又本

草綱目の都念子。なりといふ人もあり。孰れか是ならむ。京都近邊の山には。見へ渡らす。叡山の無動寺山、下野の日光山にあるよしいひ傳へたり。山法師の歌に『うらむたらや無動寺山のたからまむあへては魚にまさりこそすれ』。つくはねの一名をたからまむと云へりに見へたり。又常陸の國の筑波山に多くあるよし。さる故に。ある人は。つくはねの名は。筑波山によれるなりといへれと。恐らくは非ならむ。此木北の國々にては。肥太りて。榧の木の如きものありとと。山本北山翁の著したる詩藻行潦に嶺表録異を引きて。都念子をつくはねとし。都念子。また到粘子。とも云ふよし、記せるは。何たれりや如何ならむ。越前の福井の人の云へるは。わか番里なる福井を。西に距るまると七里ばかりに。越智山といふ山あり。此山につくはねさうといふ草ありて。其狀女童の弄ぶ羽子の如し。是は木に非す草なりと云り。木草ともにつくはねあるも。珍しといふへし。爰に大矢田の里なる。大塚氏はすきたる人にて。秋まると山深く尋ね入て。此つくはねの實を採來りて。鹽に漬け。貯へ置きて。求むる人あれば。わかち與ふるよを。心すさひとせり。去年の秋。おのれにかの鹽漬のつくはねを贈りて。是か考を書てよと。切に乞はるゝに。辭みあへず。はやう聞おける事とも。思ひ出るに任せ。かいまるして。其實を塞くになむ。

二十一。きつの説

わか友井手今滋か。山林の事をつかさとりて。青森にありし頃。もとの津輕領の民。官林の樹木を。ぬすみ伐しとあらはれて。たゞしかむかふる事ありしに。今滋其男を呼すゑて。伐取し木は。いかにしつると問けるに。きつに造り侍りぬといふ。きつとは。いかなる物ぞと。重ねて問ひけるに。木をくりぬきて。水をたくはふる器なりと答へたり。津輕あたりにては。水ためのうつはを。きつといふ。いとめつらしと。今滋語りぬ。伊勢物語の歌に。『夜もあけはきつにはめなんくたかけのまたきに啼てせなをふりつる』と東人のよめるは。此事ならむ。藤井高尙の新釋にもまかくいへるはまことに然なりけり。

二十二。皇太子殿下の功臣をまたひ給ふ事

ことしきばらぎに。三條のちと。かくれ玉ひにしかは。さく花も色をうしなひ。空もくもりかちに。物さひしくうちまめりて。またなき世のなげきになん侍りける。東宮は。あたみにおはしましける折なりけり。此とをきこしめし。おとろきたまひて。あはれをしき人をも失ひけるかなと。いといたう。なげかせおはしましけるか。其ころ。伊達宗城ぬしうま子をつれて。まうのほりけるに。東宮は。打むかはせ玉ひて。うせにし三條のちと。一すちに。國を思

ふころさしあつく。其身をまもるおとろににして。まあとに臣たるもの。かゝみなりしを。うつそみのいのち。かきりありて。あへなくうせにしあそ。なげきてもあまりあるとなれ。今はまたふともかひなし。せめては。世にありしほど。かきあさしふみの。一くたりも得まほしとこそ御思へとて。御なみたを。一目うけておほせられし。御あももちにせちなる。おほん心のほともおしはかり奉られて。宗城ぬしをはしめ。かたはらに侍りし。太夫會我のぬしなども。そゝろ袖をぬらし侍りさとかや。功臣をまたはせ給ふ。いと有かたき。御心はへにこそ。

二十三。隨意莊觀櫻の記

墨田川のほとり。橋場の里に。別業をかまへて。おはす君ありけり。さても此はしはといふ所は。昔橋有し跡なりといひ傳へたる。けに夫木集を見れば。康元元年。かしまの社に詣けるに。隅田川のわたりを見れば。かのわたり。今はうき橋をわたしたりければと。はしかきして。光俊朝臣。『すみた川むかしはさかす今こそは身をうき橋のあた世なりけれ』とあり。此ころは。橋有しなるへし。はしは。今戸なときけは。何となう。名もなつかしきこゝ地そするや。此橋はの里におわす君を。誰ならんといふに。郷三位殿と申して。みのゝ國より出て。明治のあらた御世につかへ。年月をいそしみかさねて。つかさは大藏次官の高さにのほり。位は正三位のたふときを極め。功なりて今は事まけさつかさをさり。まつかに世を遁れて。一筋にみやひの道

に心をやり。老をやしなひ給ふ君にてなん有ける。ころは四月の廿八日といふ日の事なりけり。残れる花をまたひ。暮行春を惜まむと。おほしけるにや。此日數ならぬ千春にしも。まう來へきよし有ければ。午後三時過るころ。其なりとてにいたりけるに。松の門三草子。其外にも二三人のまろうと。すてに來て。高とのの上に。あるしの君とさしむかへり。おのれもはひのほりて。まつまの高とのより。打見わたす氣色。心言葉もおよはす。名にたかき墨田の川水。垣にそひて流れ。富士筑波は。遠く西ひむかしの空にそひへ。川の向ひに牛の御前、白鬘の森なといふ所見へわたりて。緑またたる若葉の梢の。うるはしきにも。花のころ思ひやられ。また此前を白き帆かけたる船ともこのきつれのほるも。折からめつらしう。すていひもてゆけは。かきりもあるましくなむ。あるしの君。ちと下へありて。庭めぐりし給はんは。いかにとあるに。人こそはよき事に侍りといひて。庭にありたては。庭にはかとおる石をすゑ。木草をよきほとに植て。其間よりなかれの見ゆるなど。いひまらぬ心老らひなるに。あうよりて大いなるさくらの。暮行はるも老らすかほに。喉にほひたるか。二もと、三もとありて、其蔭に椅子たてし。高机をまうけ。机の上には。巻たるけふりくさに、まぢといへる物をとりそへたり。人もわれも。いとひろき庭をめぐりこうして。やをら此椅子に尻うちかけて。あふき見れば。薄くれなゐの入重櫻にて。こは普賢象といふなりと。一人かいは。さはこの青葉の中に。思ひかけすかゝる花をみるも。ほさちのめくみにこそあらめと打たはふれ。けふりくゆらせ。茶

をのみなとまつい。時の移るもまらねは。主の君いさたまへこなたへと。あるにまかせて。出居の方に入りて。設けのむしろにつらなりぬ。ゆのまつらひ。よの常ならすめてたきまと。いへはさらなり。こゝには國のくしき石ともをあつめあき。やまともろこしの人の。筆の跡をかけつらぬ。すへてもふにまかせ。心になへたるすまひなれば。隨意莊とはいふなるへし。東おもての紙さうしひきはなして。外のかたを見いたしつゝ。まろうとも。あるしの君も。打とけて。地よけに。物かたりなど。とかくするあひたに。日も夕くれになりて。酒あたゝめ。海山のさかな。何くれもていて。あるしせらるれば。此あるしのよきに。人こそおほへす。杯のかすをかさねつゝ。や酔のめくりたるころほひ。次の間にあらはれたるは。一人のわかきをのこにて。これを名たゝる。はなしかのなにかしなりなる。まつまつかに一禮して。扇まぎくり。まはふきしつるおももち。あやしく見ゆ。なにまどにか。口こもりいひ出てたりとおもふほとに。やうくこわつくりひされはみ。猿かうこと。さまくはなしもてゆけは。かたへにけたへす。口おほひてわらふもあり。一段をばりぬれば。聞く人手打ちたゝき。聲を放ちてほめののしる。ままゝに興あるこの夜のおそひなりけり。さてあるしの君。すゝり短冊なとりいたさせて。けふまで庭の櫻の咲きのこりて。まろうとを待ちつけしは。思ひのほかのさちなり。されは水のほとりの遅さくら。といふまを題にて。あのかゝ歌よみてよとあるに。いなみあへす。こゝろまゝに。おもひのまを。うめき出てたるも。またひとつの興にてなむありし。

大かたはちりての後のねと櫻はるをまからむ川つらのやと  
行く春をこの川岸にせきとめてさける櫻もさるありけり

千 春

墨田川のどけき水にかけとめてのさる櫻もひさしかりけり

不老門のまへにはなといふを思ひて

めくる日の影さへあそきこの宿はいつまで花も咲匂ふらむ

まつかなるやとには風も外なれば心のとかに花やさくらむ

またこの隨意莊の夕のけしきを

墨田川みきはのあしのめもはるに見へてかすめる春の夕暮

あるしの君のかきて出されける今様

上野あすかやむかふし花はいつしかちりはてぬ心のまゝのたのしみはすみたの川にかけら

つじいろかはえあるおそさくら春のかたみとささぬらむ

など口すさひつゝ。只ひとり見むも。せむなさにおもひ。近きあたりの人たちをかたらひ。

けふはあもしろうあそび楽しみ。水邊遅櫻てふ題にて。歌よみ給はれと。こひしまゝにおのれも。

すみた川流るゝ水をかゝみにて色香もうつる遅さくらかな  
我がそのゝ水にのそめる遅櫻春のなこりとほこりかほなる

### 二十四 上有知里人梅村某か家の植石の記

百小竹の。みのゝ國。夕つく夜をくら山のほとり。上有知のさとに。世へて。其名もかくは  
しき梅村なにかし。去年の春家改め作らむとて。ふるきをこぼちけるに。むな木のあたりより。  
ふとまろひ出て。匠らをはしめ。それかれ人もほかる中に。此家あるしのゐたる前にしも。落  
たるものありけり。何そと手にとりて見るに。いとふるひたる石の。ちのつから植のかたちした  
る。そのさま人のたぐみもてなし得へくもあらず。誠にあやしく。ことにみゆれば。いみじき寶  
得つと。あるしよろこひにたへす。とく新なる屋。造りみかへせ。やかてそこをさめて。扱な  
んそのにひむろの名を。植石齋とつけたりける。さるはかく甲子のとしにさへあひて。この植  
のあらはれ出しと。まさしく大黒天の御心にて。永く此家を。まもりさきはへ給はむるしな  
るへし。昔大津宮の御時。淡海國栗太郡に。磐城村主殿といひし人の庭に。空より鑰匙ふたつ  
ふりたり。般これを得てのち。家いとゆたかになりけるためしもあなれば。いまよりして。  
梅村の家の世繼。うみの子の末にいたるまで。此植のちもてのとく平に安らに。此石のかたき  
かどくときはにかきはに。富榮えて。此里のしつめともなりなむものぞ。あなたのし。あふけや。

此神のみめくみ。かしてめや。此神のたまもの。

二十五。水邊卯花といふとを題にて作れる言葉

夏のけはひのたつまゝに。前栽の本草もやうくしけくあをみわたりて。時鳥のはつ音またるころ。夜一夜ふり明きたる雨の今朝はやみて。朝日花やかにさしたるに。やり水のあふるはかりなかれめくりて。たえくいにしまにむせふとなどの。聞ゆるもいとすしけなり。すこし日たけぬれば。其水のほとり近う咲きなひたる。卯花の末いとちもけなりつるに。露のおつれば。枝うちうこきて。人も手ふれぬに。ふとかみさまへあかりたるは。雪の降りかゝれる竹の。日影まちて起かへりたらむやうにて。いみしうをかしと見ゆるに。ねふたかりつる目も。いつしかさめはてし。

手すさひに清水むすへは卯花のなみは袖にもかゝりけるかな  
卯花の雪のかけみるやり水はむすふもさむきこころこそすれ

なとうちうめきて。何心もなう眺め出せるしりへに。身まろさして。はしためのはしたなく。朝けにて侍りと。ちとろかまつれば。こたひは興さめてこそいりにしか。

二十六。初螢を見る詞

卯月のはしめつかた。物へまかりけるに。夕月夜のおほつかなきほど。里の中道に。うの花かきの。いと白う咲きつゝきて。われはかほなるも。折からさすかに。いとをかしうて。たとりゆくまゝに。いつこともなく。かすかになかれの音きこゆ。さては小川のあるなんめりと。思ひしもしるく。さしやかなるいた橋、わたせる所に出たり。田面はるくと打はれて。この流ひろからねとも。底ふかく青みわたりて。水いとさよし。岸には柳くぬきなどの。みとりしたるはかり。まけりあひて。葉分の風。そよくとたもとに吹かよふも。なにとなくなつかまう。いとをかしき所のさまなり。まはしたすみて。とみかうみ見れば。西の山のはに月も入りて。木下闇のをくらさに。川上のかたより。ほのめく光の。高く低くとひちかふなるは。あなめつらし。かゝるあたりには。はやう螢のもを出たるなりけり。ほしか川邊のと。打すしつゝやうく近くあゆみよりて。扇とり出て。さしまねけは。ほたるはなかくに高うとひ去りぬ。よしやその光。袖にはつゝみ得すとも。いつの年よりも。はやく見出つるは。田舎ありさしつる道のさちよと。ひとりこちてなん歸りし。

二十七。時鳥を尋ぬる言葉

さつきのはしめつかた。あひしれる人の近きころ世をのかれて。あすか山のほとりにこもりすめるもとに。これかれいさなひて。青葉のかけも見かてら。時鳥さしにとて。ふりはへとふ

らひけるに。いとかりそめなる庵引むすひて。ものあはれなるさまに住なしたり。さし入りて見  
れば。竹あめるすたれ巻あけて。まとのもとに文机によりて。打なかめ居たるほとなりけり。  
いたくよろこひて。月ころへたゝりし。あひたのとも。何くれかきくつし。物かたりしつゝ、  
此春の花の時にはさりし恨みなど。かへすゝいふも所からことほりにおほえたり。折ふし  
かさねのうつき盛なりけるにあるし。

時鳥まつくさはひとなりにけりけしきはかりに咲るうつきも  
といへるに。伴ひしひとりか

ひとこゑはこゝにをまたむ郭公うの花かさのかけにかくれて  
かくいひしろひつゝ。とかくするあひたに。永き日も暮近うなりにければ。口をしくさかて歸  
るへきにくそと。心をあとに残して出んとするに。あるし引とめて。今まはしなとなこりをし  
みける。折から向ひの岡の杉の梢に。それかあらぬか。一こゑほのかに聞えしは。うれしなと  
いへばならなり。

やすらはてかへらましかは時鳥さかてやむへき初音なりしを

## 二十八。朝子規

あかつきかたより。ふり出し雨に目さめて。今朝はいととく起出たるに。庭の楓のわか葉。み

とりまたゝる計りなる。梢よりこぼれ来る。露いときよくすゝしけなり。かゝるをりにさそ。  
去年も啼しかなど。ひとりこちつゝ。うちなかむる雲のあなたに。一聲ほのかにもらしつるは。  
あはれ情ある鳥かなと。心にまみて、今は花に鳴し鶯の。なこりもわすられにけりな。清原の  
おもとか。うくひすに郭公はおとれりと。いふ人こそいとつらう。にくけれといひけんこと葉。  
けにとおほえて。いとあそをかしかりけれ。

## 二十九。紅葉をまつ言葉

世中のうけくに。あきぬとはあらぬと。老ては人にままらばむかうるせきに。都はなれたる  
かた山里をもとめて。谷の流をかけひにひき。岸のおち葉を薪に拾ひて。朝夕のけふりも心ほ  
そく。年ころすみわたりけるか。此秋のはしめつかたより。いさゝかこゝろのなやましさに。  
大かたたれおめてのみ侍りければ。いつしか前裁の萩。なてして。女郎花。などの盛もむなし  
く過ぎ。枕に近き虫の音も。やうゝなきかれて。此ころは時雨てのみ。かきくらす空のおほ  
つかなきこゝちするに。やをら南の窓おし明けてみれば。一木二木立る楓の梢の。日むきの方  
より。かつゝ色つきそめたるは。ふかくなりぬる。秋もまられて。そゝろに哀ふかし。かゝ  
る折から。都より便りありて。もろこしへ遣はし。わか皇軍かの國を討きたかへて。今は名  
たかき旅順口といへる所をさへ。せめとりぬと聞えければ。世捨人の身ともいはす。よろこひ

いさみて。さてもわか天皇の。御稜威こそかしこかりけれど。手のまひ足のふむ所をしらす。なやままかりしあし地。とみにいえて。忘れたるやうになむなりぬる。あはれわか庭のみちと。今かく片枝そめ出たる。初入の色の千まほになりなむも。とほきにはあらさんめれは。かのいろめきたてるもろこしのいくさ。から紅にふりいて。ちりくりにちりあかれむ目も。今のまにこそと。はるかに日の入るかたを打守りつ。またるゝ物は榕のみちになむ。

### 三十。長良川にてうつかふわさをかける繪巻物に

#### かきける言葉

應徳川侯御書

すなとりのわさ。さまくなれと。鶴川あそいとをかしけれ。此わさいにしへは。國にもはら行はれたりけむを。物かはり星うつりて。今は世にすたれにたり。さるを。たゝこの美濃の國の。なから川にのみ。昔のまゝに傳はり來ぬるは。ゆゑあるとになむ有りける。そもく鶴をつかひ。あゆを捕りて供御に奉りしより。始めて。後の世となりても。たえすこのわさをいとなみ來つるか。その間には。盛衰なきにしも。あらざりけらし。かくて元和のはしめの年。東照公。大阪の軍より歸り給ふ道に。岐阜にとまりて。長良川に鶴をつかはせて御覽あり。秀忠公も。又此わさを見給ひき。是よりさき。慶長八年といふに。兩公へ鮎鮠を奉りけるに。いたくめて給ひて。小瀬村、長良村、の鶴匠ともに物かつけ。又後とまでも。年毎にこかねを

四〇三

四〇四

賜ふとになむなれりしを。いくほともなく。これらのところくは。すへてわか尾張の君の。御領となりしかは。其鶴匠ともを。ことにいたはり。ふちまたまひて。年毎に鮎鮠をとらしめ。鮎につくらせて。將軍家にたてまつらるゝと例となりぬ。これによりて。小瀬長良の鶴匠か家。繼ぎ仕へ來て。そのわさ世々に絶へすなむ有りける。これしかしなから。わか尾張の代々の君の。あつさ御惠によれるものなり。かくてそ此長良川の鶴かひ。今の世までも傳はりて。あめの下にならひなき。名ところとなれるのみならず。近くは大やけより。御獵場と定められて。年ごとに鶴のふくみたる鮎鮠を。おほみけにさへ奉る事となりぬるは。およなきめいほくにて。鶴かひのすくせを。世にいみしかりけれ。

長良川は。美濃國郡上郡より出て。岐阜の伊奈波山の。ふもとを流るゝ川なり。昔はいなはかはともいへり。此川鮎鮠ほく。味はひとにすくれたり。鮎は春の末ころよりちひたちて。夏のあひたやうやく生長し。秋のなかはにいたるころほひ。こえふとりて。一尺にあまる物あり。鶴つかふわさは。あゆのちひたちをはかりて。初夏の頃にはしめ。秋の末。子をすりでちとろふるにいたりてやむ。此すなとりを。夜川たつともいひて。夜とに船をうかへ。宵やみは月のうつるを限りとし。曉やみは月の入るをまちてかひくたすなり。鶴飼の舟は。すべて十二艘あり。一艘ごとに篝火をともし。鶴匠一人へさきにたちて。鶴十二羽をつかふ。又一人船のなからにありて。鶴四羽をつかふ。このほかに。棹とり二人ふねをあやつるなり。鶴はちのく首に

つなをつけて。其綱のもとをひとつによせ。左の手にもちて水に放ちいる。此つなをたなはといふ。あまたの鵜は。鮎を逐ひて。あのかむきく。水底にかつき。とさまかうさま。行ちかふまゝに。蜘蛛のいとく亂るゝ手なはを。鵜匠はひまなくくりさはきつゝ。片手には鵜のくゝみたるあゆをはかせて。又水におひいれ。簀に松をたさそへなとして。少しのすき間もなく。立はたらさふるまふさま。見る目もあやなり。かゝる船をうけ並へて。こきくたすなれば。かゝり火のほかけは。波をやき。雲にうつりて。其けしき物にたとへひやうなし。又時によりては。まさかりといふことをす。こはあまたの船をひとつにならへて。川のとみをとり廻し。あるひはのほり。あるひはくたり。かゝりの火花をちらまて。我ちとらしと船はたを打たゝき。いさほひをそふれば。ひるよりもあかき水底に。あゆは恐れて度を失ひ。かなたこなたに遁まどふを。百にあまる數この鵜は。たかひにさきをかけ争ひ。この平瀬。かしの片ふちに。ちひよせ責つめて。吞ては浮ひ。はきてはまつみ。しきりにとりてやまざるさまは。たとへは。たゝかひにかたきの軍やふれて。にくるを追ひ。走るをうちて。右往左往にちり亂れたるに。さも似たり。かくてこのとはてぬれば。鵜匠はあまたの鵜を引あげ。船はたにならへきていこはず。此時鵜はついで正しく。いづもさなるはさきに。後なるはつきに。いとむつまじけにお並ひて。少しも其次第をみたさず。これ見れば鳥にも猶禮義ありて。人恥かしくさそ。

鵜かひを見む處は。岐阜の伊奈波山。の麓あたりをもともすくれたりとす。此山の長良川に臨める風景。もろこしの書にかけける。赤壁なといふらむ所おほえて。いと面老ろきに。夕さりつかたより。あつさをさけかてら。小船に棹さし。山陰のなかれに浮ひて。わり子さゝえなとゝりいてゝ。盃めくらすほとに。やうく日も入りはてゝ。夕やみのをくらき空はるかに。川上のかたあかりて見ゆれば。あはやとまつほとに。船ふせ山といふ。山のあなたより。あまたのかゝり火。波にうつりてはなやかに見えくるけしき。たとしへなし。やかて鵜舟近づけは。眼のまへに鵜のとりたる鮎をこひとりて。火にあふりて。肴とするをかゝりやき。と唱へていとめつらしきに。又一興をとへて。盃かたふくるもをかし。文明のころ。一條禪閣兼良公は。厚見の郡江口にて。鵜飼のすなとりを見。此かゝりやきを賞美して『とりあへぬうかひの鮎のかゝりやきめつらとも見つ哀ともみつ』と詠せられし事あり。夫よりこのかた。高きとなく賤しきとなく。道のとほさも。時のあつきも。いとほて見にくる人は。長良川のなかれ絶せず。伊奈波の山の名高く聞えて。今はとつ國人もこゝに來て。見はやすことになりぬ。けにこれも開けゆく。大御代の光にこそ。明治廿六年七月しるす。

### 三十一。 銀婚式のいはひ言葉

婦人育見會員にかはりて作れる

かしてさや。わかちほさみ。さびの宮と日月のとくならひあはしままで。こたひ銀婚式の。御



祝ひ事あらせたまふ。まは出雲八重垣つまこめし。神代の昔より。かつてため志あらざる。いともめてたき。御禮典にしあれば。この御式を祝ひまつらむと。天の下ゆすりて。さそひさくる。まろかねのくさくさは。不二のねの雪をあさむさ。ほさとの詞は。みよし野の花にまさりて。其さかりなると。たへへ申さむとの葉をおほえす。あはれ今より後も。けふもこの日の芽出たきかことく。御もろともに。鶴龜の久しきよはひたもさせ給ひて。松竹の千世も。かはらすあひたくひて。榮えおはしませと。つたなきほさことを。婦人育兒會員もろもろ。つゝまみかしてみて。まうすになむ。

### 三十二。けいしの考

けいしは履子なるへし。新撰字鏡に。履鞋に属也。阿志加太。又木久豆とあり阿志加太は。阿志太加なるを。文字の顛倒せしならんか。足高の意とおほゆ。木くつの名稱は。和名鈔にも見ゆ。枕草子にけいしくつともいひ。又けいしなとの緒すけかへとも。又つやゝかなるけいまの草に土つきたるなど。いへるを思ふに。木にてあしたのとく高く造り。革もて足ををゆるやうにして。それに緒をつけたるものなるへし。緒はむすひとめん爲なり。すへて沓といふは。足を入れてはく物の惣稱にて。わら沓。あさくつ麻沓木くつ、などのことく。其製したる品によりて。名目とせり。さてその木もてつくれるか中にも。よの常なるを木沓といひ。高く造れるをけい省きてたいと唱へしなるへし。あし

だは字鏡に見えたる。阿志加太足沓のはふかりたるならむ。だの字。字音には非ざるへし。さてあてしたは。和名鈔。又榮花物語。其他のものにも見へて。人の常にはくものなるか。そは鼻緒をすけたる。木製のものにて。今世までもかはるとなし。

### 三十三。三田洞にあそぶ記

明治十五年。四月二十一日。の日の二時過るころ。廳よりまかりけるに。けふは空もいとのかなれば。三田洞の山なる。弘法大師の堂に。まうて侍らむは。いかにと妻のいひ出たるに。幼きをんな子の耳とくさして。はやう其心になりて。何くれいそき物すれば。今は得しもいなまで。おのれも出たつとはなりぬ。かくて長良川に至れば。このころの水に。板橋なかはくつれ落て。舟わたしなり。川上とほく打かすみて。いなは山。船伏山なとほのくみゆ。

長良川夕たちゆるく吹きおちて雨ちりけにもかすむ空かな道のゆくての田に。紫匂ふ花むしる敷なへたるは。けんけといふ草なり。わか車に合乗りさせたる女の子は。桃まりになりて。あはれ花よ花よと。手をさくけて。ありたまくすれと。かへさにこそいと。あしまつめて。やうくそこを行過ぬ。

菫さくをりすこしてと思ふらむ苗代小田もいまたかへさすこのある人の説に。ふるさ歌に。すみれとよめるは。今のけんけはなるへしと。いふによれ

り。さていは崎の里を過るとき。

こゝろなくやり過したる小車の跡したひ来てちるさくら哉  
此あたりゆく。車のうへより見れば。

賤の女か機おりうみて見出せる茅屋か庭につはきはなちる  
里の子かうま引てゆく土橋のくつれに咲けるたんぼの花  
やうく四時過るころ。三田洞にいたりつきて。

来てみればまた入相にならねとも木蔭をくらきなつの山寺  
山をあざりて。

早蕨のまた手も出さす三田洞の山ふところをかき搜れとも  
年ふりたる松あり。

世の中の春秋まらぬやまてらの松も老木となりけるかな  
うくひすのこゑさこゆ。

鶯はまたこのころもこゑすなりかたやま里の青葉かくれに  
みたほらの霞の奥をとめくれは小松か原にうくひすのなく

山にのほり。谷にありて打見るに。櫻はちり過たれと。岩つしなと花さかりにて。青葉のか  
けいとをかしければ。いはほのうへにありて。かれいひたうへなとするほとに。空いとをく

らくなりて。ほとくこほれきぬへうちほゆれば。心のこしてたちぬ。

世中はあなあやにくやたま〜に來つれば空の曇りぬる哉  
たま〜に出つれば雨のふるといふ世の諺はまとなりけり

かへさは車もいとやくて。例の口おもなるえせ歌など。打かたふく間もなく。はやふもと村  
になりぬ。此あたりより。雨降りいてたり。

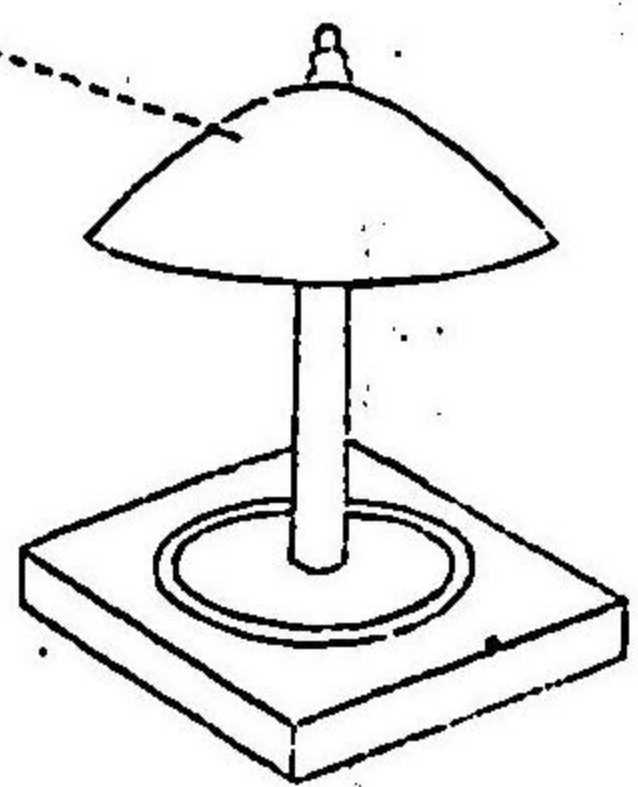
あまりにも麗らかなりと見えし日の夕曇して雨こほれきぬ  
されとも。いたくぬれすして。家には歸りつきぬ。ありし事をも。わすれねほとにとて。かく  
なむ。

### 三十四 遊那谷記

山代より一里許にして。勅使村あり。此村に法皇山といふ山あり。道より右の方に見えたり。  
それより半里餘にして。那谷村に到る。勅使村の入口に川ありて橋を架たり此川下をいふり橋驛といふなり山  
代より那谷まで凡一里ばかりあり那谷を里入ナダと二音によふなり。

那谷村は村の東にあり。入口より一町餘に池あり。此邊楓樹いと多し。北の方に大いなる巖そ  
はたち連れり。其上に大悲閣南に向ひて立り。俗此堂を左甚五郎の作なりといへり。奇巧世に  
稀なる所あれば。さもあるへし。拜殿貳間四方はかり。所謂八ッむね造りにして。槍肌葺なり。  
背後左右皆巖石にして。其中に洞穴幾所もあり。その洞穴ことに佛像を安置す。さて大悲閣よ

り南に石階を登れば。上に堂宇あり。護摩堂といふ。貳間四方はかりなれども。巧みに造りなせり。内に不動尊の像を祭る。桧肌屋根のうへに。又瓦を葺り。瓦に梅はちの紋をつけたり。此堂の左の方より登ること貳十間はかりにして。山の頂上に到れば。一反あまりの平ありて。そこに傘のこたく立てるものあり。其さま長さ壹丈はかり。ふとさ圓徑八九寸の柱を立て。其うへに圓形の屋根をふけるものなり。臺も石をまろくたゝみ。其外を又石にて四角にたゝめるなり。思ふにいにしへ。花山法皇の此所に僭幸ありしとき。四方を見はらしたまひし古跡などにもやあらむ。まことに奇なるものなり。俗是を御亭傘といふ。又大悲閣の左のかたへ登れば。三重の塔あり。護摩堂へ行く道の左の巖の上に。六階の梓の如き石の塔あり。其下の岩の傍に。芭蕉翁の碑あり。『石山の石より白し秋の風と』いふ句を彫り付けたり。楓樹の下邊に一の碑あり。加賀の人瓜生玉華翁の爲めに立つる所なり。大悲閣の並ひに。高さ巖のうへ石階を登ること十間はかりに。一小祠あり。里童に問ふに氏神なりといふ。又閣の後に洞穴あり。口は狭けれと。奥は八疊敷はかりの平にて。地藏尊を安置す。之を塞の河原といふ。閣の右に穴ありて向ふへ貫ぬき通る。之を胎内くゝりといふ。又池の中に岩ありて。其上に毘沙門天の石像立てり。其上に石の寶殿あり稻神といふ。それより歸り路に出て。もとの道を下り。開より大門通りを門外に出づるまで三町はかりもあ



此種なめくらせはくるくと題となり

るへし。すなはち村落なり。那谷村といふ。此村を出はなれて。十町はかりにして。又一村あり。榮谷といふ。それより又七八町に宇谷村といふ所あり。其さまに勅使村。又其さまに森上野といふ村落あり。高塚村はいふりはまのしもなり。此村に御幸橋あり。菩提村は那谷の奥なり。此村のいんげ谷といふ所よりほり出したる観音を。那谷に安置して。那谷寺を建立すといふ。寛平法皇の御願なりとぞ。また其菩提村に法皇の宮とて祠ありといふ。上野を過れば程もなく山代なり。この地は温泉の在る處にて人家も多く。小都會の姿をなせり。旅亭はくらくら隠杖あらし屋隠杖といふいへ。壯大にかまへて。浴客をとしむ。温泉は市街の最中において。山中よりは狭し。此湯は熱度たかき故。家々に取湯にして浴せしむるよし。さるによりて湯壺には。下賤の者のみ浴するやうに見えたり。やまによりて一字あり薬王寺と云。眞言宗の古刹にて景色よろし。詩文を刻める碑などあり。此てらはいにしへ白山五院の一なりし温泉寺なりといふ。又山上に式内服部神社あり。此地産物は山中にひとしきひき物漆器など多し。九谷焼の陶器店も一戸あるを見る。かくて山代を夕かたたち出て。十町はかり野道を來りて。大聖寺川の橋をわたれば。二天といふ所にてそこに茶店あり。大聖寺より山中にいたる道とのちまたなり。行ことしはらくにして。長谷田といふ村あり。里人かみを漉くを業とす。栝草はむねと丹後より入る。又長門邊よりも入るといふ。試みに半紙をすこしはかり購ひぬ。かくて原塚谷を経て山中に歸りしは入相過るころなりき。四月七日。山中旅亭芳野屋に記す。

### 三十五。題和歌世話

これは世にめつらしきものとて。ある人のみせけるに。其上書をみれば。和歌世話とありて。徂來菽生氏の。かなもしもてかける古歌の評なりけり。菽生氏は。孔子の賛に日本夷人など、かけるはかりの。支那かたきの漢學者なり。さる學者にしてかゝることかけるは。おのれいまだ見す。けに珍らしきものとおもやゆれば。また見ぬ人の爲にとてかくなん

### 三十六。詠歌のころえはしかき

凡歌よまむとする人の心得方。又よみ方の用意など。其説さまざまにして。中古以來諸家の述る所一ならず。近世の人又其いふところを異にし。諸説百出底止するところをまらす。然れどもこれ皆末流の論のみにして。其要領を得ざるかことし。蓋歌は遠く神代にはしまりて。わか國の風俗なれば。人々をしへをまたすして。おのつからなるへきは言をまたす。されは山柿の歌聖は。かさねけるものもなく。いひねける傳へもなし。只不言の教を詠歌の上へのこせり。世降りて延喜の時。紀貫之朝臣。歌道の衰へを慨歎して。始めて古今集の序に。歌の本原を説出せり。其詞に世中にある人。ことわざしけきものなれば。心に思ふ事を。みるもの聞く物につけて。いひいたせるなり云々。これ斯道の眞面目歌論の極意はこの數言に盡せり。願くは諸

子。思ひを此に留めて。其の本源を尋ね研究するところあれ。近ごろ高崎正風翁の説に『古來歌論の書少きにはあらねと。斯道の眞面目を説き得て餘蘊なきは。ひとり紀の貫之ぬしなり。その説の眼目は。この古今集の序にありて。この序の眼目は。實に左の一段にあり。よく心をとめて見るへし。今の人。常に事務繁多なるをもて。歌よむひまなしといふ。然るに紀氏は『ことわざしけきものなれ』云々』といはれたり。この言葉よく味ひみるへし。此他氏の意を敷衍してはいは。世の中にある人は。ことわざしけきものなり。然ことわざしけきか故に。思ふところ感する所を。見るもの聞くものにつけて。いひ出せるにて。ことわざしけきによりてこそ。歌は出来る物なれば。無事安穩にて。心に物思ひの絶てなきをりは。嘆聲の發すへきにあらずれば。歌の出来へき筈なし。『すなはち』忙シイカラ。カツカツシテ歌が出来ルノデヤ。暇デハ出来ナイ』といふ意なる事明らけし。こゝに於て。近人の説と紀氏の言とは。全く反對せり。不審の事にあらずや。是全く紀氏のいふ所の歌と。今人のいふ所の歌と。大に相違する所以なり。然らば紀氏のいふ所の。眞の歌とはいかなるものなるかといふに。他なし人情か本となりて。てきたる歌なり。すへて歌といふ物の出来る場合は。物にふれて。人の心に喜怒哀樂を感ずると同時にうたはるゝものにて。彼の雅言を撰ひ。巧を競ひて。とかく按しめくらしつゝ。己か心にも無きことをのふる。人情外の歌は眞の歌にあらずなり。歌は雅言に限る物ならはこそあらめ。紀氏も曾て『みやひことはをもて』などいはれたる事なし。萬葉古今の詞は。萬葉古今

時代の平言なり』といはれたり。此論につきては。なほいふへき事いと多かれと。かきりなくして一朝一夕に盡すへきにあらざれば。そは後にゆつりて。まつ初學の人の題を得てよむへき歌のちもむき。又其題のよみ方の心得などを。あら／＼左にのふへし。

附一。  
柳

柳は春のはしめすなはち。今の曆の二三月ころに芽を出すものにて。その芽を出すをもえいつといふ。さて枝の延ひていまた葉を生ぜざる。ほそ／＼たれたるを糸に見たてし。糸よりかくるとも。春雨に露の玉ぬくなどいへり。又女の髪にもたとへて。風にくしけつるなどよめるもあるへし。此柳やう／＼池の水のとけわたるころ。汀にのそみて。みどりの糸打たれ。春ふかくなるまゝに。うら／＼とかすめる。遠山もとなとに。けふりたるすかたいはんかたなく。又故郷の野中にたてるくち柳に。いにしへをこひ。かた山さとの隠れかには。五もとのむかしもゆかしくおほゆるなど。さま／＼時につけつ。目前にうかふ風景を。さなからころにまかせて。いかやうにもよみいつへし。あなち詞になつむへからず。只實情に基き。精神のある歌をこそよむへけれ、ひたすら歌書のみよみふけりて。古歌によりて三十一字を。つゝりたるは。たとへは鱗形にはめたるごとく。いつも同じやうなるとのみいてきて。歌の精神は少しもなく。死物となりて。何の感もなきなり。とかく。人情か本になりて。出來たるに非されは。眞

の歌にあらず。作りものなりといふとをわするへからず。今この作例一二を擧るは。古人の實景にのそみてありのまゝをうたひたるは。かくこそあれとまらせんか爲のみ。其意をよく／＼味ふへし。(作例省略)

附二。  
梅

梅は。雪またふかき年の内より。かつ／＼けしきはみほころひをめて。なつかしきえならぬ香をもらし。さざらき陰曆二月のなかは。やう／＼空ものとかなるころ盛に咲みちて。ゆるらかに吹來る風にえならすうちかをりたるは。鶯さそふしるへともなり。やかに其鶯は此花を笠にぬふらんをかし。抑梅といふ木は。わか國の上古にはなく。いつのころにか唐國よりつたへ植て。歌によめるは。明日香藤原の宮の頃はしめとし。後。奈良の大御代に。筑紫にて大伴卿此花の宴を催しける時。つかさ／＼の人々のよめる歌。あまた萬葉集に出たり。かくて後は大やしまくにのはて／＼までみちわたり。山の奥海のほとり。此花なき所なく。其始めはこと國の種なから。今はわか國の物として。又なく世中に色香をはなち、盛に人のもてはやす事となりしより。春の題には櫻につきてまつこのうめをとりいつめり。されは古人も好文木といひ。鶯宿梅などいひて。此花をめてけるためしいと多かり。早梅といへるは。冬のむむさをあかして。ちはやくほのかにほひ出たるをいふ。梅は花のこのかみともいひて。雪の内よりほころひ

そむるが。とにかかしきなり。花は色の白きを性とすれば。雪にまかふよしなとおほくよめり。近ごろ白梅とよめる歌まれにみゆれと。白菊などとはたかひて。白梅。白藤など聞くるし。紅梅はへにの色したるをいふ。源氏竹川の巻に。わたとの、前なる紅梅の木。又うめかえに。御まへちかき紅梅さかりになと見えたり。文には。ふるくもこうはいといへれと。歌にはまれなり。されと鎌倉右大臣の歌に。わか君のやへのこうはいと。よまれたれば。字音のまゝ詠たらし。さのみくるしかるましけれと。古人の紅にいろをはかへてなとやうに。よみなしたるなほ優美にこそきこゆれ。さて梅は色よりも香をめて。昔よりさるかたによめる歌多し。あるはまつ人の香にあやまたるといひ。あるは人のとかむる香にしみぬなともいへり。又物語ふみに梅かえうたふとあるは。催馬樂に梅かえをいへる譜あり。其唱歌をうたふをいふなり。西行法師のとめまかしの言の葉の如きは。名たかく千載の今日までも人口に膾炙せり。梅にはさまくの故事もおほく。面白き歌話もすくなからぬと。さのみこゝにかき盡すべきにも非れは。只其おほよそをのみいへり。名所は初瀬くらぶ山。其他いと多かれと近ごろに至り。大和の月か瀬世に名高く。其花は天下第一なりといふ。されは櫻は芳野、梅は月か瀬と。ならへ稱ふるに至れるも。うへなりけり。(作例省略)

附三。

おそさくら

櫻はわか日のもと。花の木のかさにて。世にめてたしなといはむもさらなり。こたひの課題にと。おもひつるを。時おくれにければ。せめて卯月の遅櫻をとてなん。さておそさくらは。都あたりの花。散りはてし後。山路わけ入りて。思かけす谷陰松の木の間なとに。見いてたらむ。特になつかしかりぬへし。初瀬山ひはらの奥には。風知られぬ花も残り。箱根山あたりには。春過ぎて夏そ中々さかりなるよしよめるもあり。又青葉にまじるなといへるは。清く涼しげにも。聞えてをかし。すへて何事も。時おくれたるは。不興なるか。常なれと。櫻ばかりは。春におくれて残れるか。いとあはれふかく。めつらかにも見ゆめるは。其花の品位のすぐれたるゆゑなるへし。(作例省略)

附四。

鶺鴒川

鶺鴒川は。夏川に船を浮へて。鶺鴒をつかふをいふ。これを夜川たつともいひて。月なき夜をまちて。船にかゝりをたぎ。鶺鴒かひ人は。其かゝり火のもとに。あまたの鶺鴒をつかひて。年魚をとらするなり。川の漁おほき中に。面白く興あるは。此鶺鴒をもて第一とす。神武天皇の御製に。鳥つ鳥鶺鴒かひか友とよませ給へること。日本書紀に見えれば。其ころ既に鶺鴒つかふわさありしなるへし。中古芳野川、桂川、大井川などに盛に行はれしこと。古歌によりてまらる。然るに。いつの頃よりか。此業すたれて。近世まで残れるは。たゞ美濃の長良川。其他一二ヶ所

に過ぎず。美濃國なるは。船一艘に。鵜匠(鵜かひ人なり)壹人して。鵜を十六羽つかひ。手繩(鵜の首に繩をつけて。其繩のもとを。鵜匠手にとりて。川に放ちいる。これをたなほといふ)をさはきて。年魚をとる。其壯觀いふはかりなし。鵜川の題には、鵜川たつ、鵜舟さす、鵜かひ人、やみをまつ、かゝりたく、手なはくる、などいひ。簀の影に空もこかれ、水底も明るく見ゆるよし、なとよめり。此鵜舟は雪のまに。川上にこきのほり。日の暮れて。暗となるをまち。さし下しつゝ。鵜をつかふなれば。さる心してよむへし。名所は。芳野川。大井川。桂川。長良川。松浦川。此外萬葉集に。碎田川。賈比川。叔羅川など見えたり。(作例省略)

附五。  
納涼

納涼はすゝみなり。其の盛り。あつさのわりなき頃(頃)細紳(うすまは)らは。大川に屋形船こきいてて。日にくるゝをまち。あるは海ちかき高殿(たかどの)に。吹入る風をむかへて。暑さ忘るゝもあるへく。又奥山の松蔭に。岩もる清水をむすひ。道のへの柳蔭に立ちやすらふなとは。みやひの徒なるへし。又蚊遣たく門のほとりにたち。里川の橋の上になすみて。涼みする賤の男まつ女もあり。とりく。さまくなる風情を思ひうかへて。いかにも。涼しけなるさまをよむへし。又眞砂を照らす月かけをすゝしき玉のひかりと見るは燕の昭王の故事なるへし。青葉のかけの朝すゝみ。雨のなこりの夕すゝみ。さては。加茂の河原のすゝみの床。墨田川への船あそびのさま。

なとをもよむへし。すへて納涼は、すゝむ、すゝみする、なといふへきことなるを。近頃の歌にすみとる、といへるは。ひかことなるへし。本居翁の玉あられに、いはれたるか如し。心すへし。近きころは。汐あみといふことはやりて。あるは大磯、あるは鎌倉などの海へに行きやとりて。日毎に。潮(うしほ)に入り暑さをまのき。身をも養ふ人多し。これ又すゝみのひとつなり。海邊は。常に沖つ風吹きかよひて。夏もすゝしきものなるを。まして磯の松原などに立もとほりたらむこゝち。いかならむ。其涼しさの有りさまを思ひて。よみ出たらむ。ことに面白かりぬへし。

(作例省略)

三十七。山梨縣の櫻の大樹記

櫻の花はかり。世にめてたき物はあらし。さるは木花開耶姫命を。櫻、大刀自、神とも申して。かゝるとふとき神の。御名にしもねひたまへるは。こと木にすくれて。此花神代より。神もめてたまひけむこと。思ひやるへし。人の世となりて。花のたほきみともたへ。天の下の人のめつるまゝに。此木種よもに廣りて。雲のゐる山の奥。浪よする海のほとりまでも。櫻なき所はなきまてになむなれりける。そか中に昔より。芳野。初瀬。あるは嵐山。をくらの峯など。花の名ところ。いとたほく。その所にいたりみれば。いくちもとゝも。數かきりなき櫻の。春霞かすめる空に咲みちたるは。たとへていはんどのほもなく。只あはれあなめてたとの

み。打あふかるゝかし。されとこの木の数の多きゆゑにて。一もと二本。引植てみんには。さはかりハ非しをや。おのれ此ころ。箱根より歸るさ。汽車に山梨縣の。山高といふ所の僧と相乗りして。新橋まで來るあひた。なにくれ物語しけるに。この僧いはく。わかすむ寺にさくらの大樹あり。めくり八かゝへありて。高さは拾七間。横も同じほと廣こり榮えて。たゝ一もとなれと。咲きの盛は。白雲のねりゐる如く。初めてこゝに來る人は。あほとみて驚かざるはなし。いく千歳をか經つらむ。神代の種といふとも。たかふましくおほゆ。と語りぬ。そはめつらしき櫻にもあるかな。そのある所は。いつくいかなるところと問ふに。山梨縣北巨摩郡。山高村實相寺。といふ寺の地にあり。世に珍らしき大樹にて。わかみかと八十餘國を廻りたる行脚の僧など。日本一の櫻なりといひぬ。さはかりの梢なれと。天さかる。鄙のかたほとりにありて。うつせみの。世に知られぬか。あかす口をしければ。こたひ都にのほり雲の上に名高きうま人の言葉をこひ。そを石にささみ。此木のもとに立まほしと。思ひてなむといへり。まことにかゝる櫻の大樹は。昔より見もさくも。またる事なく。此僧のいふか如くならば。けに天の下にたゝ一もとの櫻のつかさともあふくへし。かのみよしの、あらし山、なと花の木の數はかさりなく多かるも。皆ひとしなみの木たちのみこそあれ。是はしも天の下に。むら山多かる中にぬけいて。ひとりふしのねの高くたふとき如く。いくちよろつの。花の木の中に。ひとりすくれて。並ひなきさくらとそいふへき。かの僧旅つゝみのうちより。其寫眞を一ひらとり出

て。あたへければ。これを見て。いと、其梢なつかしう思ひやられて。

面かけにあふきてを見るあし引の山たかさくらたかさ梢を

### 三十八。 加藤安彦を小田原に訪ふの記

明治三十一年一月のはじめ。小田原に加藤安彦翁のかくれかを訪ひけるに。所は海のつらちかかれと。山里めきたる柴の垣ほ、うゑ木、たて石。何くれ心まらひしたる庭の梢の。冬枯に吹わたる風も心ほそく。まへはやかて海なれば。暮行まゝにあまのいさり火はるかに見えて。浪の音近う聞ゆるなど。いひまらすをかしう心ゆくすまひなり。此夜あるしおや子。まれ人もひとり二人ありて。鉢木のうたひを打あけうたはれけるいと而しろく。なまなまのこと笛に立まさりて。こよなくそおほえま。おのれ

柴の庵に火をけかこみてはちの木の昔かたりを聞く今宵哉  
むすこの重太ぬし取あへす。

折くへてたく鉢木もなき宿にうれしく君のとひてけるかな  
其夜はかさりなきむつかたりにいたく更して。猶かたりも盡ねは。明日なん箱根へまかり侍れは。蹄さに又必訪らひてんと契りていてぬ。さてあくる日。湯本。塔の澤などあそびありきて日をぐらし。心ならずもふたゝひ得とふらはて。



小田原の袖のうら波立かへりまたまそとひめ清きはまへを

と道よりいひやりて。むなしく東京へ歸りしはいとまほいなかりしか。そのうち安彦翁より  
玉くしけはこね歸りをまちつれと再ひとはていにし君はも  
とありけるに。口をしさも今さらにて。

門あけてまちけむものを箱根山かへさ空しくとはて過ぬる

千 春

此餘白にちのれか詞を書そへよとありければ。かの最明寺とのより。めさるゝこゝちせら  
れて取あへず。

嬉しくもなつかしかりし都よりたよりはきたり馬にくらむけ  
かくいひたれと。かくれかには馬もなくて。

箱根山あけくれ雪に埋もれてふゆこもりする身をやすかれ

七十九翁安彦

### 三十九。 ふたゝひ鶴飼の歌を求むる詞

我美濃國長良川の鶴飼は。今の世のもてはやくさとなり。養老の流は昔より名になかれて聞  
えたり。此二ところのともを。ねのか拙筆にまゐりて。美濃奇觀となつけたる上下二卷の

三二

三二

ふみを。明治のはしめつかた。行幸の時かしこくもさへけまつりけるか。其後三とせはかりを  
經て。高崎正風大人わたくしに。此長良川にあそはれけるとき。此ふみすてにすり巻としたる  
を見せけるに。都のつとにとて。持かへられけるは。かひある心地なむしける。かくてそのあ  
くるとし。この大人のつてもて。税所篤子の君のみもとに。此書をねくりまゐらせけるに。君  
はわか爲に鶴飼の歌のいとめてたき。又四季のいとをかしきを。知冊にかきて給へりけり。嬉  
しさ似るものなく。悦ひめて。二つなき實とひめもたりしを。ねとつ年の冬。大なわとかく  
つちのあらひにかゝりて。家も。庫も。皆やけうせ侍りし時。かのたにさくも。時のまのけふ  
りとなりて。まことにをしむにも餘りあることなりけり。此とを人にかたりけるに。さのみな  
なけきを。税所の君今なほいとめてたく榮えぬさせ給へり。ふたゝひ御筆をこひ申さんと。な  
とかなはさらむといふ。けにさもこそあれと。わりなく思ひなりて。いとうちつけなるものか  
ら。此とねもと人のもとまで聞ゆると。はなり侍りぬ。おもと人よ。いかてこのととり申し  
て。かのうかひの御歌。ふたゝひ筆そめて給はるへう。申しなしたまへあなかしこ。みのゝ國  
人三浦千春。

### 四十。 寄寫繪祝歌卷序

わか友武井芳矩ぬしは。みのゝ國牧川のほとりにうまれて。そのなかれのきよさをこゝろとし。

なりはひを治めて。家ゆたかにさかえ。いまは世をのかれて。わかのうちにあさりする身となられけるより。ひたすらにこのみちにつけりて。霞たつはるは。花のもとにさまよひ。しくれふる秋は。紅葉の蔭にうそふき。かたはら宇治の木芽をもてあそび。雪の朝つきのゆふへことに。釜をたきらし。時わかぬ松風のおとをたのしみ。また多しまのなみにこころをよせ。からやまとの書まき。あるりかけものなど。世にめつらしきかさりをさはにあつめて。ひめもたれけるは。けにこの家のとみのあまりにして。まかもみやひのすさひなりかし。かゝるたのしみのおほき家には。よろこひもまたあひそへるならひにて。ことしこのをち。六十の坂をやすく越て。もとのこよみに。若かへる春にあはれければ。家の内よろこひ。たとしへなく。いてやその賀をものせむとて。をちかほころ好まれける。うつし繪によするといふ題をまうけて。四方の歌ひとたちに。いはひのうたをなむこはれける。かくて水無月の八日といふに。また穂にいてぬ。いなは山のふもと。風おとつれて水すしき某の樓に。うたけのむしろをひらき。人々をまねかれければ。ちかきあたりはさらなり。西京なとよりも。名たゝるうたひとら。來つとひて。心々にをちのよはひを。なから川のすゑなく。嶺にねふる松か枝の。千世もいませといはひことほきつゝ。よみいてたることのは。筑波の山のいとしけきにくはへて。玉敷の都かたをはしめて。天さかる國々よりも。あつまれる歌とも。はまの真砂のかすねばかりければ。これかれあはせて。かきかそふれば。百といひて三つをかさぬるかすをなん得たりけるを。

ちいたくよろこほひて。こを一つにあつめて。すりまきにもものして。うま子の後までもつたへてむ。また歌よみてたくられける大人たちにも。わかちたくりてむとて。かくものせられけるになむ。そのよし巻のはしにまゐりてよとあるに。もとよりまたしきながらひいなまむに言葉なく。みしかき筆のゆくへもたとらず。つたなきひとことをかさゑるしつ。明治廿六年七月。

#### 四十一。うらみの磯丸の事跡

萬葉集(卷一)汐さゝるにいらごのままへこく船。といふ人丸の歌あり。此いらまといふ所は。三河國の極南方へ出たる海邊にて。漁人の多くすめる所なり。そこに五六十年はかりの昔。磯とよはるゝ漁夫ありけるか。天性孝行にて。一人の母をもてり。此母のすくよかにて命長からむとを。うふすなのいらご明神へ。願をたて日參をして。三年の間。雨風雪霜のいとひなく。一日もかゝさず。まうてけるか。その母は七十あまりにて。つひにはかなくなんなりにける。さてその。日參するころほひに。明神の拜殿に。三十六歌仙の額のかけてあるを見て。こはわか國ふりの。歌といふ物にて。神代より神もよみ給ひ。今は上中下のへたてなく。よろこひかなしひにつけて。いひ出す言葉なり。といふとを。人より聞いていたく心に感し。われらも身を賤しけれ。日本のためにあるからは。いかて此歌といふ物。よみならひてむと思ふ心うかひぬ。されども。母の世にあるとは。孝養にいとまなくて。打過たりしか。母なくなりて

かたよらてまむ中をゆけ大川の水もすくなる御代にならば、

とよみてあたへけりとなむ。歌は誠の情をのふる物にて。誠はやかて心なれば。此まことより出たる言葉は鬼神の心にも感應して。あるは日てりに雨をふらせ。あるはなかあめをとめけるなどのためし。いにしへよりあまたあり。磯丸。その歌はすぐれたるにあらねども。ことくく心の誠よりいつる歌ゆへ。奇特もありけむとを思はると此ほかわか今おほえたるは

天雲の棚ひくまでにつもれかまぢりよりなれるやまととの葉

なといふ歌にて。此ほか人の耳に残れる歌とも。いと多かるをひろくたつねても。見まほしき物なり。まことに世にめつらしき人物といふへし。よはひも。八十ちあまりまでなからへて。ひたもの歌をよみけりとなん。此磯丸のことをきくは。今の世。心にもあらぬ。作り歌をよみふける歌よみは。耻て面あくへくもあらずかし。

#### 四十二。再び磯丸の事跡に就き

いらこの磯丸のことを。先年おのか聞けるまゝをかいしるして。高橋ぬしに見せけるを。やかてこたひ發行の韻文學第一號に出されたり。然るに其後ある人より。磯丸の事跡は今より七年前つかた。歌學といへる雜誌に委しく掲載ありといふことを聞て。そを見るに。歌學第三號及

ひ第五號に。磯丸の傳。又井上氏のきゝかきなど。いとつはらにのせられたり。余は先年ある人よりきゝけるは。産漏にてかつそこごと。たかへるふしも見ゆめれと。もとよりかたりつたへの事にしあれば。井上氏のきゝ書にも。つきくにかたりつきいひつきつることなれば。おのつからあやまりなしとも定めかたく云々。といはれたることく。いつれを是なりとも今定かにはしりかたくなむ。猶此ことは戸田淡路守といひし人の談に。石川何かしといふ老人ありて。むかし磯丸かこの淡路守の江戸の邸へも來て。歌の敵手にもなりけることゝも。おろくおほえ居るよしなれば。他日委しく其人より聞たくして再びさむとす。さてかの磯丸傳に。村係于淡路守戸田侯封邑。とあるは誤にて。伊良子村の隣りに。日出村といふありて。此村即戸田氏の封邑なりしかは。またしく磯丸の人物を考りて。淡路守か江戸邸へも呼ひおきけるよし。淡路守は氏綏とて歌好みなりきとを。

磯丸のよみ歌きくかまにく。

柳

ふくまゝの風にまかせてあらそはぬ柳をひとの心ともかな

江都外櫻田の戸田侯の御まへに侍りてさるものをたまはりければ

旅こそもかゝる袂にからにしき重ねて厚きめくみをぞ思ふ

ふる里にかへるとて

より。世のいとなみのひまゝにまついろはより。手習をはしめ。それより。三十一もしの歌を。かたことまじりに。見るもの。聞くものにつけて。いひ出して。やう／＼歌らしき物に。なるやうにいたりしは。いくらかの年月を。つみし事なるへし。今の世の人。歌を稽古すといへは。多くは麓のちりとか。布留の山ふみとかいふやうなる。志るへふみを見おほえて。古人の詞を。あちらこちらと。つゝり合せて。五七七の句のかすを。合せたるまてにて。わか誠の心より出さるゆゑ。歌に精心といふか。いさ／＼かまなし。磯の歌は。さやうなる書物もよまず。言葉の稽古もせず。唯心に思ふ事を。見る物につけ。さくとにつけて。ありのまゝに。いひ出したる功つもりてつひに歌となれるものゆゑ。言はつかひなどは。ふつ／＼かにも。心の誠か歌のうへに表はれてあるなり。これぞ。其歌といふものの本意なるへさか。ある時此磯をのこ。いらこの濱にて。旅人をのせて。船をこきゆくとありしに。其旅人みつからの國を遠つあふみなりといを聞て。まれ人の國に。石塚龍麿といふ歌人ありとさく。きらせ給ふにやと問ひけるに。その旅人われこそ。其龍さうよといへば。磯をのこは。思ひかけぬたいめに。ふしまろひよろこひて。いふやう。おのれ近ころ。歌といふものを。よみなちはまほしく。おほけなくも思ひかけ。かねて大人の御名のかきをうけ給はり。いかて一たひみもとにまゐりて。歌のをしへをうけてしかなど。明くれ心にかけるたりしか。さはひとへに。此いらこの明神の感應にてはからすまゝに。ひさあはせ給ひけるものと思ひ侍りと。なみたをこほして。眞實おもてにあらは

れ。いひければ。龍麿もいたく感心して。まれより師となり。をしへ子となりて。學ひはけみたりとなむ。かくておれより磯をのこは磯丸と名のり。やう／＼歌の道にすゝみ。達者によくよみて。世にもまらるゝはかりに成にけり。まゝに又あやしきは。磯丸の歌の徳によりて。人の病いえ。又田畑の蟲をよくるなといふ事を。誰いふとなく。をちこちの村里より。聞つたへて。歌のましなひを。まひに来る人多くなり。磯丸も。始めのほどをあれ。後にはあまりうるさき事とも思ひけれともさりとて又。世の爲人の爲にもなるとして。人のさふまゝに。歌をよみてなんあたへける。其一ツ二ツをいは。ある時疔といふはれ物。肩のあたりにいてきて。なやみける人にかくなむ。

たちてゆけ花なきかたにてふ二つ何をたよりにてふとまらむといふ歌をよみて。其はれものまはりに。みつから書てやりければ。やかていたみさりていえにける。又田畑に。へひといふ蟲出て。わひあへるものに。

へひなれば蛇の道さしていけ川よりぬ田島によるなさわるなとよみて。物にかきつけてとらせ。其畑に立させおきければ。其後はへひ出さりけりとぞ。又ある年。天龍川の水あふれて。堤されやふれ。あまたの村里。水入りとなりて大かたならぬわさはひをうけたる後。其所の長たちたる人々。あひはかりて。ふたゝひかゝるとのなからむ爲にとて。磯丸のもとに行て。歌をこひければ

かたよらてまむ中をゆけ大川の水もすくなる御代にならば、

とよみてあたへけりとなむ。歌は誠の情をのふる物にて。誠はやかて心なれば。此まことより出たる言葉は鬼神の心にも感應して。あるは日てりに雨をふらせ。あるはなかあめをとめけるなどのためし。いにしへよりあまたあり。磯丸。その歌はすぐれたるにあらねども。こたくく心の誠よりいつる歌ゆへ。奇特もありけむとと思はると此ほかわか今おほえたるは

天雲の棚ひくまてにつもれかまちりよりなれるやまととの葉

などいふ歌にて。此ほか人の耳に残れる歌とも。いと多かるをひろくたつねても。見まほしき物なり。まことに世にめつらしき人物といふへし。よはひも。八十ちあまりまでなからへて。ひたもの歌をよみけりとなん。此磯丸のことをさしては。今の世。心にもあらぬ。作り歌をよみふける歌よみは。耻て面あくへくもあらずかし。

#### 四十二。 再び磯丸の事跡に就き

いらこの磯丸のことを。先年おのか聞けるまゝをかいしるして。高橋ぬしに見せけるを。やかたてこたび發行の韻文學第一號に出されたり。然るに其後ある人より。磯丸の事跡は今より七年前つかた。歌學といへる雜誌に委しく掲載ありといふことを聞て。そを見るに。歌學第三號及

ひ第五號に。磯丸の傳。又井上氏のきゝかきなど。いとつはらにのせられたり。余は先年ある人よりきゝけるは。鹿瀬にてかつそこごと。たかへるふしも見ゆめれと。もとよりかたりつたへの事にしあれば。井上氏のきゝ書にも。つきゝにかたりつさいひつきつることなれば。おのつからあやまりなしとも定めかたく云々。といはれたること。いつれを是なりとも今定かにはしりかたくなむ。猶此ことは戸田淡路守といひし人の談に。石川何かしといふ老人ありて。むかし磯丸かこの淡路守の江戸の邸へも來て。歌の敵手にもなりけること。も。おろくおほえ居るよしなれば。他日委しく其人より聞たゝして再ひえるさむとす。さてかの磯丸傳に。村係于淡路守戸田侯封邑。とあるは誤にて。伊良子村の隣りに。日出村といふありて。此村即戸田氏の封邑なりしかは。またしく磯丸の人物をまりて。淡路守か江戸邸へも呼ひおきけるよし。淡路守は氏綏とて歌好みなりきとそ。

磯丸のよみ歌きくかまにゝ。

柳

ふくまゝの風にまかせてあらそはぬ柳をひとの心ともかな

江都外櫻田の戸田侯の御まへに侍りてさるものをたまはりければ

旅こそもかゝる袂にからにしき重ねて厚きめくみをと思ふ

ふる里にかへるとて

旅衣たちかへるとも武藏野のひろきめくみをいかて忘れむ  
武藏野の月にうらとくかへるとも花にとひこむ櫻田のはる  
古里にかさねてゆかば唐にしきつまも嬉しとばこそ思はめ

寄弓祝

武士のみちをまもりの梓弓あさまる御世のためしにやひく  
君かためたつよかれと神かけていのる心のまゆみつき弓

御大神にまうて

これやこのあめの下なるふた柱たちでもゐてもあふけ諸人  
治まれる御世にあふひのもろ鬘かけてそいのる加茂の宮人

あるみたちにてさく合といふ香を開給ふとて歌よめとほせことありければ

白菊の名にしちへはやそらたきの烟も花の香にほふらむ

ある人心をすます歌よみてよとありければ

にこりをは其日くにくみすてすませ心のそこの清水を

みたらしの池によりても人はたし心をすます他なかりけり

うけえたる我たまかきをみかさなはよその社の神もまもらむ

四十三。勢語讀本緒言

いせ物語は。何人の筆作なりや。古來諸説區々にして、知り難しといへとも。古く世にもて遊  
ひしものにて。物語の始めともいふへく。ことに文章簡古にして。いと正しく大凡物語ふみのうち  
には。これにまされるものあるへからず。本居宣長翁も。此物語はものかたりのあるか中にも。  
あもしろく言葉すくれたるよし。玉勝間に云置れたり。按するにもと此物語は。在五中將のみ  
つから書おけるさうし、或は日記やうの物のありけむを。何をもしかいかいふとなれば此物語に人の名をあら  
はしたると山階禪師親王惟喬親王をはしめ右大將  
藤原常行左兵衛督在原行平右中辨藤原真近宮内卿惣好のたくひ多くあれとも業平といへる所は一つも見えず唯おほめかして殿  
上にさふらひける在原なりける男或は近衛つかさにならひける翁右馬頭なりける翁中將なりける翁などのみいひ又そこに在  
りけるかたわおきなともとより歌のことはちらさりければとも身は賤しなから母なむみこなりけるともみつから卑下してい  
へる是自記の文なりし證とすへし他の人のさらにかき出たる文ならむには業平朝臣にかきりて其名をかくし又その人のかたわ  
翁などいふもととして。其かみ文章に巧みなる人の。他の事をもとりましへて。一つの物語には  
へしやは  
かさなしたるなるへし。在五中將は三代實録に善作和歌と見えて。歌に妙なりしことは。かの貫  
之朝臣かいたく慕はれしにてもまるへし。さるまたかななる人の。かさおかれけむ日記などの詞  
を。其まゝ用ゐて作りなしたる物語なれば。さてその文章の他に似るものなく。いとも勝れたる  
にはありけれ。されは今の世學生の高尙なる和文を學はむには。第一に取出つべきものなるを。  
いかなれば今迄さることなきにやと思ふに。何かしか二條の后に通ひ。齋宮にあひし事をはし  
め。男女の間の情を。いと濃かに。かさたるをちくのあるをもて。たゞ一概に好色の物語ふみ

と見なして。教科書には用ゐぬなるへし。おのれ夙く此物語を讀耽りて。深く味ひ見るに。すへて人情の切なるは。男女の中らひにあれば。物語の例として。是もさるすちのことを旨と。をかしく作りなしてはあれと。眼を轉して見るときは。其中に又忠孝の教となり。女の鏡となることも。多かりけり。そは在五中將か惟喬親王にまめなりし事を思ふに。此親王は文徳天皇第一の皇子にて。御母は紀氏なり。されは藤原氏の權勢を恣にするか爲に。御位にも即せたまはず。御年二十九にて。御出家ありて。小野に遁れ住たまふを。大かた皆藤原氏に憚りて。親く問慰めまわらする人もなかりしを。中將初めより。この親王に仕へて志をかへす。折にふれ時につけて問らひ奉り。正月に拜賀すとて。公け事繁きころなるを。その間をぬすみて。雪のいたうふりしきる日しも。小野の山中に参りて。夢かと思ふと詠せしなど。慷慨の意。言外にあらはれて。誠にあはれ深く。其志の厚きは。時に諂ふ世人とは異りて。忠義類ひなしとこそいふへけれ。又在五中將か長岡なる母君のもとより。見まくほしといふ文を得て。馬にも乗りあへず。はせいたりて。さらぬ別れのなくもかなと。打歎かれしは。いといたう親に孝心深かりし人とまられたり。又筒井筒の女か。其夫の他心いてきて。高安に通ふを。あしと思へるけしきもなく。心よくいたしたてゝやりて。獨り空園を守りゐて。風吹けはの歌を詠したりけるに。其夫深く感して。高安へもゆかすなりにけり。といふ條にいたりては。其貞操眞に比ひなく。女たるもの。けにかくこそあらまほしけれ。世の妬深く。わか夫を恨み暎りて。それか爲につひに床はなれなとする女の爲

には。よき戒めのかゝみなるへし。かゝれば此物語全部の中にて。男女の中らひにわたれる言葉を除きて。讀本とせば。いとよき文章の本となるのみならず。又一つには教草ともなさはなりなむものをや。おのれこの心にて。ささつとし。おろく／＼撰ひおける草稿のありけるを。こたひ久米幹文ぬしの勸めにより。再ひ考へたしして。かくは物しつるになむ。明治二十三年二月。

#### 四十四 丹波國笹山の孝女のまゝと

むかし丹波國笹山藩主。松平紀伊守の家臣に。何某とかやいひし士ありけり。そこに召仕ひけるはした女は。永音村といふ所の農民の娘なりけるか。うまれつき親に孝心ふかく。みやつかへもまめやかにて。いそしきものなりけるか。此女いさゝかいとまあれは。おのか部屋に入りて。何やらむ忍ひやかに物するを。主人はあやしと思ひて。ある時。障子のひまよりのとき見けるに。かの女。假面を箱よりとり出して。いとなつかしげに見入りてそありける。何するにかとこそかければ。おとろきふして。とみに物も得いはす。かさねて問はれて。やうやうおもてをあげ。いとつゝましげにいひけるは。わらはこと。かくみや仕へし侍れは。常に親のものとを離れるて。戀しさのやるかたなさに。いつそや市に出侍りし折から。母のおもてに。よく似かよひたる。假面の侍りしを。かひもとめて。櫛の箱にかくしおさつ。とさ／＼これを見て。心をなくさめ侍るなりといへは。主人は其志を感じて。今の世には稀なる孝心ものかなと。

妻子もろとも。これより後。此女を。ふかくいたはりてそつかひける。ある時此女。家刀自ら申しけるは。よへ何とやらん夢見のあしくて。母のこと心にかゝり侍れは。里にまかり侍らむ。わりなき願ひに侍れと。けふあすはかりのいとまたまはらむと。いとねもまろにいへは。安きとなり。されとけふは。日もたけたり。明日の朝とくこそといへと。まひて今よりとまへは。いふにまかせて出したてゝやりぬ。永音村といふところは。三四里の野道を隔てたる田舎なりければ。ひる過つかたより出て。いそくとはしけれと。折ふし秋の日のあし早く。道中に日はくれて。ゆくさきおほつかなく。いかしはせむと思ふに。かなたの松の陰に。あはらなる納屋といふものゝありけるを。入りて見れば。たき捨たるわらなとあり。よき所とあむなれ。こゝにて夜の明るをまたはやと。やかて其わらを引きて。かたかけによりて。ひちまくらして居けるに。草むらより。やふ蚊のいて来て。いと堪かたかりければ。ふところにもちけるかの假面をかほにあてゝ。その上にかたひら引かつきて。おほえすまとろみたりけり。夜なかはかりに。大の男五六人うちつれ。いつ方よりかひそくと。此納屋に入来て。火をほのくらくともして。はくちといふ事をはしめたり。女ふと目をさまして見れば。かゝるありさまのおそろしくて。こゑもたてす。死たる人のやうにてゐたり。此はくちうちのをのことも。物かけに此女ありと。心もつかざりしか。ひとりのをのこ。ふと見つけて。おはこゝにあやしの物こそあれといふに。今一人か。いつくといひて。よりてかたひらを引上げみれば。おそろしけなる老

女。髪をみたしてふしたり。此をのこいたく驚きて。あなや。へんげ多のものとさげひて。にけいつれは。のこるものともあわてゝ。鬼一口には。かゝる所のことなむめりと。とるものもとあへす。足はやに。いつおともなく逃ざりぬ。やうく夜も明ゆくに見れば。はくちうちらか捨ちきたるこかね。いくひらとなくちりほひてあり。それをかさあつめて。かたひらにつゝみ持て。里に歸りてけり。まつ親をたつぬるに。常にかはる事もなく。いとすくよかにてありければ。よろこぶこと限りなし。さて。よへかうくにてありけるとかたれば親聞て。かのものとも女とまらば。いかなるわざはひをもなすへかりしを。かしらうのかれつるのみならず。まかねをさへ得つるは。ひとへに神のまもりなる入し。さはいへ。くてもくへさならねはとて。そのこかねを笹山の應にもちいで。このよしをつふさにまをしければ。國の掟をそむきて。はくち打けるものとも捨ちけるまかねは。ぬしをたつねてかへしあたふへき限りにあらず。いまし女かたくふんたるへしとて。やかてとらせられにけり。孝心のいたり。神も感應まし〜て。かゝる幸をくたし玉へるにこそと。時の人かたりあへりきとまむ。

#### 四十五。 瀧園歌集の奥書

あまひきの山もとろになる瀧の。そのたき園と世にひききたる。黒田の大人は。はや人のさつまの國。鹿見島の武夫より起りて。今の大御世のはしめに。朝廷のおほん爲にすくれたる功をた



て入。華族にのらなり。爵は子爵。位は正三位のたふとぎに昇れるのみならず。齡さへ今年は七十あまり二つといふ高さにいたり。なほ健かにして。時には鎌倉のなり所にもものして。世のちりをさけ。月にうそふき花をもてあそひて。心を敷島の道によせ。遠くは高つの山のかげをあふさ。紀の川の流れをくみ。近くは縣居のあとをまたひ。桂の園をまたしみて。深く此道のちくかをさ。はめ。八雲立山のまけみに分入り。わかぬ浦の浪の底を探りて。拾ひ得られたる言葉の玉は。今にいたりて幾千々といふ數をきらす。皆金のこゑ玉のひきならざるはなし。されは其の歌の集を世にあらはされむことを。同國人なる菊池武則ぬまむたひく大人に申しこはれけるに。稻舟のいなひかねて。これはかりをたにとて濱の真砂の限りなき中より。さるへさかきりを。かつくえりてられけるを。やかて武則ぬし。寫し取りて再び大人の校正を乞ひ。こたひを梓にのほさむとして。ちのれらにもことはかゝせられけるは。何のよろこひかこれに加へむ。すへて此集の体裁。四季戀雜にわかち。ことに俳諧の部をも立られけるは。古今集のふりにならへるのみにあらず。かつは思ふ心ありてなるへし。そもく近きころの歌。大かた風致といふことを忘れ。ひとへに新らしきをもとめ。調にかゝはらすなといふを。たけきこととするからに。心言葉の横はしりして。まら。く俳句めけるも。多くみゆめるを。其けちめをいふ人も。なきのみならず。かへりてさる歌をめつらしみ。もてあそふ輩の多くなりもてゆけるは。いとなけかはしくなむ思はるゝを。此集には部を分かちて。正雅と鄙俗とのわかちを明らかにせられたるは。世の歌よみのか

しらに針をさしたる。一つの見識とこそいふへけれ。又此大人の歌はしも。大和魂の雄々まなくすかくしき心よりなれるなれば。ちのつから委たけありて調とこほりなきこと。高山の峯よりみなさきりおつる大瀧の如し。うへも名にちふ瀧園の。瀧の白絲絶すして。此集なかく世に傳はれらば。誰かは其人をしたひ。其言葉をもてさらめやも。明治三十四年八月。尾張人三浦千春しるす。

#### 四十六。 仙子歌集序

嗚呼故仙子女史。女史は醫學博士土肥慶藏君の夫人なり。幼より手習ひ歌よみ。萬のことにさ。とく。ことにみめよく。心はえやさしくまて。土肥君にとつきて後ち。よく家を治め。よろつにつきて。なさけ深くものし給ひければ。ほめたくへぬ人なかりき。君か歐洲に留學志玉ふや。その間五年といふ永き月日の留主を守り。良人のやすく健かならむことを祈り。起ふしまちこかれてゐたまひしか。いつしかそこはかとなき病ひのうちそひて。さらぬたにかよわき身のなやましくのみ。花のちるはるのあした。風をよく秋の夕のさひしさに堪かねて。ものこころほそけなりしさまは。いと哀に。よそのみる目も心くるしくそほえし。かくて折々は鎌倉のうみへにあそひ。浪になつさひ。うしほにあみなともして。思ひをはるけ身を養ひつ。とかくするほとに。夫君も歸朝せられければ。其よろこひいかなりけむ。限りなき嬉しさに。年ころのいたつとも忘られて。一たひはこころよく成りぬやと見えしか。あはれ此わかかうるはしき

花のすかたを。あらしの風やねたみけむ。病ふたゝひあつしくなりて。さま／＼手を盡されしかともそのかひもなく。つひに明治卅一年十一月一日といふに。よはひ二十四にして。夕の露と消えうせ給へるは。世に悲しなどはおろかにて。かけていはむことの葉こそなかりけれ。女史つねに歌を好まれければ。君はなけきの中より。せめても今は忘れかたみに。其詠草の百か一つもかきあつめて一卷とし。家にもとめ親戚知音の人にも。わかち送らはやと思ひおこして。其ことをおのれにはかられける。まことに妹脊の情のあつきを見るにも。まつさまぐまゝるゝは泪なりけり。女史ははやくよりおのかをしへ子にて。歌の道にはよそならぬ中らひなれば。そはいとよきことと。いれひもの同し心に思ひよりて。なみたなからに。その言の葉の残れる色をひろひあつめて。かくひと巻にもものまつるになむ。見む人この集によりて。女史の心はえをもさとり。又そのたままひのありけんところをも。うかゝひまろを得は。こよなき記念なるへくこそ。かくいふは七十五翁三浦千春。ときは明治卅五年五月の末つかたなり。

#### 四十七。菅沼斐雄か紀行をよみて

古き道の記に。山の名川の名。其ほかところ／＼の名をきるせる。異同ありて。後の人かれにはかゝり。これにはとありなど。とかくさたするとなれと。よく思へは。道の記にきるせる地名の。心もなき賤の男賤の女の言葉。又いかこかき荷もちをのこなとの。いふにまかせてかき

つけたるもあるへければ。すへては證になりかたくこそ。近きころのものにさへ。此あやまりあるを。まして古き紀行などをや。そは文政の頃あや雄か吾妻花見といへる道の記に。尾張國を過るとき。二つそりといふ所を経て。枇杷島にかゝるときるして。歌にも霞のきぬの二つえり景樹さ、ほひめの霞の衣の二つとよめり。こは二つを以て水を落す坂二つありといふ所なるを。さゝひかめえり萩さへいまや立かきぬらんてふたつそりとさるせるのみならず。歌にさへよめるはそゝるなるわさとやいはまし。さばれかゝる事は。旅の日記にはいくらもあるへければ。是をのみとりいて。とかめんはあちきなさわざなるへし。これを思ふにも昔の紀行の文を證に。引出てところの名などにつき。一かたに傾きたるさは。すましき事ならむかし。

#### 四十八。わらひ草

今は昔。片田舎の人ふたりつれたちて。江戸の町に出たりけるに。めすらしき所のねほかれは。とらまからさまありきめぐりけり。とある所に紙はりにて。鏡のかたちを作り。女のかほをさかきて。其傍に「ねんかゝみところ」とかな文字にてかきたる看版あるをみて。一人かかしらかたふけて。此のところは腰をかゝめて通るへきにやあらんといへは。又一人か。いな／＼此家の嫁か此畫の如くうつくしければ。よりにかゝを見よといふことならんと云ふ。さりけり／＼とて二人のものは入りて見るに。折ふし店先に物ぬひて居れる女のあるをつく／＼打見て。さ

ても此家のあるしはよきかゝをもたれけりなといひつゝ。やかて出て。田舎にはかゝる事やある。めすらしかりつる物見かなと。ふみまけて。さてなむ我が住む里には歸りける。あくる年又要ありて江戸に出たりけるに。かのうつくしかりつるかゝ見むとて。心あての所を求めけれとも。つひに見あたらて。其あたりとねほしき家に大きな看板かゝけたるを見て立とまり。からうして其文字をよめは『ことしやみせんまなん』(翠三味線指南)とあり。田舎人いたく力ねとして今ひとりに向ひ。ことしや今年はみせん見せぬとあれはせんかたなし。たゞまなん不死とあれは。又折を得てみむ事もあるへかりけりといひけるとぞ。

#### 四十九。むかしはなし

今はむかし。なにかし寺なる住職の和尚。常に白酒てうさけを好みて。かもしつゝひめぢかれけるを。年わかき弟子ほうしの見つけて。まのもしく思ひけれと。和尚のひかゝしう。ものをしみせらるゝをはゝかりて。さる氣しきもほのめかさて。念し居りけるか。或る時ものへまかりて歸り來つゝ和尚やいます。たゞ今歸りてさふらふと。たかやかに申しのはへけれと。何のいらへもなく。さらに和尚の見えされは。こはよきひまをそ得たりつれと打多みつゝ。ひそかにかのひめぢかれたる酒かめの口を開きて。その酒を茶わんにくみうつし。やかてそまにてとうへむとせしか。さすかに和尚の。今にも歸りきて見つけられなは。いかばかりからさ目見

なむと。けちそろしう思ひけるまゝに。いかてあらはならぬ所に。かくろへて物せはやと。おもひたはかりつゝ。かの酒あふるはかりたゝへたる茶わんをたつさへ。おくまりたる方のかはやにいたり。戸口に手をかけ。つと引あげたれば。こはいかに思ひもよらす。まのかくれかには。はやく和尚の忍ひぬて。同じくたゝへし茶わんをもち。舌うちしつゝあられるにぞ。弟子ほうしは。たゞさるにさるもいらたきこゝちして。汗あゆるはかりむねつふれたれと。さすかにこさかしく。心たくみあるものなれば。とみに思のとめて。さりけなき面ちつくりつゝ。やをら戸くちについぬて。かうへをたれ。ねのかもちたる茶わんを。和尚の前に。いとやゝしうさゝけ出しつゝ。今一献かさねたまへとそすめける。

#### 五十。岐阜末廣座演劇廣告

日月を燈とし。風雷を鼓とし。久堅の天の磐戸の幕明きより。今也開化の中幕迄。嗚呼盛なる哉。天地間の一大劇場。此演劇の仕くみには。魯の座かしらも筆を投げ。釋迦も徒跣て逃つへし。かゝる聖世の大舞臺。西は琉球東は千島の果までも。一棧敷の一枚に治まりて。賑はふ國多き中に。岐阜は殊さら因幡山。黄金花さく榮えなれば。此時をはつさぬか。肝心要の末廣町に。開け行世を表したる。末廣座の新築も。漸く落成いたしたれば。立かへる年とともに。霞の幕を引そめて。花より先の初舞臺に。春宵一尅價千金の。名俳優を數名つとへ。古きを捨

て文明の高きに遷る。然の弊新しき外題を取くみ。恰も造物者を欺く。一狂言を高覧に備んとす。驚くは四方の君子。開演の初日より。永當々貴臨ありて。偏に御愛顧の御評判を玉へと。長良川に侷なれし。鶴自物うなぬ突ぬきホ、敬て申す。

### 五十一。蛸の賦

京の蛸薬師は。何となくなつかしけなれと。蛸の入道など。さくもなまくさき。こゝちこそすれ。されと春は櫻の花見蛸。夏は酢蛸で氣をさかせなと。世にも唄ひはやせは。かれは鼻うこめかして。得意然たるもをか。磯には波の花さき。さくら鯛もはなうさするころ。たこも心やうかれけん。のそくと岸に上り。あしもともゆらく。湊町のあるお茶屋に入りければ。此家の酌女目はやく。そはく蛸入道殿とひやかせは。いや入道でないさんぎりの少しはげたるのだと。あたまかへてわらひなか。座に直れば。まつ好物の芋一皿と。ほんに酒一つぼ。こは何よりと。つれく草の芋喰和尚氣取りにて。かれは説教これはたわこと。くひくの大うかれ。手を出して足をいたく蛸肴と。ちのれか身の上も忘れて洒落のめす。はてはといつ。ぎんく。かつぼれ。まろがしらに。ほふかぶりして。八本の足のいぼに扇、杯、皿、小鉢など吸つけてをとりいてたるは。千手観音のばけものとも見えて。かのなにかしが。かなへかふりて舞ひけんよりも。興あるべし。又ある時は此蛸大勢の仲まと一團結して。海へに上り。列を

なして足並りしく。芋畑におしよせて。片っぱしより掘あらし。喰ちらし。思ふさまの分捕しつと。喜ひいさむ折から。百姓男に見つかり。鎌のむねうちに。さんくぶんなぐられ。くもの子をちらすやうに。浪うちさはに逃げちつたり。此時扇をあけてさしまねく熊谷もなければ。跡をも見すしてさらくと入水せし。平家の敗軍とひちかひ。蛸軍には全く蘇生なりけらし。さても其後蛸ともは。龍王の前へも恥かしく。玉藻の床にもやすんせず。やうくと蛸壺のせはきにもくりこみ。悟故十方空。われ此壺中の小天地を樂しむなと。すましこんてさとりかほなるもあろかや。此つほ今にも漁人に引上られなは。やかて地獄の釜にゆてたこの苦しみを受けんものを。さりとらうかつな此入道。早く秋風にさられて。繪となり人の腹を肥さんよはしかじとぞ。

こはさきつころ。日高秩父ぬしを助ひけるに。一卷の蛸の語を見せられたり。其蛸酒のむあり。舞ふあり。千狀萬態。筆にまかせてかきたるは。鳥羽僧正の筆のすまひしかくやと。其滑稽のいとをかしく。わすれかたくて。家にかへりたはふれに。此文を草し贈れり。

### 五十二。井手曙覽翁の傳

翁幼名は五三郎。中ころの名は尙事。後に曙覽と更めらる。父を五郎右衛門といふ。母は山本氏。文化九年五月を以て。越前福井の里。石塙町に生る。翁生れて二歳母におくれ。十五歳にし

て。父君身まかられたり。當時頗る感ずるとありて。頻りに佛門に歸せんとせられしか。親戚に拒まれて。思ひとまり。其後京都に遊ひて。山陽頼氏の門下兒玉士敬に就きて漢學を修められしか。又親戚の迎ふる所となり。家業に従事せらる。天保十年江戸に遊ひ。數月にして還り。遂に意を決し家業を家弟に譲り。閑居して専ら文學に従事し。名を尙事と改む。殊に本居翁の遺風を慕ひ。專ら國學に熱中し。最も歌に堪能なり。當時飛驒國に田中大秀といふ人あり。此人本居翁の門下にして。碩學の名ありければ。翁就きて之を叩き。頗る得る所ありきといふ。弘化三年。足羽山に卜居し。目隱黄金舎と號し。惟を下して業を授けらる。これより贊を執りて。其門に遊ぶ者多し。是年京都に上りて。大行天皇仁孝天皇の御葬式を拜觀し。其佛式を行はせ給ふを慨歎し。歌を詠して之を諷せらる。其歌に『ゆゝしくも佛の道に曳いるゝ大御車のうしや世中』。嘉永元年。居を三橋町に移して。號を藁の舎といひ。名をも曙覽と更めらる。此ころに至りて。翁の學問大いに進み。自得發明頗る多く。著作に従事して。時に寢食を忘れらるゝに至る。國主松平慶永公之を聞し召て。をりゝ侍臣をして斯道を問はせ給へり。安政六年。公奇禍に罹り。江戸靈岸島の邸に幽居し給ひけるか。翁に命じて萬葉集中の秀歌三十六首を選はしめらる。蓋し古の三十六歌仙に擬し。壁上にかゝけて慰辭の料に供せられんとなり。翁即ち集中皇室に忠ある者。又は氣節慷慨の意味を含める歌三十六首を選出し。これを上らる。是れ一は公か幽辭を慰め奉り。一は益々勤王の御心を鞏固にせんとの心まらひなり。文久元年九月。美

濃尾張を経て伊勢に至り神宮を拜し。歸路山室山に登りて本居翁の墓に詣て。歌を奉らる。其歌『おくれてもうまれしわれか同世にあらは杏をもとらまし翁に』。其れより大和を経て大坂に出て。中島廣定翁の僑居を訪はる。京都に出て皇居を拜し。名區勝地をさぐり。太田垣蓮月尼を訪はる。尼大に翁か歌論に服し。翁も又尼は學問深からねと。其歌の眞面目を得たる事は。をさゝ／＼今の世の歌人を以て。自ら許す人の及ぶ所に非すといはれきとそ。此時の旅行日記を紳の薰と名づく。元治元年再び神宮に詣て。月瀬に遊ひて梅を賞せられたり。此頃に至りては。翁の名いよ／＼世に高く。就きて學ぶ者年々に加はれり。翁大義名分を明にし。皇室を尊ぶを以て務めとし。大に人心を振起せらる。是より先北陸道の諸國。斯學を講ずるもの總てなかりしか。當時この近國。此に志すもの頗る盛なるに至りしは。翁の力なり。慶永公の翁を待せらるゝと益々厚く。其詠歌作文の添削及び古典の質義など。總て之に依頼せらる。慶應元年二月。特に狩獵の次を以て。翁の草廬を訪ひ給ひて。手つから物を給ひ。又舍號詠歌など贈らる。其歌に『みやひをを見まくほりする心よりふりはへてとふ蓬生のやと』。翁は『賤のをもいけるまるしのありてけふ君さましけり伏屋のうちに』とよみて謝し奉られたり。此後間もなく。公には翁を城中に召して。折々國典國文の講義を聞まほしき旨を傳へられしかと。翁は『花めきてまはし見ゆるもすゝ菜園田ふせのいほにさけはなりけり』とよみて奉り。固辭せられぬ。公も亦其心を汲給ひていたくも強ひたまはず。『すゝ菜園田ふせのいほにさく花をまひては折らしさもあらはあれ』。

と返し給へり。同三年六月。當時の國守茂昭朝臣。翁が年來此道に志篤くして其功渺からず。はた其貧に甘んじ節を持せらるゝ事を賞して。自今年々粟米若干を賜ふべき旨を傳へらる。人みな之を榮とせり。此年幕府大政を返上し。萬機御親裁に出る事に定まりぬれば。翁は天にも昇る心地にて。喜ぶ事限りなく。『あたらしくなる天地を思ひきや我眼くらまぬうちに見むとは』と詠せられたり。同四年正月。伏見の戦に。官軍大捷ありしより。皇威大に張り。諸道へ鎮撫使を下され。北陸道の鎮撫使も。福井城を過ぎらるゝに當りて。翁は之を路傍に拜觀せられ。『天皇の大御使ときくからにはるかにをかむひさをりふせて』と詠し出でらる。此年春のころより。翁こゝち例ならざりしか。當時諸藩には。奥羽の叛徒追討の命を奉して。之に赴き。福井藩にも同く朝命に違ひ。出兵に及はれたるに。軍人中やゝもすれば。方向に迷へる者なきにあらざりければ。翁痛く之をうれへ。病を強てそのすちの人々に忠告し。折々は奮激の餘りに。『恐かにも迷へるものか大勅たゝ一道に戴きはせて』天皇に背けるものは天地に容れざる罪をうちて粉にせよ』など詠出られたる事もありけり。まして門下の人々にて。軍におもひける向には。大義名分を懇諭し。ために折にはおこたりし病も。又勢を加ふるに至り。其秋の頃になりては。病いよくあつしくなり。遂に八月二十八日に。身まかられたり。享年五十七。終りに臨みて。『かゝるめてたゞ大御世にあひなから。志はしなからへて。追々に古に復し給ふ。みさかりの朝儀を見まつらて。はかなくも今此世を去りぬる口をしさよ』と切齒して瞑目せられけりとぞ。聞く人其

志のほどを悲まざるはなかりき。慶永公『敷島の道のまゐるへは絶果て、今よりあゆむたつきたになし』とよみ給ひて。いとなげかせ給ひけり。福井の西にあたれる。田谷村の萬松山に葬れり。翁性活潑にして愆すくなく。氣象高邁。風采俗を凌ぐ。人にて神仙の姿ありとす。博學にして多才。尤も詞藻に工みなり。その詠歌の如きは。遠く延喜天曆の古に遡り。奈良朝を窺ひ。其うへ一機軸を出せるものなるへし。著書は古今集垣間見、志濃夫廼舎歌集、圓爐裏譚、沽哉集、柳薫、花廼櫻、秀句歌集、古風文集等あり。常にかたられけるは。凡歌を學はんものは。須らく萬葉集中の新跡なる、古今集中の古跡なるものを標準として可なり。果して此正鶴を誤らさらば。歌の眞面目を得たりと云へし。長歌に於ては。古今集尙其體を失ふ。必萬葉集の正格に従はざるへからず。秀句の如きも。後人は何心なくみたりに物すれとも。古歌には正しき照應ありて。一もみたりかはしきはあらず。中古以來は何事も本旨を失ひ。取るに足らざるもの多ければ。心すへき事なり。といはれしとぞ。明治十一年。北陸東海兩道御巡幸の時。嗣子今滋岐阜師範學校に長たり。志濃夫廼舎歌集を行在所に獻して。絹匹の賜あり。當時扈從の侍臣高崎正風君。歌集を見て。『みこし路の奥にも。かゝる歌仙を出し、か。唯其存生中一たひこれにま見えて斯道を叩かさりしこそ遺憾なれ』と歎かれしとぞ。

### 五十三。地租増徴の可否を論ず

本邦ノ地租ヲ論スルニ當リテ。先ツ田租ノ系統ヲ説キ。而シテ増徴ノ可否ニ論及セントス。所謂系統トハ王朝ノ租ト。近代ノ租ト。其起原ヲ異ニシ。差別アルコトヲ明カサンカ爲ニ。假リニ設ケタル名目ノミ。請フ怪ムコト勿レ。夫レ上古ノ租稅ハ。得テ考フヘカラスト雖トモ。孝德帝大化改新後ノ租法ハ。租庸調ノ三ツニシテ。庸ハ力役ヲ云ヒ。正丁ハ歳ニ役スルヲ十日ニシテ。若シ之ヲ物質ニテ收ムルトキハ。布二丈六尺トス。調ハ絹緇絲綿布ノ類。郷土ノ出ツル所ニ隨ヒテ。納ムルモノニシテ。絹緇ハ八尺五寸、絲ハ八兩、綿ハ一斤、布ハ二丈六尺トアレハ。其數庸ニ等シキモノナリ。一口二尺六寸。之ヲ米五合ニ換算スルトキハ。庸調通シ。此米一斗。是正丁一人ノ收ムル所ナリ。租ハ即チ田租ニシテ。大寶令ニ載スル所。田一反ノ稷稻五十束。東稻ハ米。五升ナリ。此租稻二十二束ニテ。收穫米二石五斗ノ内ヨリ。一斗一升ヲ出タス定メナリシヲ。慶雲三年改メテ。十五束ニ減セラレタレハ。租米ハ七升五合トナリテ。即チ百分ノ三ニ當リ。此外ニ出タス所ノ調庸。並ニ調ノ副物ナトヲ加算ストモ。百分ノ七ヨリハ輕カルヘシ。此田地ヲ班田ノ法ニヨリテ與ヘラレ。之ヲ所有スル者ヲ良家トシ。良家ノ下ニハ奴婢アリテ。良家ハ自ラモ耕セト。大カタハ此奴婢小作ニ。田地ヲ耕作セシメ。其所得米ノ内ヨリ。僅々百分ノ三ヲ租納スルナリ。猶山野ヲ開墾シテ。私田トスルコトモ許サレタレハ。サル所有地ナトモアリテ。當時民間ノ富饒ナリケンコト思ヒヤルヘシ。以上述ル所王朝田租ノ概略ナリ。

然ルニ中古藤原氏。世々攝關ニ任シ。專横放恣。威福ヲ弄シ。奢侈ヲ極メ。漸々政綱ノ弛ミシヨ

リ。權門勢家。競テ諸國ニ莊園ヲ置キ。公田ヲ私シテ。國衙ヲ蔑ニシ。終ニハ大化改新ノ制度モ廢シ。暗黒ノ代トナリス。此時ニ當リテ民間ニハ。般富豪族ノ者威勢ヲ振ヒ。ヤ、モスレハ國司ニ背キ。正稅ヲ押ヘテ收メス。恣ニシテ國害ヲナス者アルニ至レリ。又往古諸國ニ國造、別、直、稻置ナト稱シテ在ケル人々ノ子孫。大化ニ新ノ後其國々ニテ猶勢力アリテ。多クハ國衙ノ官人トナリ。サラヌモ素ヨリ。家系ヲ重ンスル風俗ナレハ。威望高ク。田地山林ナト廣ク領シ。又國司ノ子弟親族ナト。京ヨリ下リ居テ。遂ニ其國ニ土着シ。一郡一邑ニ長タルアリ。カ、ル類ノ豪族少ナカラス。保元平治以降。源平爭亂ノ頃。兩家ノ將帥ニ屬シテ。某ノ國人、某ノ住人ナト稱シ。戰功ヲ立テ、武官トナレル輩ハ。皆前ニイヘル類ヲ始メ。ソレニ差ツキテ。代々名田多ク傳ヘ。家人ナト數多扶持セル豪家ノ公民ニテ。(鎌倉時代ノ島山三浦ノタクヒ是ナリ)。大名ト云稱モ。名田多ク所持スル者ヲ稱スルヨリ起タルナリ。サレハ此等ノ徒カ祖先ハ。皆朝廷ニ百分三ノ正稅ヲ納メタリシ良家ノ公民ニシテ。兵亂爭奪ノ代ヨリ。武家ノ代ニ移ルニ際シ。イツシカ正稅ハ納メスナリ。是占領セ兼併セシ多クノ産地ヲ私領トシ。家人奴婢ニ耕作セシメテ。其稷稻ノ内ヨリ彼等ニ幾分ヲ與ヘ。自餘ハ悉ク自家ノ所得トセシ位ノコナリケレハ。收入ニ一定ノ定率ハ無カリシナラン。又アルヘキヤウモ無シ。谷將軍ハ言フ。戰爭ヲ以テ。政治トセシ時代ニハ。農民小作人如キ者ヲ指スハ只兵糧ヲ作ル一ツノ器械ノ如ク看做サレ。領主ノ稅法ハ益々苛酷ヲ極メ。遂ニ五公五民六公四民ノ如キ酷法ヲ怪マサルニ至レリ云々ト。サテ徳川氏ノ稅

法モ。此苛酷ナル税法ニ因リテ。五公五民ノ法ヲ定メタリ。是ニ由テ之ヲ見レハ。王代盛世ノ田租ノ法ハ。鎌倉幕府以來廢滅シテ其系統ヲ斷チタリ。之ニ亞キテ興レル税法ハ。前ニ述ル良家ノ公民即地主。後ニハカ家人奴婢小作ヨリ取上ケジ所ノ所得米ヨリ成レル税率ナレハ。多額且ツ苛酷ナルモ怪ムニ足ラス。領主ハ地主。農民ハ小作ナレハ。維新前迄ハ農民ハ。名々ノ田地ヲ敢テ私有物トセス。御上ノ御田地ト唱ヘタリシハ。余カ如キ老人ノ今モ耳ニ殘レル所ナリ。所有權アラサレハ。貢米ハ借地料ト云ハンモ可ナリ。田口君曰。徳川氏ノ時。諸侯ノ何萬石ト稱セシハ。皆此借地料ノ收入高ヲ算シタルモノナリト。サレハ維新ニ至ルマテノ農ハ。借地人ニテ。土地ノ所有者。即領主ヘ納メタル。借地料米ヲ貢租ト稱シ。王代ノ田租トハ日ヲ同クシテ語ル可カラス。系統ノ別アルコト是ニテ知ル可シ。

然ルニ維新後。此借地人タル農ニ。更ニ田地ノ所有權ヲ付與セラレ。續イテ地租ノ改正ヲ舉行シ。地價百分ノ三ノ稅則ヲ定メラレタルハ。サジムキ從前ノ偏輕偏重ヲ。均一ニスルノ目的ニ止リテ。武斷ノ代ノ苛政ヲ輕減セラレシニハアラサリキ。當時ノ上諭ヲ拜讀シ其餘例ヲ見レハ漸次輕減セシコトハ政府ノ目的タリシニ疑ナクセントモ政復古ノ聖世ニ遭遇スル民ト雖モ。租稅ハ尙ホ今日マテ武家ノ代ノ苛法ヲ免ル、能ハス。豈慨歎ニ堪エサランヤ。幸ニシテ地租改正以來。年々米價騰貴シテ。民間ノ收益多キタメニ。二分五厘ノ地租。其他地方ノ諸稅ヲ納メテ。猶餘裕アリ。近年度々風水ノ害アリト雖モ。地方ノ民塗炭ノ苦ヲ免レ得タルハ全ク之カ爲ナリ。若シ之ニ反シ年々米價下落シタラシニ天下ノ民何ナリテカ地租ヲ完納セン田舎潤澤スレハ。人民

其土ニ安ンシ耕耘ニ勉勵ス。若シ重稅ニ苦シムトキハ。去リテ都會ノ地ニ出ツル者多ク。隨ヒテ土地荒廢シ一村悉ク零落スルコトアリ。民ハ國ノ本ト云フコトヲ忘ルヘカラス。王朝ノ租法ト。武家以降ノ租法ト。其起原ヲ異ニシ。所謂系統ノ殊別ナルコト。反覆已ニ論述セリ。而シテ既ニ其別アルヲ知ラハ。現今ノ租法ノ苛酷ナルコトハ言ヲ俟タサルヘシ。今ヤ彼ノ借地料ノ系統ナル。武家ノ租法ヲ一洗シテ。王朝盛時ノ田租ノ法ニ基キ。現今ノ地租ヲ成ルヘク百分ノ一輕減セラレン事コソアラマホシキニ。却ツテ之ヲ增徴セント云フカ如キハ。明治ノ昭代ニ取リテ不祥ノ言ナリ。余ハ地租ハ決シテ增徴スヘキモノニアラスト思フ。土地ハ已ニ封建殘物ノ酷稅ナレハトハ。我カ言ハント欲スル所。谷將軍既ニ之ヲ云ヘリ。嗚呼此殘物。余ハ此殘物ノ征伐改造ヲ望ムモノナリ。日本新聞ヲ讀ミテ。感スル所アリ。猥リニ燕言ヲ筆シテ。敢テ大方諸君ニ質ス。

#### 五十四。和歌勅撰に就きての建議

夫レ和歌勅撰ノ事タルヤ。遠ク延喜ノ聖代ニ。紀氏古今集ヲ撰ミ。奏覽ニ供シタルヲ以テ創始トシ。爾來代々ノ能者。勅ヲ奉スル數回。積テ廿一代集トナリ以テ今ニ現存シ。傳ヘテ以テ聖德萬機ノ餘澤ヲ仰ク。豈百世ノ幸ナラサランヤ。後花園天皇ノ御宇。永亨十年。續新古今和歌集ノ勅撰奏覽ノ後。殆四百五十年餘。此事廢絶セラル。蓋當時丕運ニ際シ。綱紀麻亂。群雄爭奪ヲ擅ニシ。天下騷然タルモノ數百年ナリ。元和ニ及テ。徳川氏漸ク偃武ノ功ヲ奏シ。文事茲ニ



物興スト雖モ。亂後ノ餘波。國家多事ニシテ事未タ。撰集等ノ事ニ不及。況ヤ亦和歌ノ事。亦  
紳縉家ノ玩弄タルニ止マリ。徒ニ花月諷詠ノ技藝トシテ。國牀隆替ニ關スルノ本旨ヲ失シ。祕  
事口訣等。敢テ不得聞。從テ民間ニモ之ヲ唱ル者ナキノ憾アリ。元祿年間。契沖柳メテ古學ヲ  
興シ。卓識一世ヲ歴ス。在滿、眞淵、宣長ノ徒繼テ起リ。太古ノ神典、古言、舊辭。說得テ餘  
蘊ヲ不殘。延喜天曆ノ頃。髣髴タリシ萬葉集ノ如キニ就キテハ炬ヲ視ルカ如キノ明識。實ニ後  
世可畏ト云フヘシ。但シ猶ホ和歌ニ於テハ未タ盡サ、ルモノ有シヲ。景樹起テ。歌ノ本旨ハ性  
情眞率ニ胚胎シ。其妙用ハ天地ヲ動カスニ足ルコトアルヲ説テ。八百年以降ノ弊ヲ看破シ。之ニ  
ヨリテ王政復古ノ前兆トナリ。又和歌ノ國牀ニ關スル所以ヲ明ニセルカ。果セル哉勤王愛國ノ  
士四方ニ起リ。忽ニシテ明治ノ新天地ヲ闢クニ至リ。以テ今日ノ昭代ヲ招致シ。四民皆太平  
ヲ樂ムノ榮光ユ浴スルヲ得タリ。實ニ是水ニ栖ム蛙モ鼓腹シ。花ニ啼ク鶯モ歌謳スヘキノ時世  
ナリ。然ルニ臣等カ此聖代ニアタリ。竊ニ缺典ノ遺憾ヲ抱クハ。和歌勅撰ノ舉ナキコト是ナ  
リ。聞クナラク。聖上夙ニ我歌ノ神ナカラニシテ。固有ノ美德ヲ具ヘ。且國牀隆替ニ關スルノ  
妙理アルヲ知シ食テ。大ニ獎勵ノ途ヲ開カセ給ヒ。廣ク衆庶ニ臻ル迄。勅題獻詠ノ事ヲ行ハセ  
給ト。閣下宜ク微慮ノ在トコロヲ奉戴シ。延喜聖代ノ古ニ則トリ。和歌勅撰ノ廢典ヲ興サレ。  
野人獻芥ノ微ヲ納レ幸ニ危言ヲ咎ムル勿ク。奏請ノ責任ヲ盡サレン事ヲ悃願スト云。稽首謹言

明治二十六年一月吉田利和ト連署ニテ御歌  
所長高崎正風君ニ宛テ建請セシモノナリ

### 第三卷 漫遊日記及紀行

#### 序

ひらけゆく世に。電信氣車はかり。いちはやくして。たよりよきものあらしと。おもひ  
たりしを。三浦うしの物せられたる。此書を見もてゆけは。またしくひまに。吾妻路を  
へて。東京にいたり。江島、鎌倉などの勝景をもさくり。又みちのく松島を見めぐりて。  
かへさにはふたら山をのほり。あるは鹽原の七湯。赤澤の瀧をのみせしなど。名たゝる  
ところ。のこすくまもあらずなん。こをおもへは。電信はすみやかなれとも。音つ  
れをきくととまり。汽車ははしりゆけとも。道すから舊跡などをみるによしなし。い  
かてかはこのまきにあよふべき。あはれめてたのふみや。

おとにのみきくわたりにし海山をわねるなからにけふ見つるかな

安彦

#### 第一。山中温泉紀行

ことし明治十六年。加賀國山中のいて湯あみに物せんとて。妻子をくして。四月二十九日朝とく岐阜の家を立いつ。これかれちくりする人もほき中に。豊島夏海のれの口とく。

春とともに立わかれ行君をけふ引と、むへき霞たになし  
消のこる雪ふみわけてなかむらむ中の河内の夏のけしさを  
とらたへり。かへしとりあへず。

いなは山霞はひきもとめねとも君に別れのをしきけさかな  
夏來てもなほ消のこる白雪のなかの河内をふみわけてみむ  
西野町を出はなる、ころ。朝風寒けれと雲雀なく聲す。

にしまちを朝立ゆけは鈴菜さく野畑の末にひはりなくなり  
河渡川をわたりて。美江寺村にいたる。道すから西の方をのそめは。伊吹山には雪なほ白し。  
いふき山消のこりたる白雪もまた時めきてさゆるそらかな

けふはけにさむければかくよめり。十一時過る頃。關か原につきて流車に乗る。こゝにてはか  
らすも。東福寺の契冲和尚の。京に登らるゝにあへり。年ころむつましくまつるを。かくゆくり  
なく。同じ車にしもものあひぬるは。ちきりあるに似たり。二時ころ長濱に着く。老師に別れ  
再び敦賀行の流車に乗りぬ。木の本を過て柳か瀬にいたれば。なかきトンネルあり。日光を見  
さると五分時間なり。それより先にも。亦四ところあれと。こはいとしも長からず。柳ヶ瀬に

て汽車を乗りかへよといふに。任せて乗りかへつ。さて車のうちにて。金ヶ崎の人のいふをさ  
けは。流船にのらんには。敦賀に宿らんより金ヶ崎のかた。便りいとよしといふによりて。敦  
賀を過て金ヶ崎にいたり。汽車よりちりて。竹内といふ家に宿りぬ。さて戯れに。よめる

海にふね陸にはくるま何こともかねか崎なる世の中をかし  
まるとに此里は海にそひたる地にて。船とも多くつなけり。むかし建武のころ。新田義貞卿の  
きつきて籠り給ひし。金ヶ崎の城といふは。此海岸の高き山なり。山の半腹に。あたこの神社  
ありて。そこに新田公古城趾碑と多りたるいしふみ立てり。

いにしへの旗手おほえて金ヶ崎松のこの間に見ゆるまら雲  
四月三十日。空晴たり。三國に渡らんとて船に乗るへき所にいたる。けふ此湊を出るは。三國  
丸といふ汽船なり。午前八時過るころ。やとりを出て。船にのりけるに。時うつりて午にもなり  
ぬれば。人々ふつ／＼云ながら。わり子とりいて、物くひなとす。此あひたに。追つき乗入る人。  
いくらといふ敷をまらす。はてはわかをる所もなさはかり。こみ合ひてせんかたなし。かくて  
笛のこゑ高く聞へしか。漸く午後一時近くなりて。みなとを出てたり。風なければ海の面ま  
かにて心地よし。

大空に羽うつ鶴賀の海ならばとふかまとくにふねははやけむ  
船のうちにて口にまかせたる。

つるか海にりよく見ゆる朝なさに船人うたふ聲のゆたけさ  
きのふまで船の通路絶にしときくにつけてもけふのうれしさ  
北の海の波をかしくみ祈りこし神のまるしをけふみつるかな  
みさを過ぐるほど。船ゆるきて。人々をたえず。

我船は今や御崎にかゝるらむ堪えぬあちになりてけるかな  
船底にふしむてきけは一こゑの笛の音たかくふねはてにけり  
午後六時はかりに。船はつゝかなく。坂井港につきぬ。うれしきとかきりなし。こゝは三國とい  
ひて。古へより名ある所なるか。近き頃郡の名によりて。坂井港と改めつるなりとぞ。船より  
ありて。寶屋といふ家にやとる。敦賀よりかまとの數少なけれど。ところのさま賑はしく。ゆ  
たかに見えたり。山によりて小學校あり。高さ五かさねにして。雲にそひえたり。九頭龍川又福井川ともいふ  
此みなとへ流れおつ。其川にかけたる橋の長さ三十間はかりあり。これを湊橋といふ。濱邊に  
は登なとすみて。すなとりを業とするよしなるか。其あたりまでは見にゆかさりき。

五月一日。朝とく三國を立出て。人力車にて小牧といふ所をさしてゆく。此間の道二里あまりな  
りといふ。三國につきて加戸村といふ里あり。此あたり道の右のかたに。坂井郡の田所。はる  
く打ひらきて。ひろく見わたさる。こゝは越前の國の中に。すくれたるよき水田なりといへ  
り。けにさも有なむとほほゆ。小牧に着ぬれば。車をおりてこゝより船に乗る。こゝは北濱とい

ふ湖にて。川の如く浪なし。一里はかりこきわたれば。吉崎町に着きぬ。こゝは越前と加賀と  
の國界にて。町の中央にあるみそ一ツをさかひとするよしなり。世に名たかき。蓮如上人の舊  
跡にて。眞宗の別院あり。此ほど大法主の代理とか來られしとて。遠近よりまうて來る人多く  
集へり。さてこゝより大聖寺に至るには。船と陸とふたみちあり。われらは船に酔たるこゝち  
さめやらねは。かちより行かむとて。人を雇ひて荷物を背おはせ。一里はかりの道を。たとるく  
あゆみて。午後二時はかりに。大聖寺につきぬ。此所はもとの城下にて。市まち廣く軒を並へ  
たり。去年の冬火の災ありて。よき家ともあまたやけうせ。今ひかり住ひなるかおほけれど。  
人立のさまなとさすかに賑やかなり。いにしへ白山五院の一つなる。大聖寺といふ寺の伽藍。  
この地にありて。後つひに所の名とはなれりとなむ。東北につゝける敷地村に。菅生石部神社  
といふあり。縣社にして。彦火々出見尊、豊玉媛尊、鵜茅不合尊を祭れりとぞ。大聖寺より車  
を雇ひ乗りて。山中にいたる此間三里なり。石高くして道あし。二天といふ所に茶店あるに  
まはしいこふ。四時頃。山中村につきて。温泉の前なるはたこや中曾根次郎といへるものゝ家  
にやとりぬ。さてけふまついて湯に入りこゝろみたる。こゝちいとよし。  
山中は小都會なり市中に挽物細工漆器などうる家多し

九谷焼の陶器  
はまれにあり

二日。朝いさゝか曇りて風あり。温泉の西にあたる山にのほりて。白山神社を拜み。其あたり見  
めくるに。珍らしきところもなく。目にとまる物もなし。町のうちも賑やかにはあれど。莚歌

の聲もせず。あそひめなともなきさまなり。宿のはしために問へり。なきにしもあらずと答ふ。十二時ころより。風烈くて土をまきあけて。空はいたくもりぬ。午後一時ころより雨ふり出て。夜もなほやまず。いとわひし。

三日。朝より雨ふりて。いとつれくなり。

立のほる湯のけかをりて村雲のふる日さひしき山中のさと

同じ宿に。ちなし國の人。福田理太郎。福田幸村の二人やとりぬて。ゆくりなく出あへり。幸村書と詩を作りておくれり。とりあへず

國を出て、遠くこし路の山中にうれしく君を逢見つるかな  
みな子に翠ひかせなとしてくらしぬ。

四日。けさくもりたりしか。午前九時すきて空晴たり。午後三時より。丸岡道なる高瀬川の橋を見に。福田二人、白木屋これも同國の人にてなど。打つれてゆく。山中村の町を出はなれて。四五町はかりの所に。あかたの道あり。右は丸岡へかよふ新道。北はもとよりの道にて。そこに高瀬川といふ流あり。此川にかゝれる橋を蟋蟀橋といふ。今其橋をあらため造るもなかなれば。人のゆきゝをとめたり。谷川にてなかれいとはやし。岸には山吹など咲みたり。まはしそこにいこひて。山中十坪中蟋蟀橋の箱といふありて

こほろきのなくや霜夜のいかならむ夏さへさむき谷の板橋

それより川にそひて。道明か潭なといふ所見ありきて。

夏山のみとりをうつす青淵のすしき夏になりけるかな

五日晴。午後山中の町の西なる山に登りて。國分山醫王寺といふ寺にいたり。住職の法印にたいめんして。此温泉のはしめいかにと問ふ。法印小僧して一つの箱を取出て。これなる縁起見給へといふにまかせて。開き見れば二巻の繪巻物あり。又別にちいさき一巻は湯をあひる人の心もちゐをまゐるせり。縁起は中ころ火災にかゝりてうせにしを。當山十四世の住職なにかし。之を歎き心を碎きて尋ねつゝ。つひに越前國某の寺よりもとめ出して。那谷寺の住職と、菅生神社の神主とはかりて。此縁起を再ひかくはもつしつるよし。漢文まで。文化九年の春。備前國登々舞武元質といふ人のちく書に。いと委しくまゐるせり。書も拙なからすみゆ。さてその縁起にまゐるせるやうは。昔行基菩薩。菅生神社今の太聖寺村にあひて。菅生神社なりにして。一人の老僧にあひ。其教にまかせて。此山中に尋ね來り。始めて温泉を発見せり。此老僧と見えしは。薬師如來にてありしとぞ。其後承平に。將門の亂ありしころより。温泉すたれ人跡たえて。又もとのまもと原と荒はて。あまたの星霜を経たり。右大將頼朝の時。長谷部信連。能登國の守護を給はりて。此あたりの山谷に獵しつゝ來りけるに。白鷺の流に足をひたして立るを見て。近よりみれば一人のかほよき女たり。信連に向ひ温泉のある所を教へて。忽其ゆくへをしらす。信連やかて人夫を集め。樹をさりとろを拂ひ。湯けたをまつらひ。始めて此温泉場を開きぬ。かくて此山に。薬師如

來を安置し。堂宇を建立して。國分山醫王寺と號し。其麓に民舎十二戸をまうけ。入浴の旅客にたよりよからしむ云々と。是との縁起の大畧なり。今は温泉のやとや。五十戸にあまりぬれと。其もとなるは十二戸なるよし。紋所は皆九曜の星を用ゐる。是長谷部氏の家紋なればなり。浴室の屋根の棟瓦も九曜の星をつされは此いて湯は。長谷部氏の再興にて。其いさを最も多く。其たまけ寺院にては此紋を用ゐるとなりものをうくると久しといふへし。かくて法印にのやをのへ。山を下りてやとりに歸りぬ。この日夕つかたより。ふたゝひ杖ひきて山中十景のうちなる。かつらまみつ見に。福田幸村を伴ひて出ぬ。湯もとの町より大聖寺街道を八丁はかり北へ下れば。此邊にては北の方を下るといふ水流にまたかへるなり道の傍に幾百とせをか經ぬらむ。と覺ゆる桂の大樹あり。其枝千枝にわかれて。道をさしおほひ。其蔭の岩のはさまより。いと清き水わきいつ。暑さの堪かたきころほひには。道行く人の掬ひて。息つさいこふ所なるへし。それより東の方にあゆみて。川のほとりにいたり。向ひの山なる。猫岩といふいはほをのそみみる。こも又十景のうちにて。紅葉のよき所といへと。今は夏木立の縁いとすしけなるさまなり。

夏木立きけるみとりに包まれていはほもさをの衣きてけり

夏山の青葉の奥にかゝれるは花にまかひし雲にやはあらぬ

六日。晴。なす事もなし。

七日。はれたり。十時ころ山中を立出て。那谷寺に到らんとす。

那谷寺は花山法皇の御建立にて此あたりにいと名たかき所なり其あたりに勅使行

御幸橋あり那谷村のせくに菩提村といふ所ありてそこに法皇の宮となふる祠ありと云此寺は山中より一里半はかり。那谷村といふ所にあり。山中より半道にして二天といふ所の板橋をわたり。又半道はかりにして山代の町に至る。こゝは山中にくらへて。所もせまけれど。いて湯のあるをもて。賑ははしくみゆ。人家は二百戸あまりもあらむ。それより山路をゆくと一里はかりに。川あり。此下流までいふり橋をわたれば。勅使村あり。此村の右の方に小高き岡あり。法皇山といふ。松ともおひしけりたり。登り見はけしきよからむとおほし。又ゆくと二十丁はかりにして那谷村にいたる。寺は村の東にありて。境内いと廣く。夏木立の縁すしけなる。池のほとり楓の木いと多くおひしけりて。大いなる巖いくらもそはたちつらなり。洞穴あまたあり。中央なるいはほの洞に。觀世音の堂を造りこめ。おくの細道に云山中の温泉行ほど白根の嶽後にみなしてあゆむ野の山きはに觀音堂あり花山の法皇三十三所の順禮とけさせたまひて後大慈大悲の像を安置したまひて那谷と名付たまふとかや那智谷の二字をわかし侍しとそ奇石わさく古松植ならへて堂ふきの小室岩の上に造りかけ其まへに三間四面はかりなる樓閣あり。楡はたふきにて。いはゆる入つ棟つくりなり。西京の清水寺の堂の如く。きり岸へかけ造りになせるものにて。高さは貳丈はかりやあらむ。壯大なるにはあらねと。巧みなる造りかたにて珍らしく。景色まことに比ひなく聞しにまされり。那谷寺の紀行は。別に委しくまるせれば。こゝに省きぬ。那谷寺はいはやてらともいふよし。契りあらは秋また間はむ岩屋寺いはねのかへて吾を忘るな

山代に行かむとちもはくわすれても車にのるな石たかき道

このあたりすへて石おほく道あし。

八日。天氣よし。今日は此地の薬師佛のまつりとして。賑はしく寺には花の塔つくりて。釋迦ほとけのみかたに。水そそぎかけてをかむ。これをうふ湯とそいふなる。まどやけふは灌佛會なれば。午後には大般若の讀經あり。音楽などもありて。まうてくる人いとく多く。道も所せきまてつとひたり。

卯月にはあらぬさ月の八日にも佛にうふゆたてまつるなり

日にそひてあつさまさり行空のけしき。けふはとにたへやらぬはかりなり。

九日。晴たり。

十日。朝より曇りて。夕つかた雨いさゝかはしめきつれと。多くはふらす。けふはなすさともなければ。つれづれのあまり。加賀の國の名所ともを題に歌よまむとて。

むかしより名に聞えたる俱利伽羅嶺は。はやく北陸道第一のさかしき山とて。人の恐るゝ所なるを。近き年その所に。新たに天田越てふ道をひらき。旅路もいと易くなりぬといへり。くりからは。壽永のむかし。源義仲が平經盛等をあそひ討ちし古戰場なり。

いはねふみさかしと聞し栗柄の道さへやすき君かみよかな

金澤近きあたりの。春日山といふ山の麓に。談議所村あり。そこにいさゝけき瀧ありて。鳴者<sup>ナリモノ</sup>瀑といへり。こは文治のころ。源義經陸奥國に越かむとて。安宅の關に來り。關守を欺きすてに通る事を得て。こゝにいこふ。關守なる宮極泰家酒肴をたつさへ追ひ來りて。義經等をもて

なしけり。其時辨慶立ちて。鳴者瀧の水とうたひしより。その名起れりといひつたへたり。

昔よりその名ひきて今も世になるひさしき瀧の水かな

石川郡なる。兩股川の川上に。白菊潭となつるところあり。潭の内とり菊おほく生たち。その花白く美しく。其香世にたくひなし。花の露またたりそくをもて。菊水川ともいふとなん。

落ちつもる露か雫か白菊のふちとなるまていくよ經ぬらむ

金澤の公園を。兼六園といふ。園の内に明治紀念之標あり。大なる石をたゝむ。高さ二十一尺あまり。其上に日本武尊の銅像の。たけ十八尺餘なるをすゑたり。こは明治十年西南戰ひに討れし。第七師管の軍人のために建てしなりとぞ。

やまとたけかみの尊のいたゝせるみかたをみれば尊さろかも

松住より西美川てふ村にゆく道を。木會街道といへり。こは昔木會義仲か。平氏を追ひし時。此道によりしをもて。名つくるよし。此街道のなかには笠間といふ村ありて。そこに笠間神社あり。大宮媛住吉三前の神を祭り。譽田天皇を合せ祀るといふ。此祠の前に年ふりたる藤あり。大樹を繞りてわたかまれるか如きかたち。蛇に似たるをもて。蛇藤と呼ふとぞ。

名のみして雨やとりせむ蔭もなし笠間のみやの藤浪のはな

白山村より中島村にいたる間に。歌占住吉社<sup>ウタウラシ</sup>の趾とて。路の傍にもほさなる殿あり。相ひかひて一すちの瀑布おちたり。これを歌うらの瀧とたゝへ。世に名たかしとなむ。

故郷のおほつかなさをうらへてもとはましものか歌占の瀧  
白山の千歳谷といへるは。三四町ばかり。雪むかしより消るとなく。人其うへをゆきす。こ  
は御前、大汝のふたつの山の。あひあふ所の深き谷に雪氷いくへともなくつみかさなり。おの  
つから平らになれるものなり。西南の方より谷口を見れば。積れる雪かけおちて。十丈ばかり  
のさきさしをなし。其下に大いなる洞穴ありて。水をふき出たすとたきの如く。ひききはいか  
つちのまとしとぞ。

昔よりとくる世まらぬ千年谷ちとせの雪や降りつもるらむ  
安宅は海に臨みて。いにしへは驛をおかれし地なり。梯川といふ川の。海に入るところにあり。  
文治のころ源義経の越ける關のあとは。はやく海となりて。今は岸をさるさと二三里の海の底  
なるよし。かく北の海は年々にかけ失せて。ところのさま移り變るとなむ。又この濱に黒さい  
ろのつやありて麗はしき小石あり。安宅石とて世にもてはやすとぞ。

おほつかないつら安宅の里ならむ跡もとめぬなみの關守  
現はれて世に光りあるあたか石安宅も玉に似ればなりけり

富士寫嶽は江沼郡にあり。山のかたち富士に似たるをもて。名つけつるなめり。  
これや此富士のひなかたふる雪も山の姿もかはらざりけり  
篠原といふ地に。齋藤實盛の塚あり。壽永二年の戦ひに。實盛塚をそめて。源義仲の軍に向ひ

手塚光盛とたゝかひて討れぬ。義仲憐みて其尸を葬りけるよし。源平盛衰記などのふみに見え  
たり。今の手塚山、首洗池など。皆其古跡なりとぞ。

橋立のをしほの浦の篠原にまのふもとほきむかしなりけり  
このほかにも。名所古跡多けれど。さのみはとてやみぬ。

十一日。朝またさより。小雨ふりてけふるか如し。さのふ二時過るころより。丸岡の新はり道を  
試みむとて。栢野村の橋までいたりける頃。雨いさゝかふり出てぬれり歸りつ。此道は大聖寺川  
にそひて。南にのほる道なり。道の傍なる山にて。石をさき出すとちひたし。すへて此あた  
りの石は。やわらかにして。切こなすにはいと易し。あたひも亦いやしければ。家ことに敷石  
などに用ゐたり。川の向ひに夏木立のみとりなるに。藤の花咲かゝりて。景よき所あり。かの  
見ゆる里の名を問へは。菅谷と答ふ。道すからうつさのさかりなれば。手折て家つとにす。

家つとにをりしうの花露もちて雨うちけふる山のまたまち

これまでさのふの事をまゐるす。さてけふは雨ふりて。朝よりつれづれなれば。午の時より前に  
二たひ湯に入りぬ。鶴壽堂といへるふみ屋よりかり來れる實事譚といへる書をよむに。其中に  
をかじきとあり。かの茶の湯の道に名高き千の利休は。和泉國堺なる南の莊今市町のうまれ  
にて。遠つ祖は足利氏の童坊千阿彌にて。田中氏なりき。堺の人道陳といひしものに。茶の道  
を學ひ。後には其名あめのまにに聞ゆるに至れり。利休數奇の心もちば。家隆卿の歌に。花をの

み待らん人にやま里の雪間の草の春を見せはや」といふ意をもて。其道の奥儀とはなじ」と。  
後に法躰となり宗易とよひ。抛笠齋といへり。世に用ゐらるといへとも。もとより隠逸を好み  
ければ。慈鎮和尚の歌に『けかさしと思ふ御法をともしれば世わたるはしとなすそ悲しき』と  
いふを。常に口すさみたりとなむ。いとやさしき心はえなりけらし。  
十二日。雨ふりてもものさひし。故郷の岐阜近きあたりのなにかし。湯あみにこゝに來りぬとす。  
けさ我方をとひきてものいふ。午の時ころ。空齋ぬへく見へしを。又曇りて時ならずさむじ。  
十三日。けさは空晴て。日うちと句ひ出てたる。いとこゝちよし。さるに又十時ころより  
曇りて。ひねもすはれやらす。夕つかた。福田の方を訪ひてものかたりす。明日は采石巖とい  
ふ所見にゆかむとちきりぬ。こは先年詩佛老人此里に來りける時。名つけたるに也。川のほと  
りの石に。文字を系り付たりとぞ。

十四日。朝より雨ふりて終日やまず。よへ夢に故郷の見へければ

海山を遠くへたつる旅ねともきりてやゆめは行かよふらむ

十五日。あしたのほと曇りたりしか。やうく雲はれてよき日になりぬ。けふはれいのことく。  
湯つほを洗ひ清むる日なりとて。八時ころよりをのことも出きたり。湯けたを洗ひそよき。古  
き湯を皆ちとしやりて。十二時ころまで。戸をまめて人をいれす。其間にあたらまき湯わきい  
てて。はや八合目はかりになりぬれば。湯の口明きぬとて。宿のはした女走り來て告れば。や

かてゆにいりてみるに。清きこと鏡の如し。長さ七間に幅三間ばかりの湯つほに。わつか半日  
にたらすして。かく多くの湯わきいて、湛ふるも。いとあやしきまてに思はる。かくて後三時  
ころ。再び湯にいりけるに。はや十合にあまりてなむありける。さてけふは。采石巖にゆかむと  
かねてちきりおさける福田を伴ひて立ちいつ。山中の町を。東南の方に出離れ。川をひ道を木  
の根ふみわけてありゆけば。水に臨みてゆついはむらさし出で。高く低くさまく列なれる。  
其の巖なる岩の陰に。大字にて采石巖とまゐるし。其傍に詩佛題と彫付たり。えもいはすおもし  
ろき所なれば。夏のさかりには。暑さをさけかてらに。見にこむにいとくよかるへしとおも  
はる。詩佛の詩あるよしきげと。まゐる人もなければ。此里の大倉なにかし。風流心ある人な  
りとさして。其詩たつねはやとかへり路にたちよりぬ。大くらのあるし出あひて。何くれ物か  
たりす。詩佛の詩は北遊詩草にあなれば。書篋より明日とり出あきて。見せまわらせむといふ。  
あるし名は仰道といひ。松齋と號せり。故橋曙覽のをしへ子にて。歌をよみ又詩俳諧のほくな  
と。好みてものするよしなり。仰道か促細橋コホロキヤシの霜をよめる歌なりといふをさくに。

秋深みさむき夜すからなくといふこほろき橋に霜降にけり

十六日。空いとよくはれて暑さを催せり。午後。福田幸村ともにも。ふたひ大倉松齋をとひて。  
詩佛の北遊詩草貳巻をかり來る。松齋ちのかよめる歌ともほくみせ。又詩文をも見せなとし  
て。時うつるまでかたらひし。ちのれもたにさく四ひらかさてあたへぬ。夕つかた醫王寺に行



て法印にあひて。あのか山中十景をよめる歌をおくる。法印よろこぶと限りなし。其十景の歌

響王林花

まるしある出湯の山の花ならば風の病もまらすをあらまし

桂清水登

ひさかたの月にはうとき山かけのかつら清水にとふ登かな

高瀬漁火

かへり火のかけこそみゆれ高瀬河さの夕やみに鮎子汲らし

道明秋月

山川のふちにやとれる月影はうきて流れぬかみなりけり

大蔵紅葉

世とともに動かぬいはの心まで秋にはうつる葦のみち葉

蟋蟀橋霜

秋更てゆく霜まろしほろきのなくや山路の谷のいたはし

富士寫響

ふしのねに似たるをみれば三越路のつねなる雪も珍きかな

水無啼猿

ましらなく片山そはの高き木に夕日のこりて秋かせそ吹く

湯屋煙雨

このねぬる朝のゆの氣打なひきけふるとみれば村雨を降る

玄溪城跡

もののふの馬ひたしけむくろたにの山下水に河鹿なくなり

此寺の額。國分山の三字を。大字にてかき。左りに左少將源定信と名かきあり。是なむ世に名

たかき白川の少將松平越中守の筆にて。そのころ越前丸岡城主なにかし。若年寄にて少將に交り深かりければ。其紹介にてこの額かゝれけるなりとぞ。

十七日。晴たり。けふの同やとりにありし。福田氏二人ともに。國に歸らむといへは。ちくりす。

さて後十時ころより。山代の温泉見に行かむとて。妻子打つれてかちにて出たらぬ。二天といふ

ところにいこひ。大聖寺川の橋をわたりて十町あまりゆけば。はや山代の入口なり。山代の温泉は市街の中央にありて山中のよりははけしく其湯は熱度高きゆへ家々にとり湯にし

ありて山中のよりははけしく其湯は熱度高きゆへ家々にとり湯にし町はいとしも廣からねと。家の数は二百は

かりもありて。其内宿屋十八戸ありといふ。すくれてみゆるは。倉屋、荒屋といへる二軒なり。

くら屋に入りていこひ。晝の飯たうへなとして湯にいりぬ。まどね枕なともていて。ついしよ

うす。此宿のはした女にまるへさせて。此あたり見ありき。薬師堂薬師堂は醫王寺といふ眞言宗の古刹にて景色よき地なり此寺にいし

へは白山五院の一角より山つゝきに。縣社服部神社にまうて。あゝよりははしためをかへして。ゆる

らかに度々來し道をたとりつゝ。夕つかた山中の宿に歸りつぎぬ。

十八日。風はけしく吹きて。ものさわかしき日なり。夕かたより雨ふりいて。夜に入りてはけ

しくなりぬ。家よりふみの便りあり。

十九日。けさ雨のはれたれと。雲のまた晴やらす。十時ころに雨一まきりふり來て。霰のま

じれるは。時ならぬ空のけしきなりき。午後になりて。やう／＼はれわたりたり。夕さりつか

た。又促織橋見にゆく。さいつころは。いまた石かさなと組わたりしを。今日はすてに橋けた

を渡したり。されとまた板を並ぶるにはいたらす。板橋を渡りて川向ひの里に行きて見る。こ

くを下谷村といひて。丸岡街道なり。けふはさむくて。わた入のうへに羽ちりを着るはかりな

るは。時ならずおほゆ。

二十日。天氣よし。大倉の松齋が許におくりける。

まる人もなき山中のひとつ松あせをのみこそ友とおもはめ  
松齋かもとより。歌三首かきておくれる。其うちの一。首。

水なしの山のかひよりみさくれはかたの浦に鯉あみひく  
午後。足のゆくにまかせて。醫王寺の山にのほり。白山社にまうて。猶それより上に登ると壹町  
はかりにして。少し平らかなる所あり。又そこを北にむきてのほれば。いたゞきにいたる。三  
十歩はかりのたひらあり。其傍に石碑ありて。天傳道人之墓と彫たり。こは大聖寺藩の近習役  
なりし松岡某。主公に従ひて此山に登りける時。としへに。こゝにあらまほしきよし。申しけ  
るに。主公さらは身まかりたらむ後。こゝに墓をつくれといはれけるによりて。此墓は作れる  
なりと云ふ。此あたりより北をのそめとも海見えず。のちにさけは。水無山にのほりてこそ。  
海はよく見ゆれとそいふ。されは松齋か歌に其よし詠めるなり。

二十一日。晴。けふは家に歸らむとて。宿のあるしに別れをつけ。朝七時に山中をいてたつ。あ  
るしもつまもはした女も家こそりておくりす。かねてより。かへさには道をかへてと思ひつれ  
は。近ごろにひはりせし。丸岡の新道をこそこのほらめと。妻子とも三人かちたちにて。荷持のを  
のこを一人やとひ。供させて山路にかゝりぬ。栢野村といふあたりまでは。川にそひて道さか  
しからず。此栢野の産土神社にめつらしき杉の大樹あり。廻り一丈八尺ありといふ。かゝる杉  
三もと並ひたり。

手早ふる神や植けむかみかきに神さひたてるかみのほこ杉

此里より山にのほるまど。凡そ一里あまりにして。いたゞきに到る。これなむ加越のさかひな  
りける。下り坂はことにははしく。近きころをりくの雨にて。道崩れ土なかれたれば。足も  
まどろにふみなやみつ。所々に休らひ。息つきては又くたる。いと苦しけれと。幼きものは  
かへりて足もと軽く。あゆみぬるにひかれて。たとりゆくまど一里あまりにして。一の野といふ  
小村あるにいたりつきて。道のほとりの茶店にまりかけて。湯水などのむに。つれたるをのこ  
は。腰なる辨當とりいてくらひぬ。さてなほゆくこと一里はかり。やうやく丸岡の町につき  
たり。こゝはもとの城下なれば。ところのさまあまからず。家かすは五六百はかりもありなむ  
かとみゆ。此所にいこひて晝飯くひて。人力車に乗りて出たり。平らかなる道を行くまど二  
里にして。九頭龍川といへる大川あり。其川の橋を渡れば船橋驛なり。これより一里にして。  
福井町に入る。福井は昔の北の莊なり。町の央に九十九橋とていと大きな橋あり。此川は足  
羽川の流にて。末は坂井港にあつといへり。福井大橋南通り二丁目菓子屋といふ家に宿りぬ。  
二十二日。天氣よし。朝またき起出で。ひとり足羽山の公園にのほり。足羽神社にまうつ。所  
人此山を愛宕山ともいへり。のほりゆく坂の兩側に料理店などあり。本社は山を登るまど壹町  
はかりにあり。それより又壹町許りのほりたるいたゞきに。男大迹皇子のみかたを石にてささ  
みて立たり。こは此國の人々か。近年思ひたち。力を合せ資をつのりて建てたる紀念標にて。

來月の十二日より十六日まで。其祭典をなすよしなり。足羽のいかさのうちに。大きなるいしふみあり。よりに見れば。田中大秀の撰ひたる長々しき文を多りて。其うらに歌二首あり。その一首。

道の口おしよ出ましてまらしける天つ日嗣を世々に絶せぬ

とあり。此境内より福井の市中一目に見はるかして。景色いはむかたなし。やどりに歸りて朝飯たうへて。八時ころ。車にのりて此宿を出てたつ。二里はかり行きたる所に。朝六の橋といふ橋あり。橋をわたれば浅水の驛なり。朝六も浅水もともに。あさんづといふなるへし。夫より長泉寺などいふところを過ぎ。鯖江の町にて。まはらくいこふ。町のさま丸岡にくらへて。いさゝかまされり。こゝにて車をのりかへ。武生にいたる。この昔府中といひし所なり。大路いと廣くまら並もよし。午の時にはまたならねと。所からなれば。こゝにてこそと。ある家に入りて。ひるのいひたうへていこふ。武生より脇本驛、鯖波驛を経て。湯尾峠ユヅナにいたる。此間二里半はかりなり。峠のこなたにて車をおり。人を雇ひて荷物をもたせ。名にひききたる峠をこゆ。登り降り十丁あまり。さかしくいあれとも。思ひしよりはやすかりけり。坂を下りて又十町はかり。今莊驛なり。こゝより再び車にのりて。板取驛にいたる。此あひた二里九丁なりといへり。板とりは山の中にていとものさひしく。やと屋もさるべきはわつかに二戸あるのみ。そのひとつの中村與助といふものゝ家にやとりぬ。さて福井よりこゝまでの道のりをはかるに。

すへて十一里はかりにて。其間に湯尾峠の山越はあれと。そのほかは平らにて。車よくかまへり。二十三日。朝七時に。板取を出たちて。名におへる朽木峠クシキにのほる。道さかしくして。車かよはねは。荷物は人にもたせて歩行にてゆくに。けさは空くもりてさむし。三十町はかりにて。たうけにいたりぬ。こゝに深見某といへるものあり。其家に豊太閤の陣釜を持傳へたりとぞ。この時に福井縣と滋賀縣との管轄界の標杭あり。これより下るまの一里にして。中の河内驛なり。人家百戸はかりある山あひの小驛なり。こゝにして車をやとひ。のりて登るまの一里。いたゞきの平らなる所に。旅亭とあり。椿峠といふ。此坂道北よりのほるにはさかしく。下るにはさのみけはしからず。中の河内は。雪ふかき所とさつれと。今は夏木立のみとり。すゝしけにまけり合ひて。郭公など鳴へさけしきなり。夏海の歌を思ひ出て。

谷間なる雪さへ消えて歸さには青葉の中のかうちなりけり

椿峠より下ると三十丁はかりに。里あり椿阪村といふ。里人ハつはいとそいふなる。こゝより道平らにして。車よくゆく。三十丁餘り走り來て。ときは十一時に柳ヶ瀬驛につきぬ。綿屋といへる宿屋にいらりて。物たうへて憩ふ。こゝよりは汽車に乗らむとて。時をまつほとに。午後一時になりぬれば。停車場にいたり。やかてのりたれば一時二十五分に車は出てたり。程もなく長濱につきて。榊屋といふ家に入りていこふ。此家の高とのより。水海はるかに見わたされて。風景いふはかりなし。長濱より又汽車にのりてゆくに。空もはれわたりて。けふは家にかへる日

なれば。あとにこゝちよし。とかくするあひたに。汽車はやく關が原につきぬ。さしめきおりに。まつ茶屋に入りて。ゆふけたうへなとするほとに。六時になりたれと。夏の日永きまたくれむともせねは。人力車を雇ひて出たちぬ。垂井、赤坂を経て。みつ屋北方といふところにかゝれるころ。日は暮れて暗なれば。いとくらきに。火の光をたよりに。車をはせて。美江寺、江渡をすぎ。大寶寺野を経て。岐阜の町に入り。家に歸りつさけるは。夜の一時に近かりき。かへり見れば。四月二十九日に。家を出て。けふ五月二十三日まで。二十五日といふ日かすのうち。旅路にも家にも。つかかなかりしは。いとくよろこはしくうれしくてなむ。明治十六年五月。

## 第二。惠の露

神風の伊勢の内外の宮にまうてむと思ひ立ちなから。此ころうちつゝきたる雨にさはりてとまりしを。今朝はめつらしう空打晴れて。いとよき日になりぬれば。いざとく／＼とて。やかに車なと取まかなひ。妻子を相くして。明治十六年四月二十二日といふ日の。十時はかりに。かと出てす。あはたしきやうなれと。つかさゆるされにたる身には。かうやうのこと。すへて心やすし。

雨晴れぬいざけふはとて旅衣たつさへやすき此身なりけり  
養老の瀧のほとりの花。さかりなりとききて。けふは車をかの山にめぐらむとす。道すから

歸る雁のわたるを見て。

かりかねの歸る雲井をよそにみて我はけふよりたつ旅路哉  
大垣へて。高田にいたる。此あたりいつこも／＼菜のはなさかりなり。

吹わたる風ものとかに見ゆるかな菜の花かをるはたの中路  
蝶のとひ鳥の囀る春の日をくるまのうへにねふりつゝゆく  
養老の山にのほりて見るに。心言葉もあはす。

ちとしくる瀧の白絲中絶えてかゝれる雲はさくらなりけり  
あなしくは老を養ふ瀧の絲に花のいのちもつなきとめなむ  
千歳樓の前なる櫻の陰にやすらひて。

老らくをやしなふといふ此山の花は千年のかさしならまし  
此山に三たひ來つれと櫻さくはるはけふこそ初めなりけれ  
伊勢の國に入りて。尾津の神社の前をすくとて。

古の松は見へねとをつのさき千代へてあとはのこるかみ垣  
石薬師のうまやより。道をまけて御笠殿神社にまうつ。こは妻かとし頃の願ひなり。こゝにて  
ゆくりなく。祠官鈴木倍重にあへり。こはもとの神主にて。はやくより来るへなり。  
君にさへ逢にけるかな御笠殿さしてきつるを神やうけけむ

日永の里をすく。此あたり旅人おほし。

長閑なるはるの日永を打むれて大宮まうてねるはたか子そ  
名物の牛の舌餅。いときたなけなれと。

旅人ははるの日なかに飢つれば牛の舌とてもちひさらめや

かた岡山ならり。をかしからまし。白子に観音寺てふ寺あり。世に子安の観音となむいへる。

ちさつなみ白子の濱に立よりて子安貝をやわれはひろはむ

安濃津を過くれは。道の左にあこさか浦へゆく道あり。いとしも遠からすとよげと。行なほぞ  
いとけは立もよらず。

心なくあこさの浦にひくたひの又此たひも見すに過ぎなむ

藤形の里は。松の名所なり。

藤形の松の老木のなかりせば千世のまるしを何に見てまし

雲津川をわたれば。月もとの里あり。

いとまぐ春は朧にくもるらむ雲津につく月もとのさと

旅人は空打ちあふさかきくもる雲つのだに道いそくなり

宮川のまるとは。豊宮川といふなりけり。また度會川ともいふ。その川をわたり。山田にいたれ  
は。此春なむ御木曳と唱へて。このあたりの人こそりて。老たるも若さもみな出て。赤さま

ろさいろくの衣とも。ことさらひたるさまにて。にひ宮つくりの木ともを。曳きもてはまふ  
けはひ。いと賑はしく。そを見むとて。旅人おほく道もせに立こみて。我がのる車。得しもす  
まねは。からくうら道をめくりて。やうく外宮の御垣の前にいたりつさぬ。かくて豊受皇  
太神の御前を拜し奉るに。かしてさもうれしをも。さまく思ひつくけられて。いひ出て  
言の葉もなけれは。た。

おほ神の恵の露をわか草のつまさへ子さへあふくけふかな

その夜古市にやとりて。

濱萩はとほき山田のたひまくら女郎花をやちりふせてねむ

おい人のおとにては。いかあらむ。

二十五日。つとめて。内宮にまうつ。五十鈴川のなかれいと清く。今朝はまた。まうてくる人  
も多からねは。杉の下道まつかにて。登りゆくまくに。いと心すみてすかくし。御前にふし  
をかみて。

かしてさに言に出ては祈らねと世をちもふ心神をまらむ

世を祈る外に願もなかりけり國やすければ身もやすくして

林崎の文庫高き所にあり。櫻ありと聞きしを。時過ぎたればかひなし。

おしなへておなしみとりのはやし崎いつく櫻の栢なるらむ

山田より志摩國鳥羽を経て。磯邊にいたる。山道いとあしくて車すくます。四時はかりいそへなる上の江に着て。伊雜宮を拜み。猶十町はかり行て猿田彦大神の社にまうつ。かゝるほとに。空のけしきあしく成ぬれば。此郷にやとりたるに。つとめて小雨ふり出ていとわひし。下の郷にいたる道にて。國府の里人か。船もてむかへに來たるに行逢ぬ。うれしさいはむかたなし。濱邊よりその船にのりて。入海を三里はかりかあひた漕わたりもて。國府の宮方といふ所に着ぬ。あゝなる井村武右衛門か家にやとりて。何くれ年ころの物語ともするほとに夜更ぬ。此里は外海に近ければ。聞馴ぬ浪の音に。夜もすから目もあはす。こふの濱磯もとゆすりよる浪のおとを枕にきゝあかしつる井村かあないにて。遠つ祖の墓ををかみ。夫より城あとの山にのぼる。村人ら城の山とよひなせり。

尋ね來てけふあそ見つれ遠つ祖の高きさままきゝ其跡ところ五百年を古きの山のまもと原元の跡ふむけふにもあるかな遠つ祖のまめしたか城は春草のまけき所とあれにけるかな安乗といふ所は。國府より五十町はかり。北の方へさしいてたる岬にて。齧とも多き所なり。其みさきの鼻に燈明臺あり。

灘わたる船のまゐるへにともす火もみよの光の一つなりけり

浪あれて沖くらき夜にこく船は此ともし火やいのち成らむこのあたりのけしき。得もいはすあもしろし。

うな原の霞につく朝けふりなひくや船のわたるなるらむ春の海に秋の木葉の散れるかと見ゆるは齧の小舟なりけり安乗崎かせまつかなる波の上にわかめとる船こき出る見ゆ玉もかるたふしの崎もはるく／＼と見へこそ渡れ白波の上に和田の原追手に走る眞帆みれば風こそ舟のいのちなりけれわたつみの八十島かくれゆく舟の帆影は松の隙に見へつゝ磯にありて。

浦波のよせてかへれる磯みればわかめなのりを鹽貝もあり海人かあわひとるさまこそいと哀なれ。

浪の間にかつき息つき水鳥に聲さへ身さへまかふ海人かな女はかつきをは船こきてあわひとる海人の業を片思ひなき海人の水底に。久しく入居て浮あかりては。いきつく聲さなから。水鳥の鳴かはすやうなり。あわひとる安乗の海人かつく息の聲聞たにも苦しきものを安乗より。あしの一葉をかりて。入海をわたり千賀、的矢なといふ所をみて。國府に歸りける

船の中にて。

あふさすをこきたみ來れば萬の濱松のまつ枝に浪のよるみゆ  
紅葉する時にしあらねはつたの濱松のみ青くみへわたるかな  
千賀の浦につゝきて。畔蛸といふ所あり。其濱にもまろの松。といふ木ありと聞て。

よる浪をわらふまゑして面白の松にふきよるつたのはまかせ  
海松といふもの。土佐日記に見へたれと。いまた其ものを見ざりき。さるを此海よりあかれ  
るなりとて。一尺はかりの枝を人の得させてければ。

わたつ海の神のみやこに子日せしその海松やなかれよりけむ  
常盤にて色もかはらぬ海松をひけはやこれも千代のためしに  
國府をたちて歸るさ。宮方より船にのりけるに。その船に老さらほへる翁あり。年は八十にあ  
まれりといへど。いとすくよかにて。わかき時より船を乗りて。此年までつゝかもなしといふ  
を聞て。

八十年は波の上にも過にけりうきたる世ともおもほへぬかな  
此日空くもりけるか。磯邊より雨ふり出て。車の内いといふせし。家立茶屋といふ所よりあり  
て。妻子らも皆かちにて。山を登る。いとかく苦しみ。目を見るといひあへり。やうく時  
ちかくなりぬれば。道いよくけわしく。雨さへいたく降てすくむへうもあらず。雲は足もと

より立のほりて。心も空なるに引かへて。鶯の聲かすかにきこゆるは。古巢間ふにやあらむい  
となつかし。

いまはとてかへるふるすやあれぬらむ谷まにまよふ鶯のこゑ  
からく山をのほりはてし。茶店のあるに入ていこふ。それより杉坂といふ坂をこそ。山路をた  
とりく。宇治にいたりつきたるころ。雨をやみにけり。

むら雨ははれてもまほし神路山なほつゆあつる杉のしたみち  
かくてふたしひ。大宮にまうてし。思へはあさからぬちきりなめりと。いとうれしくて。

恵みあれはまた小くるまのめくり來て大宮柱をかみつるかな  
其日は二見にやとりて。明なは朝日に匂ふふしの根を見むとの心かまへなりしに。あしたより  
雨降ければ本意なく。

玉櫛け明ても富士の見へぬこそ今朝は二見のうらみなりけれ  
清き渚といふも。近きわたりとききて。

伊勢のうみの清き渚も言のはの玉ひろはすはかひなからまし  
汐合のわたりにて。雨いたくふりぬ。

雨はふり船は進まぬ鹽あひはからき目を見るわたりなりけり  
松坂より道を左にをれて。山室村にいたる道にて。

小山田に午もひいて賤の男かかへすを見れば春たけにけり  
山室の山は。松坂より壹里ばかり。ときつれといと遠かりけり。  
はるくどさかしき道をたとり来て登りわつらふ山室のやま  
山中に鶯の聲きこゆ。

かくてあそ身もやすかれと山かけに世を鶯のひとりなくなる  
鈴屋大人の墓を拜みて。

尋ね来て山室山のおくつきをうれしくけふはおかみつるかな  
まめあきし心たかさも見ゆるかな山室やまのみねのおくつき  
神戸の驛より雨いたく降出ぬ。

日數ゆく旅の空にてふる雨はくるしきまどのかきりなりけり  
わか草のつまもともなる旅ながら猶ほふる里は戀しかりけり  
其夜桑名にやとりけるに。ゆふけに名物の時雨蛤を出しければ。  
旅衣ぬれくさつるまの里にきくれときくもうき名なりけり  
いたくつかれたる時。ひとりとに。

かくはかりやすき旅路もなやましき老は此身の重荷なりけり  
ゆくさにはまたしかりし藤の。ふさには花咲たるを見て。

けふ見れば咲き出し藤のこ紫ふかくもはるはなりにけるかな  
家に歸りて。

つゝみなく歸りしたにも嬉しさを家にもかはるとなかりけり  
家に來て先うれしきはたらねのかはらぬ影を仰くなりけり

明治十六年五月一日家に歸りてゑるしをわりぬ。

### 第三。東行日記

四月十四日晚に起出て見れば。空さよく晴たり。さらは出たつへしと。妻子ともをいそがした  
て。またくするあひたに。さのふの夕つかた。豊島夏海よりあこしたるふみを見れば。すく  
やかにとく行てとくかへりませなとかきて。

のとかなるこゝろを旅の空にして霞とともに立ちや行くらむ  
とありとかくするほとに。人力車夫も来ていさといへは。乗りて出たつ。午前五時三十分なり。  
かくて木曾川をわたるころ。川上打かすみてさものとかに見へわたる。

春かすみ立わかれては出たれと心はあとにひかれぬるかな  
こは前の歌の返しすともあらず。たゞいひにいへるなり。十一時ころ名古屋に着て。河津の  
家に七午飯をたへ。それより母君にたいめして。いとまをしいてたちゆく。道に熱田宮に参



詣し。山崎。笠寺を過て。鳴海驛にかゝる。

火高路は何許なるらむ鳴海瀉みやれば遠くおとみこめたり。桶はさまの古戰場は。道より右のかたに見へたり。境川のはしをわたれば。三河國になりぬ。昔業平朝臣の。はるく來ぬると詠せられし。八橋の古跡をはるかに見てすく。

行先をいそぐ三河の八橋はこゝろにのみやかけてゆかまし。さすかになかき日も。夕へになりて。矢はき橋をわたる。

東路の矢はきの橋の長さ日もいまはと空やくれわたるらむ。午後七時ころ岡崎につきて。まきの屋にやとる。

東路に誰移しけむなつかしきみやあのみし田をか崎のさと

十五日天氣よし。朝六時に出たちて。藤川赤坂を過ぎ。御油より道をまけて豊川にまはり。稻荷の社にまうす。それより豊橋の驛に出て。午飯をたへ。二川を経て白須賀の坂をのほれば。峠よりはしめて。遠つあふみの海原をのそむ。打はれて景色いとよし。此あたりを二軒茶屋とす。

遙くと遠つあふみの海原もいまおそみゆれこゝに來つれば

荒井を過て。東海道に第一といふ長橋をわたる。いま又此橋を濱名の橋といふ。その長さ千間ありとさけと。西のかたより海を埋て。堤のとく築きたる道。はるかにさし出て。まことの橋

は。さはかり長くもちほへさりけり。渡り過れば舞坂なり。是より三里のあひた道あしく。車はかとらす少し暮て濱松につき。大米屋にやとる。

十六日よへより雨ふり出ていとむし。つとめて車に乗て出たつ。三里はかりにして。天龍川なり。其橋の長さ六百四拾間餘ありといふ。橋をわたるころ。川風はけしく。あめ降しきりければ。

小車にほろ引きかけて降りしきる雨のさか川渡りつるかな

濱松を今朝立くれはあまさらひ降りこそまされ天のなか川

見附驛に着て。柴田敬齋のもとをとよ。あるしよろこひむかへて。さまざまの語りす。はやくより文はかよはしまかと。逢見るはけふそはしめてなれば。めつらしかりて。妻もよめもみないて。何くれなくさめ。雙飯にふたう酒とりそへ。もて出てもてなざる。心さし淺からすちほゆ。さかつきとりあけてかくなむ。

年を経て言かよはしま君なれば始てあへるこゝちこそせね

あるしは眼は見へねど。からやまとの文の道にくらからぬ人なり。午前十二時この家を辭して。猶雨をちかして袋井にいたる。

旅衣まどいになりぬはるさめに風さへそひてふくる井の里

掛川を過るほどより。やうく雨をやみたり。日坂にてわらひもちをくひて。名物のまつきは

おとろく。こゝより車をおりて。小夜中山の新道を。かちにてのぼる。峠に小泉といふやとやあり。それか庭にむかし語りに聞つる。夜啼石をすゑたり。此石夜々なきけむやしらす。

大御代の光にあひてぬはたまの夜啼さの石も聲絶えにけり  
名にしちふ中山の嶮岨も。今はかくたひらかにひらけて。夜といへとも。旅人のわつらひなしとすへは。

君か代はさよの中山小夜中にまゆるもやすき道ひらけつゝ  
坂を下りはてし。金屋驛に着ぬ。此驛は大井川の西岸にて。家たちのさま賑はしく見ゆ。小澤屋にやとる。

十七日曉に雨ふりて。あしたには晴ぬへきけしきになりぬ。今朝は七時に出たちて。大井川の橋を渡る。長さ七百間に餘るといふ。

雨雲もやく晴れたわる大井川橋踏みならしゆくこゝ地よさ  
宵のあめにみなは逆巻く朝川をつな引きのほる棚なし小舟  
金谷、島田、藤枝などたゞ過に過て。岡部にいたり。うつ山越にかゝるころ。雨はらめき出たり。此山も新道ひらけて。昔のさまはなく。百間ばかりのあひた。とんねるをまうけて。道いとよし。此山中に。ゆうひんの脚夫といふものに出あひたり。修行者にあひて文かきつけし世もありけむものを。何の道もやすくひらけしみよにもあるかな。

文通ふみちも開けてふるさとのたよりもやすきうつ山越  
開けたるうつ山邊のうつゝにも夢にもみえぬ葛のほそ道

山を下りて。まり子の驛。夫より阿部川の橋をわたる。川巾天龍川におとらす。十二時静岡に着て上田屋に午飯を食す。こゝまでは幾度となく。雨はれくもりせしを。ひるころより。またく晴わたりぬ。江尻を過て沖津にいたれば。おとに聞へし清見寺あり。道より左に石階を高く登りて。寺の庭より眺望するに。きよ見かささ。三保の松原など。遠く見へて景色よし。まこと聞しにたかはぬ所のさまなり。

東路の思ひ出にせむいほ原のきよ見かささの春のけしきを  
玉ひろふ清見か崎の濱きよみ波のこゝろのよるもみへけり  
打むかふ三保の松原なかりせは清見か崎もかひなからまし  
かくて濱邊に出て。浪のうちきは道の道を行に。小石を敷たれば。車うこかす。ありてゆくに。此あたりけしきのいとおもえろければ。くるしともおもへらす。茶店のあるにいこひて。所の名をとへはくら澤とそいふなる。

沖つ波立つくら澤の濱つたひみつゝを行かむいしは踏とも  
そこを過て。由井もちかく成ぬらむと思ふころ。ふと弓手のかたをあふき見れば。大空に雪をけつれるやうなる嶺をあらはれ出たる。きのふもけふも。雲はれやらて。此峰の見へぬどのみ。

あかねことに思ひこしを。いまはしめて見出たる。こゝちいかならむ。心こと葉もあふよふか  
かは。たし

あなあはれあなちもしろと白妙の雪を雲井に仰くふしのね  
天津風雲のとはりを吹きあけていまこそ見ゆれ富士の柴山  
東路の旅の睡りは覺めにけり富士の高峯をけふは見つれば  
駿河なる富士の高根と聞つるは空に雪降名にこそありけれ  
大空のものと思ひしひと叢の深雪の富士のたかねなりけり  
蒲原を過て。

蒲原の里打ち過ぎて遠まろく見ゆるや富士の川となるらむ  
ふし川の河原にて。車をちりてかちにて渡る。

妹かひもゆふ川渡り見わたせは水上とほくかすむふしのね  
この川水いと早ければにや。橋はなくていさゝかなる小船にて。さしわたすまあやうけに見  
ゆ。川幅の廣きことは大なる川にも過たり。此わたりにいたくひまとりて。さすかに長き日も。  
やうやく暮かけて。かなたの岸につき。車に乗りて田子の浦をすく。

田子浦を夕こえくればさし登る月より上に見ゆるふしのね  
つきを右ふしを左に仰き見てよるゆく道のおもしろさかな

月影にさほひて。鈴川にたとり着しは。午後八時なりき。この宿は所のあしくて。よきやとも  
なけれど。暮たればせむかたなくて。龜屋といふ家にやとる。

十八日けふは又くもりぬ。朝とく鈴川をたちて。原といふ所をすく。此あたりひろくとして。  
名にたかはす。

駿河なるふしの裾野に來つれとも高嶺は見へす雲の破れば  
沼津を経て三島の驛にいたる。三島明神は官幣大社にして。宮のいとかめしく神さひたり。  
妻兒ともに。御前にふし拜みて。旅やすかれと祈るほかなし。此御社の前より。直にゆく道は  
本道にて。箱根の山越。南へをれてゆくは。あたま道なり。われらは熱海にと心さしてゆく。  
三島より一里半にして。平井村といふ里あり。これより山坂なれば。人力車一輛にむすめと荷  
物をのせ。かちにて一里二十餘町を登り。輕井澤にいたるころ。空いよく曇りて。雨こぼれ  
さぬへさけしきなるに。いとけはしき山越の道なれば。えさそあゆみ玉ふましけれど。茶店の  
あるしのいへは。かこをひとつやとひて。前のとくのせて行。まことに雨降いて。峠をこゆる  
ほと風さへそひて吹まけは。まどくにぬれて。わひしきとかきりなし。人やりならぬ旅の空に。  
かゝるうさめを見ると。つふやきつゝやうく二里あまりの。さかしき山路をこえて。三時  
過ころ熱海に着たり。

あたま山松の下道うちけふる雨はかすみのまつくなるらむ

さかみ屋といふ温泉宿にとりて。まつ湯にいらしるみるに。湯船いと清らかにかまへて。あつからすぬるからす。よきほとにしたり。其湯のわき出る源を。嘯流館といふ。あつは二百度をこえたりといふ。今それを家毎に樋もて引で。水を合せてよきほとになすなりけり。雨やみぬへく見へしを。五時過より大降になりぬ。

十九日けさは空かき曇りたれば。相模屋にとまる。此家の樓上より海を見はるかして。景色よし。

ならい吹くあたみの海の朝霞くもると見れば雨こぼれ來ぬ

兩間をまちて。近きあたりを見ありく。濱邊の高き所に天神社あり。此境内よりはるくと。海をのぞみて。

伊豆の海の朝汐くもりや、晴れてなみまに見ゆる浦の初島

吹く風の音には聞きて目に見るはけふ初島の珍らしきかな

あすはとく立なむと思へは。湯あみて後はやくふし戸にいらぬ。この夜また雨ふる。

二十日朝またき起き出たるに。雨なほ打けふりたれば。志はし出たちもためらひたりしを。人もたてはわれも立むとちもひ。荷もちのものをひとりやとひて。妻も見もみなかちにて。山路を登る。このころの雨に。道ぬかりてあゆみもやられす。からく伊豆山にたとり着て。人力車をやとひ乗たれと。坂かちにてちりてゆけははかとらす。かゝるあひたに雨雲や、晴わたりて。

よき日になりぬ。行道の左は高き山。右は海を見おろして。心はゆけと。車はゆきもやらす。くるしさをなくさめて。車ひくその子も。此あたりの名ある所とをさしてをしふ。

いつ山をうち越えくれば足柄の稻村か崎になみのよるみゆ

むかひにさし出たる。眞名鶴かさなりといふ。

いつれをか久とちもはむ千代を經し松も生たる眞名鶴か崎

もむ川。よし濱なといふ所を過て。江の浦にいたる。谷にのぞめる山そはにかけ造りたる茶屋店あり。清らなるにはあらねと。氣しきのよければ入りて息ふ。伊豆海。沖つ波間の島も一目に見へわたり。あまの小舟のこきつれたるは。春の海に。秋の木の葉の。うかへるかともおほめかる。

のとかなる春の江の浦かせなきてかすみにかふ蟹の釣舟  
ちをさくら所とに見ゆ。

ちるを見て出てにしものをさくら花また盛なり伊豆の山奥

山陰の松のこの間に葉かくれていつまで花は盛りなるらむ

このあたりより。くたり坂になりぬ。日うらくと照りて。道のぬかりもやうくかわらぬ。人も車もやすく行。

春の日のなかきを海のなま見へて波も眠れるぬふ川のうら

このねふ川といふは。石を多く切いたす所なり。道はたによき石とも多し。ちいさからは手にさくけてももてこましもものを。よし野にて民部太輔か。祈りちいめさせけむも。かゝるにや有けむとをかし。濱邊に小舟こきつれたるは。大あみを引なめり。何のわさするそと問へは。ねあそけと申すあみを引になむ侍るといふ。

引きぬれはのまる魚なきねこそけの網のうけなる漁にこそ  
石橋山のふもとをすきて。おもひ出ることおほし。

たくなめていま橋山の木の間よりかゝりやき出てし弓張の月  
平川を過て。午後五時はかり小田原の驛につき。中松屋にやとる。

二十一日空曇りて東北の風寒し。朝六時に立出て馬車に乗りぬ。この馬車は神奈川まで行なりけり。小田原を出はなれて。酒匂川の橋を渡るに。海いと近く打はれて。朝風身にしむ。

小田原をあさ立ちくれば酒匂川はるなほさむき浦風そふく

大磯平塚などはやくも打過て。馬入川のはしをわたり。藤澤につきぬれは。馬をやすめて馬丁らもいこへは。我もいこひて午飯くふ。この驛よりわかれて。江の島。鎌倉に行道あり。遊行寺は道より左に見へたり。かくて戸塚のあたり過るほど。安宿といふふたかゝけて。いふせけなる家の庭に。八重櫻のめてたさか見ぬれは。

里川のはしのつめなる安宿にをしきは庭のさくらなりけり

程ヶ谷の松原を行に。むかふよりうるはしき馬車のくつはみを並へてはせ来るはよき人の江のしまなど。見に行にやあらむ。

白馬を四つとりならへくる塗の車ひかせてくるは誰か子を

午後二時神奈川に着ぬ。こゝは横濱と東京のあひたにありて。いと賑はしき町なり。まはしまちて汽車にのる。川崎品川などたた過て。午後四時東京の新橋に着たり。まつ芝口一丁目なる。蓬萊屋を尋ねて今宵の宿を定め。夕つかた近きあたりを見ありく。れむか造の家多し。

二十二日てい氣よし。朝とくほうらいやを立て。人ひき車にのりて。四ッ谷へ行。道のついでなれば。まつ星岡なる高崎正風君を訪ひたるに。折よくも在宅にてたいめあり。川田剛さみ。其席にありて物いふ。此人はささへ歸りたり。さてさまゝのものかたりに時うつりぬれは。又もこそこちきりて出ぬ。夫より四ッ谷荒木町なる。荒川満忠の家に行たれば。あるし待むかへて。いとねむころにもてなさる。村瀬の妻もさきに來て在りて。何くれまたしくふるまふに。旅こゝちも忘れて心ちちぬぬ。午前に赤坂假皇居。華族女學校のあたり見あるさ。下田歌子。植松有經を訪ふに。みな不在にてあはず。午後には妻兒打つれて上野にゆく。家のあるし案内すれは心易し。ちのれは駒込によりて。羽田野國興を尋るに。不在なれば。又池の端に行て。間島冬道ぬしを訪ふ。久しふりのたいめなれば。かたみにいふ事。いとちほかれと。妻子の待らむも心もとなくて。かうくゝなむといへは。さらば明日又ゆるらかにはなすへしとあるに。四時

を約して出てぬ。上野に至れば。あら川も待居て。是より皆ひとつになりて。山内を見めくるに。花は大かた散はてたれと。木かくれに山櫻のふくれて匂へるも。中々めつらしう見ゆ。日もかたふきぬれば。門前のかんなへといへる。料理店に入りて酒肴でうせさせ。飯をもくひて出てたれば。折よく浅草へゆく馬車あり。打乗て観音堂に至る頃暮はてたり。かくて又芳原の夜さくら見むと。車をやとひて行道に。蛙の聲のするをさきは。田のあるなりけり。大門口を入れば。燈火かゝやきみちて。晝のことく。さなから月宮殿などいふらむ所に來にけるやと思ふに。合せて天女の如くよそほひ盡したるあそひどもの。家といふ家ことに。みな居らひて。色をさそひたるは。けにあなめてたと魂とひて。一たひはあきれしか。眼を定めてつくつく見れば。ままとにうすめの神のうま子か。末つむ花のおとひかと思はるゝ。えもいはれぬつらつきこそ。さま／＼なりけれ。尙いはまほしけれと。口さかなきにやなりなむとやみぬ。されとちまたに植なへ。八重櫻のかきりもなくとほく咲つゝきて。にほやかなるは。めさましからき。今日はあるきつかれて。午後十時よつやに歸りぬ。

二十三日。朝八時ころより。福羽美静君の許に行きてたいめす。郁子かつらを見せらる。それより日比谷の神宮教院に至り。かなのくわいの事務所を尋ぬれば。橋良平出あひて何くれとかたらふ。けふは日本橋あたりに。訪ふへき所のあるに行きて。そこにて午飯をくらひ。大傳馬町より浅草をへて。竹屋の渡にいたり。墨田川をわたり。向島にあそぶ。

散殘る花を尋ねてすみ田川かゆきかくゆきみめぐりのさと  
堤にそひて社あり。牛の御前といふ。

かくはかり樂さみよに何とぞうまの御前のおはしますらむ  
此あたりも。ひかむさくらのみなちりはてし。八重櫻、ほたん櫻などのたくひ。ここかしこに見へたり。けふはことにうららかなれば。ゆき／＼の人は道もさりあへす。堤の草のみとりふみゆくをとめ子か髪は。つや／＼かにくろく。赤裳のすそを吹かへす川風に。雪はつかしう。白きはさのあらはれて。五色に今一いろをたらぬとやいふへき。

たをやめかかさねの衣の紅の夕日に匂ふ須田のかは波  
處女子か赤裳の裾を引きつれて草の縁をふむ春日かな  
名物のことゝひたむこといふものあり。都鳥の名によれるなるへし。

鳥をのみ何かのいはむ隅田川あるとあるもの皆都なり  
つゝみにそひて。廣き造り屋をまうけ。八洲園と名つくるあり。入りて見るに。池あり。岡あり。亭ありて。風景いとよし。園中を見めぐりて出つれば。橋場の渡なり。思の外に時うつりて。行ささいそかるゝに。渡守はや船にのれとはいはて。乗合をまらて。船とくいたさねは。天とふやたつの羽芝の渡守はや船いたせ日は傾むさぬ  
此川なかれゆるくして。水さよからす。

かくてこそ魚も住らめすみた川にこるや水の心ならむ

かなたの岸にあかり。車にのりて。あさちか原。今戸なといふ所をすぎ。上野に至れば。けふは競馬會ありて。見物の人群集せり。池のはたに行きて。間島氏をとよ。昨日約しつる四時にはすきたれば。あるしいかにそ。けふは道ふみたかへしなめりと思ひしといふ。さてさきくうち物かたらひて。つとに夜になりぬ。川崎千虎も來あひたり。夕飯に酒肴とりをへて出たされたれば。はなしなからのみくふ。とかくするほとに。はや九時も過ぎぬれば。道遠しとて辭して歸る。此日はかきりなく。おもしろさの語りともありて。心行きぬ。

二十四日。空晴て風つよし。けふは朝よりつま子打つれて。九段の靖國神社をかみ。日本橋のあたりを通りて。墨田川に至り。永代橋をわたりて。川添の道を深川本所なとへて。兩國橋まで行きて橋をわたり。本郷駒込なる羽田野氏を訪ふ。いとねもころにあるしせらるれば。心うちとけて。昔の事なと語りいてつ。かたみにわらひをほるれば。むつまじさもさらにそひて時うつりぬ。なほあかねは。伊香保より歸らむ日。またこそといひてわかる。たそかれ時になむ四つ谷には歸りし。こよひ仲町なる植松有經の許を訪ふ。

二十五日。けふも晴て風つよく吹く。朝またきに牛込なる蒲義質をとひたれば。宅にゐてけふは日曜日なれば。さいはひにゆるくかたらむといふ。義處も老たる母も妻もみな出て。ねもころにいひてといひ。さるにいそくことあれば。ころにもあらて。十時ころわかれて歸る。

さて一たひ四つ谷にかへり湯あみなとして。十一時より神宮教院に行て。好古社春季會場にいたるに。既に社長も出席あり。會員も大かたつとひ來て。席さたまる折なりき。先福羽君にあひさつし。幹事佐伯利まる。加部巖夫にはじめて逢ひてものいふ。ときに社長の演説あり。ついでに幹事報告をなし。をはりてきつはひなり。本居豊頼ぬしを初め。此席にある人とも。みな其名を聞きたりたる人々なれば。名のりをまつものいひかはす。それより別室なる古器書齋の展觀場に入りて見る。めつらしきものいとほかり。午後三時。退場して四つ谷に歸る。この日四時より伊香保に出たつ。その日記は別にものすへければ。こゝに筆とめつ。明治十九年四月二十九日。かみつけの國。いかほの湯もとなる木暮の家にこれを記す。

#### 第四。鹽原日記

明治二十二年八月十四日。晴。午前六時四十分の汽車に上野より乗りて。みな同道鹽原へと旅たちぬ。王子、赤羽、浦和、大宮、蓮田、久喜、栗はし、古河、小山、石橋なといふ所を過ぎて宇都宮につく。こゝより水戸行の人は車をのりかへるなり。おのかとちはそのまゝにて。長久保、矢板を過ぎて。那須につき。車よりおりぬ。こゝより下車する旅客いとほし。皆鹽原ゆきなり。停車場の前なる川島屋といふ旅舎に入て午飯を食し。鹽原までの車をやとよ。今日は客れほく車少なくして。旅亭のあるしさまく骨をりて客の需めに應せむとす。わかきをのこなと

はかちより行かむといふもあり。馬をやとはむといふもあり。かくてやうくわれら二人の車もまうけ得つれば。十二時過よりのりて出たつ。なすより鹽原までは五里の行程なりといふ。三島といふ所にてまはしいこふ。此あたり大かたひろくとしたる野中をゆく道なり。狩野といふ所をすきて。關谷といふ奈須より關谷三里うまやめきたる處あり。そこに車引きいれていこふ。これより山にむかひてのほり道なり。さのみけはしくはあらねと。なゝめにつけたる坂路をのり。のほり行くに易くもあらず。大かたこゝよりは山中はかりにて。道のほとりに萩女郎花など咲けり。かくて道は山の腹をさりならしてつけたれば。右に高さ山左にふかき谷をみおろして。限りなうちもまろし。

岩はしるたきを千尋の底に見て松のこすをゆく山路かな

なといひつ。ゆくまゝに鹽原になりぬ。宿屋めく家ともまはらにあり。猶ゆくまゝに町あり。谷川にそひて。道ののほりつめたる所を古町といふ。そのの楳屋兵太といふ家にやとる。此家に久米幹文かねて宿りむけり。たいめしてものかたります。湯あみして後日暮れぬれば休みぬ。

關谷より一里半にして鹽原境大あみといふ所にいたるこゝより福わたといふ所まで廿五町はかり其間に洞門あり所置ト  
ンチルなり穴の大き四間ばかり長さ十五六間あり。關谷より鹽原まで馬道を開きたるは安貞二年のことなりと今なき  
る六百五十年の昔なり洞門の上に左うつほといへる嶮なる道あり一夫萬人を支ふる所にしてあやむ許りの橋をわた  
したりと今人は人なをしらす。鹽原は、東西五里あまり南北四里許り上中下及湯本鹽原の四村に分ち家數百三十餘温泉  
の所在は大綱、福渡戸、鹽原、鹽湯、如下戸、門前、古町、外元湯鹽原の八所なり。福渡戸入口の如中に浴槽二個あり  
り。ふくわたといふ鹽原と云ふ所に至る右の山手に天狗岩といへるあり高さ數百仞にして卒々として雲を凌ぎ近つ  
て堅十二三間横入間はかり松樹蕭疎として風趣ことと宜し氏卿の野立せし所なりと云ふ

十五日。晴よへ雨ふりてけさはれたり。前なる山に雲霧たちまひ。見るかうちに消えて。緑のあすいあゑらはれ行くけしきとれかし。すゝしきもけさは身にしむ計りなり。

村雨のなこり涼き朝くもりはれゆく空にあきかせそふく

この間も朝けの風を身にして深山の秋をけふぞ知る

午前七時より高崎正風大人の別業をとふ。古町より川にそひて細き道をたとるに。よへの雨に土しめりて。青葉まげれる蔭。物さひしく。やうくたとりつきて。門に入りれとつるれば。正風ぬし出来て。ちとろきたる體にてむかへられたり。此家は谷のさりさしのうへに高くかまへたれば。東南に川と山とを見るかし。川の流には大きないはほつらなりしきて。たさつ瀬のねとはたこゝもとにちくることと聞えたり。むかふに見ゆるを蓬萊といひ。其下の瀬に脊をあらはしたる石を龜石といふ。又川をへたてゝかなたの山に。大いなる巖あるを天狗岩とそいふなる。あやしくめつらしきこと。心ことはにつくしかたし。かくて又正風君のあないにて。南のかたの山にわけのほりて谷にのそめは。瀑布あり。下なるを弟のたき。上なるを兄の瀧といふ。其かみつかたに一枚岩にて。壘をまげることさ上を。なかるゝ水は。足の甲をひたすばかりなるか。うつくしきことかきりなし。こゝを玉たれの瀧といふ。そのかみに又たきあり。母の瀧といふ。其うへにも又父の瀧といふありて。すへて四つの瀧なむありける。玉たれの瀧に床すゑて毛とむじき。其上にて茶のみなとしていこふ。岩のうへをわたりつたひて。



たきのあたりにたすみ。あるは木陰によりてすゝみなとしつゝ。一時間はかりあそびてかへりぬ。ふたゝひ高崎氏の家に入りて。まはしものかたらひ。十時半にわか寓居には歸りぬ。久米氏へ高崎氏のことつてもありければ。其居間に行かむとおもふ折しも。幹文ぬしとひこられたり。久米氏のとりの間に近藤氏の母にてあるもと子といふ人かたてよりかたり

十六日。晴。午前七時久米氏近藤氏同道。みな子をもつれて。高崎君の許にいたる。君よろこひむかへて席にとほし。さまざま物語ともありて。さてかの山おくの谷川にあないせらる。玉たれの瀬にけふも又床すゑて。茶菓子西洋酒なとり出でてもてなし給ふに。いと興をひて。みな人足さしぬらし。いはとこの上をとさまかうさまわたりあるさて心をやる。幹文とこのれは。猶此川上のさま見むと。岩ねふみ。谷をわたりのほりて。そこのいはに尻かけて四方を見るかし。まはしいこひてかへりぬ。いつまであそぶとも。けうつくへくもあらねは。十時ばかりに君のすまゐにかへりたるに。すしなとすゝめらるれば。人々とともにたうへて。とかくありて十一時になむ。やとりには歸りぬる。此時君われに向ひて。あすは赤澤のたき見にゆくへければ。さそひてむといはるゝに。さらは待はへらむといひてわかれぬ。午後は湯に入つるのみにて。いつこへもゆかざりま。

十七日。晴。朝とく起き出て。赤澤にゆくへさいそぎしてまつに。八時ころ高崎大人ゆかたの尻はしをりて。かはほり傘かたふけて來給へり。三階にむかへいれて茶をすゝめ。近藤もと

子みな子かいつらねて。此家より出てたつ。町をはなれて會津街道にむかひ。二三町ゆきて野道を右へをれている。やかて山のふもととなり。のほりゆくまゝに。道いとさかしくなりぬ。七八町はかり行きで。谷にありつれば。瀧のもとに至りつゝさぬ。すしきこといふはかりなし。これを洗心瀑といふといへり。たきの高さ二丈ばかり。はは四五尺もあるらむ。みたれてたつれはさためかたし。こなたなる大石の苔の上を走りうちかけて。いこひながら瀧のさまを見るいと興あり。正風大人のうたへらく。

萬籠をり攀ちのほりたる苦しさを忘れはてしも瀧を見る哉

れちたきつ瀧の白波たちまちにあせにぬれたる衣かはさぬ

れのれのもありけれど。さかしきもなければ。はふきつ。かくて十一時。もとの道にかへり出でたり。大人はけふなむ友たちのくる日なりとて。立もよらすたしちにかへり給へり。けふはことにおもしろかりし山踏なりけり。久米氏は今朝はやく鹽の湯にまからむとて。荷馬にのりて出てゆきぬ。かの湯は老ほはなくして。いわらの氣あり。皮膚のやまひによろしといふ。この古町より行程二里はかりなりとぞ。

十八日。曇。小雨ふる。七時頃より晴。今朝六時半より雨をわかして。源三洞を見に。たたひとりゆきぬ。さきのふのれなしみちを左へをれて。いさゝか山にのほれば中腹にひとつ屋あり。其家のかたへにかのほら穴はあり。入口いとせまけれど。中は八畳敷ばかりもやあらむ。其横

にやうやう這ひ入るぬへき穴あり。其の中はくらくしてまりかたしといふ。洞の右の口に大やかなる岩ありて其蔭にまみつわきなかれたり。さよきこと物に似す。さてこゝを過ぎてむかひを見れば。ひろらかなる家あり。華族眞田氏の別荘なりとぞ。そのうへの山に年経る杉とも立ならひたり。八時ころやとりに歸りて。みな子を伴ひ散歩して。江東まることいふ看板あけたる家にいたり。休息してまつこと久くして。やうやく二椀のまるまをもていてたり。まつきこと似るものなし。たへこうしてにけかへりぬ。いとをかしかりき。けふ午後近藤もと子は。正風大人の許にゆきて。まはらくものかたらひて。たにさく色紙なと染筆をこひつるよし。歸りてのちはなしたり。

十九日。今曉より大雨。また寝たるほとより雨いたく打ちふりて風さへあり。いとすさまじかりしを。起き出てみれば。まことに大降なり。午後には晴ることもやと。心まちに待しかとはれやらす。さて午飯を食たる後。みのと笠とを宿にかりて。雨を冒して高崎氏の許に出たつ。道ゆくほとはさいはひにいたくはふらす。川をわたり山をのぼりて。やうくかしてにいたれば。雨ふさいるゝをいとひてにや。入口の戸はさしてあり。窓のあきたるより正風ぬしの頭のおからはかり見ゆれば。さしよりにて先生先生とこゑかけたれば。打あふむき驚かしてむかへいれる。まつ玄關にわらうつぬき。足あらひてあかりさまに。此歌を  
まめやかにあるらむさまのゆかしくて此降雨に吾は來にけり

君はいとつれくなる折から。わか訪ひたるをよろこひてさし向ひ。さまく歌かたりなどあり。赤澤の瀧見にもしける記をとり出て見せて。かへすく共々に彼此とその文字を敲せり。又ほうらい龜石玉たれの瀬などの歌をも見せて評を乞ひけるに。その中にみな子がかかる所にすむよしもかなとありける歌をいとよろしとほめ給ふ。四時ころ。雷鳴あり。雨をりくはけしくふりぬ。五時はかりに。いさか小やみければ。いとま告げてかへるとて立ちければ。大人ちくり出て。玄關まで來給へるに。たのれけふしも山のたすまひの常にことなるをみて。

さたまなきくもと烟のよそほひに山の姿はれなし日もなし  
といひければ。大人とりあへすいと口とに。  
あめにさるみのと笠とのよそほひに君か姿も同じ日はなし  
とありけるそをかしかりける。歸り來る道に箒川の水増さりて。橋より此方の川中。渡るはかりになりければ。

棹鹿のつめたにところ思ひしかあなつりにくし此川のせは  
宿にかへりて足のいたむをみれば。はやうまめといふ物のいてきたるなり。たはふれに。  
草鞋くひ足にまめ得て歸りしは足まめなりし徴しなるらむ  
歸るさ古町の橋のほとりより。大雨又ふり出て。まどにぬれて宿につきぬ。夕飯たへて日く

れぬ。雨は猶やますふる。

二十日。雨はけしく。風さへそひていとあらしく。空のけしきなり。正風君へふみかきて郵便に出しぬ。けふ終日。外へ出かたければ。こもりてつれづれなるまゝに。元子の刀自の需に應じて。絶行の文かきてやりつ。

もと子の歌　わちたきつ瀧の響も耳なれて心すみゆくみやまへのさと

みな子の歌　賤か家のめくりにゆへる草垣のひまなく咲ける秋萩の花  
夜になりても雨やますふる。

二十一日。雨なほやます。十時はかりに。雨やみ雲うすくなりて。はれぬへさけしきになりぬ。もと子の刀自歌よみてみせつ。十時ころより。すまさのたき見に出てたつ。さのふの水に箒川のほしちちたりといへは。明神前の山道よりのほり。川をひのほを道草むらの中をわけ行きて。やう／＼ひとすちの道ある所に出てたり。是よりのほること二三町にして須巻にいたる。こゝに三階の樓あり。根本氏といふ。湯を樋より取りて。五條の瀑とす。肩をうたせ腰をうたせ。快きさと限なし。浴客あまり多からず。樓にのほりて四顧すれば。西南は深山幽谷にして。東北に平井澤、寺山、賽河原の諸嶽あり。其ふもとは箒川、福わた、鹽釜、機下、門前、古町などなり。余みな子をも携へて此處に來り。湯瀑に浴すること兩三回爽暢言ふへからず。十二時。古町にかへりぬ。

すまさにて女の湯あみするをみて。

まろたへのゆきの肌のみゆるかきこや玉簾のすまさなるらむ

又湯まさをあらひほしたるを見て。

朝起てすゝきにけらし玉たれのすまさゆまきかけて干たり

萩を道すから折もて來て。近藤刀自にまゝくとて。

山つとに折てそきつるこむらさき君かゆかりのあきはさの花

高崎氏の別葉を

はゝき川たつ朝霧のふかけれとうへにそきみか宿は見えける

白くらの山を

雨雲のはれにしのちはうるはしきみとりになりぬ白くらの山

廿二日。晴。今朝正風夫人より文もて來れり。其男のいふことさげは橋はねちたれと。さのふより道かよふやうになりぬ。近衛老公か今朝御歸京になるによりて。昨日主人は前の橋をわたりて送別にゆかれしといふ。大矢透來りて。近藤元子の席を訪ふ。まはし談話す。午前十時ころ。久米幹文あら湯より歸れり。先づ日高崎氏を訪ひて。兄弟の瀧玉たれの瀬などに遊びける折の始末を。文章につゞりてもて來て見せらる。其のありさまをよく寫し得たる文なりと思はる。午後一時過より。近藤もと子刀自みな子をも同伴し。たか崎正風君の別荘へ行く。このこ

ろの雨に濡れちて。けふは嶮路を経て。まことに辛うして至りつさぬ。女ともいはたしにて。やう／＼のほり行きたり。道の程も遠くして。いたくつかれき。主人は湯に入りて居られしかは。暫くまちて面會す。歸路は正風君の邸の前より。谷にたり。川をわたり。懸崖の上をつたひて。鹽湧橋の詰に出て。それより本道をたどりぬ。もと來し道よりのはるかに近かりき。廿三日。晴。午前六時鹽原を發足す。久米近藤の兩氏にわかれをつけ。久米氏に一首をおくる。兩氏よりも送別一首宛與へられたり。かち屋夫婦のものは門前まで見れくりぬ。さて人力車に乗り道すから景色よき所々を見つゝゆく。洞門、見返り橋などいふあたりいと面白し。このころの雨に道くつれて。危き所二三ヶ所ありき。山を下りはて、關谷村に着く。こゝに休息して。それより平地をゆくまど。一里はかりにして。狩野村を過ぎ。をしま村に至る。人家三四十軒あり。それよりはむかしの奈須の原にて。ひろひろとしたる野原に秋草さかりに咲けり。九時過。奈須に着きて。休息し。十一時汽車に乗りて。宇都宮に至る。十二時過なり。當所の鎮守二荒神社に參詣す。市中高き所にあり。石階を登るまど五六十階。岐阜のいな波神社より高さやうに覺ゆ。四方を見はるかす。景色いとよし。此驛より日光山まで九里半。馬車人力とも常に往來す。人力賃一臺六  
十九錢五匁 氷店にいこひ。旅館稻屋に歸る。途中より頻に頭ねもく足たゆく。常にかはれる容体なれば。苦しさ堪かたく。按摩を呼はしめ療治せしめけるに。漸々熱氣うかひいて、あつくなりぬ。氷もて頭をひやし。また暮れぬささより枕にふしぬ。夜もすから苦しかりしか。

明かた前より。漸少し安らけくなりてまどろみ。午前五時前より。起き出て、支度し。六時二十分汽車に乗り。上野に着し。家に歸りしは二十四日の午前十時過なりき。

## 第五 松島の日記

さのふよりくもりたりし空。今朝はやう／＼晴わたりてよき日になりぬれば。旅こゝろとみにうこきて。いさいてたゞひ松島見にといへは。つま子らはかはんなど何くれとりまかなふ。其あひたに湯あみなどして。硯紙筆のたくひちしくるみ。一とちのにきふたつの目かね。ゆかたひふなどいさ／＼かの物をたつさへて。いとも身かるに出たち。友もなければ只ひとり。午前十一時過くるころ家を出て。下谷のかち町に片岡氏かり行て。仙臺へことつてやあるとたつね。十一時に上野の停車場にいたり。まはらく待ちて。十二時三十五分に汽車に乗りぬ。こは明治二十四年五月十八日の事なりけり。

一聲の笛の音ともにも車いつつ。と見るかうちに。はや王子に着きぬ。まどとや清少納言の枕草紙に。たゞすきに過るもの。帆あけたる船といひしり。昔のおとにて。今にしあらは。まかねち走る車とやいひてまし。赤羽浦和もたゞすきに過ぎて。大宮にいたれば。高崎の方へゆく人は。下りて車を乗りかへよといふ。蓮田、久喜、栗橋を過ぎて。古河にても又車をおりて乗かふるは。水戸へゆく人ともなり。かくて石橋宇都宮長久保矢板を経て。奈須野の原を過るとき。

先づ年鹽原の湯にもものすとて。こゝより車をゆりて。いと暑さに山路分入りしまとなと思ひ出てぬ。黒磯鹽原も過ぎて。白川に來ぬれば。能因法師か秋かせふくとよみけむ關のあととなつかしきにつけても。いにしへのみちのはるけかりしをと思ひつゝけて。今の旅路のたやすくすみやかなるをよろこぶ。

まひるころあつまの都いてつるにまた日はくれす白川の里

それより矢吹須賀川郡山本宮を過ぎて。二本松にいたれるころ。日くれたり。松川を過ければとんねるあり。かくてやうやく九時に福志まにつきて。河内屋といふ家にやとりぬ。

十九日。朝とくおき出て。福島町のありさまみむと。やとりを出て。西さまにゆけば。左に警察署あり。右へをれて登町はかりに。病院郡役所。其あひむかひに物品陳列所あり。つきあたりの大いなるは縣廳なり。又それより西へゆけば尋常師範學校あり。町をはなれて。北のかた十餘町はかりに。公園あり。こはかのまのふ山なりといへは尋ね行てのほる。此山その名ほとには高からねとも。歌枕に耳なれて。あとなき青葉の梢もなつかしく。いはらの花の雪に似たるもあはれなり。山の上のやゝ平らなる所に招魂社のあるは。明治十年にまつれりとか。此山の奥に羽黒湯殿の遙拜所もあり堂などありといふ。まはし芝生にたすみて打見渡すに。遠くは名もまらぬ山山つらなり。ちかくは福島町の家並。南の方に見へて。打ひらけたる土地なり。此あたりすへて。信夫郡なるへし。もちすりの舊跡は。こゝより一里はかり。山口村とい

ふところにありといふ。昔はせを翁此ふくしまにやとりて。又の日信夫もちすりの石を尋ねて。老のふの里にゆき。『早苗とる手もとやむかし忍ぶすり』と詠せしよし。奥の細道といふ紀行に老るせり。われもゆかしうはおもへとさてやみぬ。かくて山を下り。やどりに歸りて朝けたうへ。七時三十分といふに車にのりぬ。さて桑折越川白石のとんねるをすき。大河原を経て岩沼にいたる。武隈の松のこの里にありとききて。其松のさまいがならむと思ふ間もなく。とく走りて増田も過ぎ。おとにきつる名取川をわたりて。午前十時二十分。仙臺につきぬ。六軒町といふ所に高木次雄か家に。かたをかすむ子かあるをとふらふ。澄子はさきつころよりこゝちなやめりとして。いとかよわきさまにて出て逢ひたるに。まつおとろかれて。いとせあまりのほとに。かくも面かはりせし事よと。いとほしくそほゆる。次雄の母も東京より來てゐて。ともに出迎へて。何くれ物かたらふあひたに。ひるになりぬれば。酒飯なともてなさる。あすは澄子を伴ひて東京の家に歸らむあらましなるよし。さらば又ちかきほとにあひ見むといひてわかれぬ。さて此仙臺には見る所いと多かめれと。松島へとくいなむと心いそげは。高等中學校園分町などはかりを見て。停車場にいたり。午後三時汽車に乗りぬ。此あたり近く原の町といふ所のあるか。むかしの宮城野なるよし。今は野といはむ所もなしと。岩倉大臣の集に見へたり。此ととの歌に。『白露にぬれし昔の跡もなし田畑となれるみやまの原』とあるをおもひ出て。

宮城野も田となる御代のみ惠の露にはぬれぬ民やなからむ

なと口すさひつゝ、仙台を出て。岩切をすきはやくも鹽かまの町に着ければ。海老屋といふ家より出むかへたり。入りてあるしに。松島へ行かむとをはかりけるに。けふは時もおそければ。あすの朝とく船にのり給はむとよからめ。まつこの鹽竈の神のやしろに。まうてたまひねなといふにひかれて。今宵は此家にやとることゝはなりぬ。かくて鹽竈神社に参詣す。この社は陸西に奥一宮なりひきて石の階をのぼると。壹町あまりもあるへし。境内いとひろくとして。御社は南にむかひ。東の玉垣さらひやかに。木立ものより神さひて。よの常ならぬ宮つくり。いとたふとくそおはします。正面なるは左宮。右宮とたへ。東の方なるは別宮と申すとかや。神前に古き寶燈ありくろかねの戸ひらの面に。文治三年七月十日。和泉三郎忠衡寄進之敬白としるせり。山を下りて宮司芳賀眞咲が家を訪ふに。さのふなむ金華山へ出てたち侍りぬと留主のその子のいへは。ほむなくてかへりぬ。町のなかには竈の神社といふありて。そこに古代の釜四口あり。鹽神始めて鹽をやさけるかまなりといへといかゝあらむ。其形は「そり」といふ物の如く淺くして。七八寸に過ぎず。渡りは四尺あまりあり。くろかねもて造れるものなり。さて其夜は宵より打ふしぬれと。物こゝろ細くて目もおはす。つく／＼と思へはたゞ二日はかりに。かさりなくとほくも來にけるかな。眞かね路の車のたよりこそうれしけれ。つとめて眞咲の家に歸らは見せよとて書てつかはしける。

尋ねおし君にもおはて鹽かまのうらさひしかる旅寐をこそせし

後にかへしとて眞咲より

いたつらに人をかへして松島のまつのおもはんおとも恥かし  
といひおこせたりき

二十日。朝とく起出で見れば。てい氣よし。けさはとく松島に渡らむと。船をやとひて午前七時ころ鹽かまをこさひつ。神の守りやありけむ。空にはちりはかりの雲もなく。海には波に似たるものもなし。まつ島まで二里あまりの船路は。すへて入海にて。けふは特になきたれば。たいみをまきたらんやうなり。此間に七浦七崎八島あるを。とりすへてちかの浦とはいふなりとぞ。船は東に向ひてゆく。をしまは右のかたにまかさか島は左のかたにへたりてみゆ。やうやくこさひてい。

まほ竈を朝こさひてい行まゝにちかの浦わもとほくなりぬる。ちかの島の島々。大きなちいさなる。數を盡してつらなれるを。船人指さして。あのままの島の島と。ひとつく／＼にをしふれとも。目をとゝむるいとまなく。船のすゝむに従ひて。島くわいたすか如く。おもむきかはりて。いとちもしろし。かのはせを翁が紀行に「そはたつものは天をさし。ふすものは波にはらはひ。あるは二重にかさなり。三重にたゞみて。左にわかれ。右につらなる。ちへるあり。抱るあり。見孫を愛するかことし。松の縁こまやかに。枝葉汐かせに吹たむめて。屈曲ちのつからためたるか如し」なとかさおける言葉誠によくこの風景を

うつし得たり。今また何をかいはひ。たゞ島の名をかしよう。覺ゆるのみぞ。こゝにまゐるさん  
に。まつ后島、都島、硯島、雀島、馬放し島、桂島、よろひ島、かふと島、要島、あふみ島、  
大島、小松島、伊勢島、福浦島、引通し島、くしら島、經の島、翁島、松か島、三兒島、材木  
島、なほ多かれともらしつ。これらを見つゝゆくに。たましひとひ心まといて。身はいつしか  
仙境に入りぬるかとおほえて。われにもあらず。歌も言葉もわすれたるか如し。もしいひいて  
つとも。所を見るにまさるへきならねは。やみなむにはまかしかし。たゞひそかに貫之朝臣の  
君まさての歌を誦して。とほる左大臣の昔をまのふのみ。あはれ此おとゝの代に。汽車といふ  
ものあらは。六條河原院によしなき作りまをもてあそふにとくまらむやなど。思ひつゝくる  
あひたに。船のはや松島の浦につきぬ。觀月樓といへる三階造の家にやとりを定めて。まつ瑞  
巖寺にまうつ。此寺のかの名たかさ眞壁平四郎法身禪師の開基にて。いかめしき大伽藍なり。  
本堂堅二十一間横十二間。觀音の像を安置せり。庭前に古木の梅あり。これはそのかみ伊達政  
宗卿の朝鮮よりたつさへ歸りて。此所に植られしよし。紅白にさきてめつらしき花なりとさけ  
と。今は時ならねは口をし。明治九年。行幸の時。岩倉右大臣「あか白とわけてやのいふ移し  
植えし心を梅の匂ひなりける」とよまれしはこの梅なり。寺僧に案内をこひ。堂内のまつらひ  
を見るに。慶長のむかし伊達家の造營にて。壯麗いとも美麗なり。一間毎に襖は皆箔をあして。  
こかねの光目をかゝやかす。上段の間は。殊に手を盡したるか。行幸の時玉座となりしとぞ。

すへて聞しよりも見るはまさりたる寺とこそいふへかれ。それより又小ままにわたりて見る  
に。いはほのたゞすまひ松の枝さし。よの常ならず。波のひゞき風の音。臍を洗ひていと清し。  
此島は見佛上人座禪のあとゝかや。松吟庵とて草のいほり引むすひて一人の尼すめり。まはし  
とて此庵のすのこに尻かけければ。尼出て、茶なともてなし。一卷のふみを持って見せつ。  
其中にをかき物かたりあり。松島の西行もといふ所は。むかし西行こゝに杖を曳かれし  
に。氏神童子に化し牛をひいてとほるに。西行問て云。童子いつくにゆく。童子答へて云。夏  
かれて冬萌草をかりに行と。西行歌を詠して。『月にそふ桂男のかよひ來てすゝき孕むいたか子  
なるらむ』といふ。童子笑ひて。われよまは『雨もふりかすみもかゝり霧もふりはらむ薄はた  
か子なるらむ』と。西行恥ちて是よりもとりしとなむとまゐるせり。おのれも一首たはふれに。  
『雨にふし風になひきてわか薄いつか穂はらむ秋になるらむ  
島の南のほとり海にのそみて。頼賢の碑あり。高さ一丈二尺幅四尺はかり。昔元の僧尊一山。文  
を撰ひ。みつからかきて之をたつ。文字草の手なれは。よみかたさところおほし。此碑多賀城  
趾燕澤のと合せて。宮城縣の三碑と號し。世にもてはやせり。このほかはせを翁の朝なゆふな  
の句をはしめて。さまゝの石文あまたあり。みな近き世の物のみ。さて歸りて後。庵主によ  
みておくれる歌。

松島やをしほのあまの苦ひさし久しくなりぬ浪にあらさて

この日午後一時より。ふたゝひ船をやとひて富山にゆく。とみ山といふは。此あたりにてすぐれて高き山なり。松島の眺望いつくはあれど。此山をもて第一とするよし。橋南齋子か東遊記にもまゐるし。又かねてもききおけるとなれば。けふは殊さら思ひたぢけるなり。観月樓の前よりこきいて。東北にむかひ一里はかりの船路。そのあひた數多の島々を見つゝ。こきゆくけしき。鹽竈よりの海上にまざりて一しほおもしろし。北のかたはるかに二むらの蟹の磯屋の見へたるは磯崎といふ村なり。南のかたにはふく浦しま翁島なほこき行まゝに。辰の方にあたりて高き山のとほく見ゆるは。大高森といふ山なり。又よく晴たる日は金華山も遠く海上に見ゆといへり。かくて船は手櫂といふ所の山のふもとにつきぬれば。ありて山をのほる道いとはるかなり。二十町はかりにして富山にいたる。いたゞきに觀音堂あり。坂上將軍の像ををさむ。其まへに南にむきて大仰寺といふ寺あり。これか書院よりはるかに東南のかたを臨み見れば。松島の全景一眸の中に入りて。たとへむにもなし。南齋子は繪にかける西湖の圖にいとよく似たりとそいひし。おほよそ東西二三里南北六七里はかりの間。島々基石をさき並へたらむやうに見えわたり。それよりかなたは大海原かきりなく。沖つ白波雲井にまかひて。まあとにくひなき風景いひ盡すへからず。我が日本の三景のこのかみとなれるもうへなりけり。寺僧茶菓子なども出てあへしらへり。やゝ久くありて山を下る。されどもたましひは。こゝに残りといさるこゝ地せり。あはれ都ちかくにあらましかは。こよなきあそひ所ならまし。さて船

をつなきあきたるところまで。山路たとり來てのれは。船人こゝろまてこきいてつ。夏の日のなかき。またたそかれにもならぬうち。もとの觀月樓にかへりつきぬ。二十一日。空いとよふ晴れて。松島の松の梢より朝日花やかにさしいてたり。けふは鹽竈に歸らむと。朝またきに船こきいて來れば。さのふみし島々又さらに所をかへたる如く、まなこにさへさりてめつらし。ゆく／＼小松島を見て。

老木のみ見へこそ渡れいつの世に誰か植ちさし小松島とも  
左のかたはるかに。まはなし島みゆ。こゝには鯛のいけすといふものありて。魚ひさくものとものたよりとすと。此島より西につゝきたるやうに見ゆるは。よかささといふ陸地なり。目もうつら／＼おもしろさに心ゆきて。おほへす船は鹽かまのさしにつきぬ。この船路よりまをを見て。

浪間より見ゆるをしまの松かえもおなじみどりの夏の海原  
るひやにあかりて。まはしいこび。こゝより人ひき車をやとひて。ゆく／＼古跡を尋ねむとす。鹽竈の町をすきてゆくと。半道あまりにして。玉川村にいたる。水もなき小川に板橋をかけたり。二むらの松のもとに能因法師の歌をささみたる碑たてり。是なん野田の玉川なりといふいとうけかたけれど。

いにしへの野田の玉川あせはてゝ苗代水にかはつなくなり



是より半道はかり。浮島のさとを過ぎて。市川村に至る。こゝはいにしへの多賀城の跡にて。かの名たかき石文立てり。この碑は見雲真人の書にて。天平寶字六年に建てたるか。久ましく土中に埋もれたりしを。伊達家の三代吉村朝臣の時。からく求めて掘出したるといふ。千百餘年の昔の物を今日のまへにまたしく見るもめつらし。

石の上にふみとめすは濱千鳥千代へし跡を何に見てましかたはらのわら屋にいたりて。古瓦一片をあかなひ得たれば。車ひくをのこ又小さき一片を畑の中にひろひ得てくれたり。心あるに似たり。それより沖の石なといふ所を。はるか左の方に見てすき。菅菰の名ある十符の池も。こゝろならずよそにして。いそかせつれば。十一時過るころ岩切の停車場につきぬ。こゝより汽車に乗りて西にむかひて出てたつ。こたひは仙臺にもよらず。直に白河までゆきて。ある家にやどり。むかしの關のあと尋ねれども。ある人なし。戊辰の軍にたたかひ死にし人の墓などをしふれば。聞つけて行きて見るに。まるしの名は苦むして。二十年の夢の跡とよ人もなき。土の下のうらみ。さこそといとあはれさ。やるかたなく。さかへも持たぬ旅の衣の袖まほりぬ。それより北の方へ七八町はかり。畑の中みちをたどりて古城跡に登る。すへて荒はてし石垣のみ残りぬ。天主臺とまほしき所。いと高く平らにて。四方を見はらすに。まはるものなし。暫らくこゝにたすめは。ねぐらたつぬる夕鴉の聲も。物さひしくこゝろすみてまほえたり。ことに此城は天の下の政事とりて勳ありし。白川の少將のまはるい所な

れば。思ひうかふるとままくなり。ひとせ此君東海道をすまられしに。道のほとりの煙草店の紙さうしに。「世の中の人とたはこのよしあしはけふなりとなりて後にこそしれ」と筆ふとにかきたるを見て。のりものをとめ。家あるしをよひいて。此歌はたかなるぞと問はれしに。あのか拙き口つさみにてそさふらへと申しかほ。少將さればまそとて。歌よみて。あたへられしとか。此あるしも心あるもの。少將もまたすき人といふへし。いままと此事をまほひて。國のためたてしさをばけふりともからていつまで世にのこるらむ。二十二日。朝きりふかく立こめたりしか。やうく晴ゆきてよき日になりぬ。うれしさなるものなし。白川を午前六時三十分の汽車に乗りていてたつ。けふは東京に歸らむとて。上野までの切符をもとめけるを。あまりにていきのよければ。俄にまたふたら山の神にまうてむの心にてきて。宇都宮にてちりて。かなたへゆく汽車にのりぬ。日光の町につきて。静暉館といふ家に入こひ。ひろの飯たうへて。一時より山にのほり。まつ保見會の事務所に立より。かくといひ入れしかり。やかてあないの男を出して。参詣の道ひきをなす。此男さきにたちて境内に入り。三佛堂よりはしめて東照宮のみやむ二荒神社大猷院殿の靈屋など。内外ひとつとつとつとこまやかにあないして見たせり。其壯嚴の壯大美麗なるまを目を驚かせり。くはまきまとはあろかなる筆のたやすく盡すへきにあらざれば。すへてはふきつ。誠に徳川將軍家の盛なりしことを。千歳の後に見むものは此宮なるへし。一時より始めて四時までに。やうくめぐり盡してか

入りぬ。やどのあるし。あすは中禪寺華嚴灌など見にもしたまへといへど。そは又もこそとて。あすはとくに東京に歸ることとさためぬ。  
二十三日。てい氣よし。日光を朝七時二十分の汽車にのりて出立ち。宇都宮にてのりかへて。十二時すぎに。上野につき。人ひさくるまをよとひて。家にかへり。こたひの旅路つゝかなかりしことをつゞきもろともよろこひあひぬ。

#### 第六。かうつちにき

四月六日朝とく起出て見つれば。いとちら／＼かに空晴たり。かねてそのあらまじにて。福田正義ぬしへいひやりける事もあれば。けふこそは上有知にゆかめと思ひさためて。午前九時ころ岐阜を立て。長良の橋のほとりよりゆうひむ船といふに乗りて長良川をのぼる。この日風靜に浪なくして帆はあげたれとも船すゝます。船子とも三人にてつなひきのぼる。伊奈波の山の麓をすぎ。船伏山をのそみて。さきつ年鶴飼見し夜のけしきも思ひいてらる。我友村山松根か。川上の長良のうかひいま下すらし。とよみけるはさきのふけふともほゆるに。其人さうてはや五とせ六とせになりけるこそ哀なれ。かくてやう／＼芥見の渡りをすぎ。小瀬村につきたるは午後三時なりけり。こゝにて船よりおりて。服部何かしか家を訪ひまはしいこひて出たるは四時ころなりし。これよりかちにてゆるらかにあゆみ。六時といふに上有知の町に着たり。まつ

圓通寺に入りてあなひをこふ。惠嶠大とはやく我か聲を聞つけていてむかわれたり。あまたの年をへたてゝあひ見しことなれば。かたらふこともいと多し。かゝるあひたに岡徳助ぬし村井正軌ぬしなど訪ひ来て。たれもひさしくへたてし中なれば。かたみにいはむとすること。あまたにて語りも盡すへからず。ふたりの人たり。此大とこともはかりて。明日は此寺に歌の會催してむといひて歸ぬ。其あとへ岐阜の村瀬渡ぬし来て。こそ冬の冬の災に。あへるよりこのかたの。ものかたりして夜ふけぬ。此人は赤堀氏の家にゐるといふなる。わか家は。やま失へる故なるへし。

七日。つとめて墓をうてす。こは明治のはしめつかた。いとをさなき我か兒の失にしを。此寺にほらふりけるかあればなり。大徳先にたち墓にのそみて。經いとたうとくよまる。をりからうくひすも木つたひ来て。聲あはせかほなり。福田正義ぬしへいひさはることありて見えざりしか。今朝はとく来て。あところかされたり。さしつさて正軌ぬし徳助ぬし石原胤豊ぬし訪ひきて。こたひ我かめつらしくこゝに來つるをいとよろこへるさまにいひあつかはるゝ志。いとうれしく。我も打とけて何くれくつしいて。二十年あまりの昔もいまも。同じさまにあひかたろふこそ。いと／＼たのしく。心ゆくわさなりけれ。惠嶠大とこいひちはやく。かくいひ出されたり。あつせより引かへしたる梓弓まつよりはやく君は來ませり  
かへし

故郷の春なつかしみあつさ引かへしたる我れとまらなむ  
胤豊ぬし

相見れば語らむことも忘れて先うれしさの餘りぬるかな  
かへし

まれに遇て語らぬさきに嬉しさのあまるや君か誠なるらむ  
正軌ぬしも

餘りにも昔戀ぐちもほえてかたらむともふ言の葉もなし  
かへし

君みれば只うれしさの先たちて語りいつへき言の葉もなし  
徳助ぬしも

さまざまの話のうちにとりわきて昔かたりは嬉しかりけり  
かへし

立かへり故郷人とかたらへはかたること皆むかしなりけり  
此ついでに生櫛村なる。福昌寺にもたる大般若經の古寫本。見にゆかはやと大どこにはかりこ  
ちたれば。大とこ杖ひきてあないせむといはる。晝の飯たうへて。圓通寺をいでたち。行く道の  
ほど。目なれぬ本草のたすまひ。麥生のをみ渡れるなど。いとをかし。ほとなく生櫛村にいた

つきて。西部權右衛門といふ人につきて。大般若經みむとをこふ。福昌寺はあれて。あさまな  
る寺なりければ。此權右衛門の家の庫にあつかりであるなりけり。あるし心よくうけかひて。此經  
もていでし。ころのとかによく見たまへといふ。惠嶠大とことさし向ひ居て。ひもことを見る  
に。其筆の墨つさ世のつねならず。けたかく雄々しく。束帶せる貴人の殿上に在るか如く。ある  
は龍の雲をおこすいきほひありて。世にめつらしく。いとめめでたき古寫本なりけり。

其第十七卷の奥に。『天平十三。歲次辛巳。七月十八日。奉爲四恩寫。檀越下村主廣磨。』

第五百十二卷の奥に。『天平二歲。庚午。三月上旬。始寫大般若經一部。平群郷都善臣尾島。』

第五百二十一卷の奥に。『天平二歲。庚午。三月上旬。初寫大般若經一部六百卷。右京七條二坊黃  
君滿侶』

第六百卷の跋に。『蓋聞無二法門懸智鏡而圓滿。非一戒筏。揚慧炬以均照。權實神機。逸絕名言之域。  
方便秀術。瀕躡有無之間。感而遂通。概无不應。寔知聖教廣被。訓塵沙而一味。法慧高照。運大  
千而分影。玉鏡懸於六道。威萬機於法界。悲雲覆於三界。獎四生於火宅。春日戶比良。才智淺  
薄。操行暗弊。幸拔衡門。預聖師教。以天平十六年歲次甲申六月。發至信心。敬奉寫大般若經六  
百卷。大智度論一百卷。仰願。聖朝體固南山。尊鎮北極。照臨廣運。與大椿而競年。歷數長期。將  
劫石而伴世。智識之中存亡父母六親神識等。生安樂國。立值菩提。眷屬經六道而不忘。三大而彌  
茂。相續善心。脩習福慧。遍施四生。俱登覺道。天平十六年六月三十日春日戶比良。』其次に朱

にて「貞永元年癸巳。於興福寺上階。於詞□□奉讀了。永丘生六十七」

右の天平の年號あるは。皆筆跡うるはしく勝れり。此經文もとは天平の古寫本にて。そろひたりけむを。闕本多くなりて。更に補ひたるものにや。至徳明徳貞永などの奥書あるもみへ。また版本にて補へるもあり。いかにして此寺に傳はれるにやと問ひけるに。明治のあらた御代となりける時。此經文六百卷反古となりて。大阪より出て。此美濃の國牧谷なる。紙漉料にあくり來れるを。安毛村なる田中傳治といふ人のをしみて。其儘に貯へおけるを。近き年此寺にあかなひ得しなりと答へぬ。もし此田中か心なくすきかへしに。切くたきなは。天平の古筆も空く鼻ふき紙とやなりなまし。危うかりける此經の身のうへかなと。繰かへしみてもとの筥にをさめ。あるし權右衛門にのやのへて歸りぬ。上有知には。すてに圓通寺に人々來て待居たり。上野町なる太田倉雄ぬしも。こゝに我かあそへることを聞きて。ふりはへ來れり。あるかならぬ心はへにこそ。正軌ぬしいふやう。小くら山の立木こと／＼。つかさより伐とられけるに。山のまけりたりし時とのさまかはりて。めつらしきなかめいて來たりぬ。明日は此山の上にてまとむせむと思ふなり。さるにいま空のけしきかはるへう見えて。おぼつかなじ。もしあす雨ふらはかひなかるへし。人々はいかに思ひたまふや。唯今より伴なひまうして。まつゝわたりかの山の景色。見せ參らせむこそよからめとて。そのかさるゝに曳れて。さらばと正軌ぬしにまたかひて出て立ちぬ。山の口に此村の學校あり。其前に大いなる椎と松とあり。これなむ

昔我か住にし家の庭の樹立なれば。其陰に立よるに。椎か本もそは／＼しくはあらず。まして松はいとなつかし。此松のいとちいさかりしか。二十年あまりのほとに千とせ經にけりと。おもふまで高くふとくなりぬ。千疊敷といふは平らなる所なり。それよりのほる。山のかたはらに。鬚かちなる人の。芝の上にかもうちしきて。わらはにましりてわたるをよりて見れば。此郡の長齋藤借ぬしなりけり。こはめつらしと。かたみにむつまじみものいふ。猶のほりていたしにいたれば。晴やかなることものにたとへむかたなく。北には郡上川の流れとほしろく。東の藤城山の松のみどりふかく。南はうち開け。此町並の家の軒をならへ。いらかをつらねて。かまどの煙いと賑はし。

まむ人の心も見へてけふりさへ昔にいまはたちまさりけり

すへて所のさま移りかはるをなげくは。世の常なるを。此里のことくとしことに。榮へまさりてよきにかはれるは。むかし住みし我か身にとりて。いとうれしく。よろこはしくなむ。夕つけて歸るさ。倉雄ぬしと二人。正軌ぬしの家に道ひかれ行きて。湯に入りぬ。此間にあるしゆふけてさして。酒もそへて出されたり。此酒はさきつとし此ぬしか酒造り始られける時。あのれに酒の名をつけてよとこはれて。豊壽と名つけたるうま酒なれば。下戸なからめて。ひとつすのしぬ。楮圓通寺に歸れば齋藤借ぬし萩原直衛ぬし山田達ぬし相山正明ぬし北川浩ぬし岡石原福田のぬしたち。さてあるしの大とく。まとむのむしろをひらきて。並み居たれば。お

のれと村井太田のふたり。其中にくは入りて。こよひはかつかたらひかつうたよみすることとなりぬ。出てあふみないにしへの人なれば。むつまじくなつかしきことかきりなし。此間に事おほかれと。はふきてかかす。兼題披露すみて。當座よみ人の名をかきて。一つにかきましへ。おのくよしと思ふ歌に點すこととせり。興あるすさひなるへし。

春月 朧 兼題

春の夜の月のたほろになりぬるは花のほひと霞なりけり 借

咲く花の匂ひやとらにみちぬらむ朧にかすむはるの夜の月 倉雄

花はまた咲き匂はねとあつぎゆみ春のつき夜は朧なりけり 胤豊

ひかりをは花にゆつりて朧けにうらくかすむ春の夜の月 直衛

おもふとちいとたもしろさまとむかな朧月夜に心うかれて 正義

朧夜はいともまつかに青柳のみとりにかゝる春のつきかな 徳助

かすみたつわかぬ浦の朝ほらけ朧にのこるはるの夜の月 正誠

さやかなる花のひまよりもる月の朧にほふ春の夜はかな 浩

咲く花の梢はなれて照る月のたほろに匂ふはるの夜のつき 正軌

朧夜はいと隔たる心地まていよく月のなつかしきかな 正明

ひかりなく霞わたりてあはれにも朧にほふはるの夜の月 惠崎

咲く花の匂ひにかすむ春の夜のつきこそいと朧なりけり 千春

當座は待花といふ題にて。よみける人の歌をかきしも多かりつれど。わつらはしければはふ

さつ。今宵こそかよみて。心まれる人に見せける。

年ふれと心へたてぬ友垣のこのまどをこそうれしかりけれ

たまさかにあへは昔の戀しくて語らふとの多くもあるかな

なつかしきふるさと人のかたらひに都の春も忘れにけり

思ふとち語るまもなく更わたる春の夜をしき此まどむかな

むつまじきけふのまどを月毎に繼て開かは嬉しからまし

直衛ぬし繪短冊とり出て。これに賛をこはる。その書山寺に紅葉あり鳥とひゆくかたなり。此

寺は神護寺と聞きて。

高雄山てるもみち葉の夕はえに鳥もねくらを定めかぬらむ

八日になりぬ。日うらくとさしのほりて。ことにのとかなり。朝またきより人とひ来て。け

ふかく空晴たるは。小倉山のまどおよしと。神のみこゝろなるへしとて。そゝろさむたり。午前

九時ころ。おのれ借ぬしかり行て。年ころのおこたりのへ。そのついでに爰の私立病院長田宮

氏をもおとつれて。それより赤堀氏の家を訪ひけるに。あるしは風の病ひにふしちりて。澄ぬし

出てむかへたり。此の家の父翁ことし八十になれるか。いとすこやかにて。相見ることを得た

はは。うれしかりけり。此家のはなれ屋に。あはしぬしと相むかひて。やゝ久くかたらふほどに。はからずも時移りぬれば。歸らむとするに。かの翁とていま物まゐらせむ。まはしとみへは。まひてもいなみかたく。とまりて。晝の飯くふ。翁の志あさからずまほゆ。借午後一時ころ。圓通寺に歸りたれば。徳助正軌正義倍のぬしたち。とく來りて待ち居たり。此人々ものれに歌かきてよとて。短冊もて來て机の上になつ高くてけり。けふ松森村より古田平右衛門といふ人も。みえ來れり。歌よまむころさしありてなりけり。また大矢田村なる大塚新六ぬしは。けふしもほかにやうありて。上有知に來にけるを。ある人見て此まとの事かたりければ。尋ねて爰に來れり。かの村の神蹟のいしふみ。やうやくになりぬることなどかたたる。此人は大矢田神社につきては。あるかならぬ志をはこひ。よろつにまめなる人なり。むかしものれ大矢田の紅葉をよめる歌を心にとめて。たにさくとり出て。そをかきてよといふ。ものれはやく忘れにければ。このぬしにさしてかきける。其歌。『比賣神のつまこひわひし思ひよりこかれそめけむ谷のもみち葉』。またつくはねの歌をもこはれて。

紅葉見て歸る山路に處女子か目にうつくはねやけふの家つと

いさあまへは。つたなくて汗あゆるこゝ地す。人々のこはれつるたにさく二十ひらあまりかきたれは。まみて筆の命毛もたえくになりぬ。惠崎大とて木の芽煮て出されたるは。佛のたまへる甘露なるへし。かゝる間に四時を過ぎぬれば。いさ小倉山にと人々さゝめさいさなひていつ。打

つれてやまにのほりつれば。かねてまうけしいたゝきの平なる所に。段通といふものひろくまきてまとのところとせり。集へる人は。徳助倉雄正軌正明直衛胤豊倍正義平右衛門新六小坂宗十郎などの人々なり。惠崎大とて風のけあしとてとまり信ぬし正誠ぬしはさはることありて來られす。木のもとに松葉などたきて酒あたゝめ盃めぐらす。青雲をあげはりとし霞をかへしと。山川の流は庭のやり水をちこちの草木は皆前裁と見なして。天地にこゝろをのふれば。かきりなき味ひあり。世の塵をはなれ。遠く仙境にあそぶこゝ地して。心ゆくことかきりなし。當座雉子を題にて歌よむ。酒と歌とのむと。よむと。とらうめさつしるもをかじ。昔の根の長さ春日も。やうくくれかたになりぬれば。今はとて。山を下り。圓通寺に歸る。さて當坐の歌例の各評にもにして。甲乙をあらそふも。またひとつの興なり。おのれ『春の夜の小倉の山もまらく』と峯より明けて雉子鳴なり。徳助ぬし『小倉山さりのこしたる山松の陰をたのみに雉子鳴なり』。猶ちほかれとはふさつ。かくて午後九時ころになむ。人々歸りさりぬる。明日はものれ岐阜に歸らむとすれば。夜をこめてたつに便りよからむため。岡専といへるはたこ屋に。太田倉雄ぬしと二人ゆきてとまりぬ。徳助ぬし正軌ぬしなど。此宿までおくり來て。わかれをぞしむ。あすは倉雄一人。もろ人にかはりて。おくり參らせむといひて歸らる。九日。つとめて起き出て船にのるへき所にいたる。倉雄ぬしおくり來て。明は七つたつないとはぬ別れにもかねの音つらし曉のそら

宗十郎ぬしもけふ岐阜にゆくへきやうあれば。おくりかてらとものとして。此船に乗りぬ。くたりの船いとはやくて。棹かちのいたつきもなく。午前八時。長良橋のほとりにつきぬ。今町にて宗十郎ぬしにわかれ。末廣町に立よりて。美江寺町の寓居に歸りつきぬるは。また九時の前なりき。時に明治二十五年四月十日。岐阜市美江寺觀音堂の前なる。旅やとりに来るしぬ。萩のやのあるし三浦千春。

## 第七。京紀紀行

高野山にまうてひととして。まづ京都にむかふ。嵐山の花もみまほしげはなり。明治三十五年四月の十一日に妻なるとき子。平山房子らを伴ひて。本郷駒込の家を出たつ。新橋より午前六時廿分の流車に乗りて出たるに。天氣よければ道すから心ゆきて。海山のけしきを見つゝゆく。さるにひる過るころより。時子かしらいたしなど。心地あしけにすれば。けふは名古屋にちりて一夜とまらむこそよからめといひて。夕かた名古屋につき。新柳町なる谷屋といふ家にやどりぬ。今宵房子と大須觀音堂にまうて。廣小路あたりの夜みせなと見ありきぬ。十二日いと曇りたれと。午前六時廿分笹島より流車に乗りて出たつ。岐阜大垣なしたすきに過きて。伊吹山の麓にさしかれるに。此あたり雪またらにふりつもれる所あり。こそこの残れるにはあらで。ちとつ日ころの寒むきに。更にふりたるなりといへり。伊吹山を仰ぎみればま

しろになんありける。近江の湖をめくりて。流車は早く京都七條につきぬ。ときに十二時三十分なり。六條にてひるのいひたうへ。まはらくいこひて。これより嵯峨行の汽車にのり嵐山にいたる。かくて大井の渡月橋のあたりに立ちて。川をへたて、あらし山をのそむに。松の木の間に。むら／＼と雲のかゝれる如く。色はすこしあせたれと。匂へる花の夕はえいはむかたなし。二日三日はかりちそかりけるは口をしかりき。

さくらちる嵐のやまに來てみれば都の春はやくたけにけり。橋をわたりて法輪寺にまうつ。花みる人の行かひしけき中に。ふと行あひたるはみのゝ國なる。武井宗祐なりけり。かたみに思ひかけさるまとなれば。珍く嬉くて。立ちなからまはらくものかたりす。

めつらしき人にもあひぬ嵐山花のたよりをなかたちにして。けふこゝに思懸なくあひぬるはけに玉あへる微しなるらむ。とぞ思はる。さてちのれこたひは高野山にまうてひとすこしひければ。宗祐われたひ／＼かの山にまうて道のあなまれば。まるへま侍らむとねもころにいひて別れぬ。かかるあひたにむら雲がわき。空のけしきあじくなれば。山を下り橋を渡りこなたの川邊に來かゝりけるころ。小雨ほろ／＼とふりてぬ。まはし時間まつほどいで。よしすかこひのさすまに上り。茶のみなどしてあるほどに。むら雨はますますはげしくなりて。そこまかしてももりそぼちて。ひと

ころもなくなりぬ。かさなく走りまると人も多かりき。

花さくらあらしの山のむら雨に人もちりゆく春のゆふくれ。雨もやみぬれば。やう／＼午後五時ころ。流車に乗り。二條まで来て。こゝより人力車をやとひて。北野にいたり。天満宮に参拜す。まさとやこゝは昔公の二千年忌にあたらせたまへは。こゝよりその御祭りのまうけちこゝかにして。社殿もさらに造りみかかれ。よろづさよらに。まかしくはかりにて。ことにたふとし。かしくみをかみまつりて。みつ垣を出つれば。鳥居のまへより貳丁はかりの所に。電氣鐵道の乗り場あり。こゝより電車にのりて。六條に至る道すから雨はしめさつるか。ちりるころにはやみて。星見えたり。八時ころやう／＼六條につき。丹波屋といへる宿にやどりぬ。

十三日。晴ていさ／＼か雲あり。けふは日曜なるへし。午前七時。宿を出て。房子時子諸ともは。人力車に乗りて東山見にもつ。まづ三十三間堂智恩院妙法院を経て。西大谷に登り。山つゝきに清水寺觀音堂にまうて。此あたり見渡すに。花は大かた盛りすさて。見所なし。山を下り。清水坂にすゑものゝたなを見て。一つふたつあかなひ。丸山の公園に入りてみるに。高さところ。阿彌の丸山俱樂部といふ。四階建のいかめしき樓ありて。いと時めき。盛には見ゆめれど。昔のみやひたる風情はなくなりぬ。ちのれらはさ／＼やけさやすみ所に入りて。ひるの飯ものし。まはらくいこふ。此あひたに面白さとも多かり。こゝより房子とき子らは智恩院より

平安神宮のかたにゆかむといふ。ちのれは別れて。けふの邦光社の歌會に建仁寺にむかふ。此會はいづもなから國より出てまうて來る人もほく。すへて貳百人はかりもあるらむと見えて。さしも廣き方丈もすさまじきはかりなり。席上にて鹿兒島人福崎季連川畑梓鎌田正夫などにあへり。當座よみはてけるころ。さのふ道にてあへる武井宗祐來りあひて。かの高野山の道きるへの肥をこまやかにかきて。こと更にこゝまでもてきて送りけるは。志淺からすありかたき心はまになむありける。かくて午後三時に。披講あり。をはりて。思ひ／＼にまかり歸る。ちのれは建仁寺の門前より車にのりて。四時過ぐるころ六條の宿にかへれば。房子時子はすでに歸りて在りけり。十四日。空晴て寒さよと冬の如し。午前七時廿分。七條より奈良鐵道の汽車に乗りて出たつ。伏見、宇治、玉氷など。名もなつかしきところ／＼を経て。十時奈良につき。汽車をわりて。猿澤の池、春日神社、南圓堂、東大寺、大佛など。名あるところ／＼見めぐり。ふた／＼ひ汽車にのりしは。十二時三十分なりき。是より行く先き。王寺、高田、五條の三所にて乗りかへたり。奈良にて。昔みし奈良の都のさくらにはな今もいろ香はかはらざりけり

芳野はつ瀬の花にうかるゝ人も少なさま。京より奈良にいたる汽車の内も。思ひのほかにかまつかかりければ。

都路は花のさかりもまつかにて打まめりたる世のけまさ哉  
名倉といへる驛にて。汽車をおりて。かちにてあゆむと八丁はかり。川あり。船わたりす。



これなむ紀の川なりける。此川を渡れば。やかて久度山村といふ里なり。山中なれど。物うる家なと立つしき。町並のかたちをなして。はたこやもあり。此所の森田勘助といへる宿より。かねて名倉まで迎ひに出居たりければ。あないさせて。今宵は此家にやとりぬ。けふは道すから汽車の中より。櫻の残れるを見つゝ眼をなくさめたり。奈良にへまたさかりなるも残れるもありて。青葉かくれなるは。ことにめつらしかりき。さてかの武井宗祐の高野に登らむには。橋本にてわりて。かふるを経てゆくそ。すくみちなると教へつるか。汽車の内に名倉の人ありて。ちかきころは。名倉より久度山を経て登る道ひらけ。一里はかりも近くなりぬと。いとむろにかたりきかせけるによりて。こなたへは來つるなり。

十五日。空くもれり。けふは高野山に登る日なりとて。朝またきより。ちのもくゝこのいそぎして。さしめき出てたつ。さのゆふへ。宿のあるしか。かたかたは年もたかく。足もよわげに見え給ふ。御山にのほり給はむには。必ず山かこにてものしたまへといふに。さなりくそれどくへへききてよ。といひききしかは。朝とくかこもてきぬ。あはれかちにてはつき。あひさくゝのほらむさそ。誠の信心ならめ。かうかこに乗りてはと心に思へと。足よわければせむすへなし。竹あめるあらくしき山かこに。三人とも打のりて山路にかかりぬ。

山籠に乗りて掲げてゆらくと登るをかしさ又めつらしき。

左は高さ山右はふかき谷なり。水音いとよし。

のほり行く山路の谷の水きよみまつ心まそすかれにけれ  
たひ人もあゝろのちりや洗ふらむさよさなかれの玉川の水  
十町はかりにして。人家ある所にいたる。こゝを推出といふ。またゆきく。追分にいたる。こゝは橋本のかたより登る道とのわかれなり。これより一丁はかりの間は。人家立つてきて。にきはし。神谷といひて山中の市まちなり。はたこやなともあり。こゝにて駕籠をもちせは。ちりたちていこふ。猶登りて不動谷といふに至る。これより山路まどにけはし。四十八まはりといひ。又いろは坂ともとなへて。登り下りの旅人の行なやむつらちをりなり。

さるはらわけつゝそゆく高野山ひるもをくらさ杉の下道  
かゝるさかしき道なれば。かこの者とも。まそくゝいこひて。あせむじぬくふもてはま  
り。たはふれに。

遊き茶をいくたひのみていこふらむ所にて駕籠をもちして  
ゆくまゝに谷をへたて。青葉の奥に霧のこゑするは。ふるすふはあや。さよなりぬよ。

山ふかみ猶こゑたえす聞ゆなり春もさくある谷のうくひす  
岩のかけみちのかたへには。杉檜原嶺などの大きな木ともあひしけりて。ちののから此山のよそほひをなせり。櫻は多からぬと。これも大きなかところくに見へたり。

谷深き杉のこのまにかつ見えて一むらさけりやまらぐら花

またさかぬ梢も見えつ春さむきたかの、たくのやま櫻はな

山櫻こゝろくにささにけりとくもねそきも花のまに／＼

いろは坂をのほりつめたる所に。不動堂あり。又ゆくまとはらくにして。女人堂にいたる。こは昔女人禁制のころ。女とちのとまりて遙拜せけるところとぞ。まゝやかて一山の大門にて。木戸あり。これより内はたひらにて。宿坊敷かきりなく立つらなれり。さきの年の火に大かたやけうせて。また石すゑのみなるもあり。

たかのやま峰の平のひろければつらなる寺の敷をまられぬ

ふもとよりこゝまで三里あまりとそいふなる。十時過るころ。宿坊本覺院にいたりつきたるに。あるしの僧まめ／＼しく茶菓などもていて、ねきらひぬ。まはしいこひて。是よりかちになり。あないのをのこを先きにたてゆく。宿坊のある所を出はなれて。町屋一丁はかうなり。こゝにはそはきりまんちうなともあるへし。わかき女どもの物うるを見て。

大御代とともにひらくる高野山みねまてにほふ女郎花かな

そこを過ぎて奥の院にいたる道のかたはら。右も左も皆むかしの諸侯かたの骨塔にて。石の玉垣いかめしく廻らしたる五輪石とももの。大きなちいさなる。いくらともなく。末はかすむばかり立つらなりて。其間は松杉などの古木まけりかさなり。物ふかくすこきやうなるに。折まもけふは空さへ曇り小雨打けふりければ。いとこゝろほそし。あないのをのこ。此墓所を右左に

かへり見つ。かれはもとのなにかし太守の墓。これはその君の墓など。目にたつをとりのわけ指さしをしふ。熊谷教盛の墓、曾我兄弟の墓、多田満仲の五輪石などの。ちいさく造れるは。何人のいつたてたるにや。かへりて目とまるこゝ地す。道のかたへの薬井は。昔のかげやうつすらむ。蛇柳棺掛櫻は誰か世の春のかたみにやとをかし。又朝鮮陣上碑といふ一丈あまりの碑あり。こは慶長の朝鮮陣の後。薩摩の島津義弘朝臣か。日本朝鮮明三國の土をとりかためて。此いしふみを建たる物なりとさくは。めつらしくほそたり。御廟の橋といふをわたりて。左のかたに仙院とていかきまわたり。靈元法皇を始め奉り。近くは光格仁孝孝明三天皇の寶塔立ち並び給へるはいとまかしこし。これと道を隔て、向ひあひに。英照皇太后の寶塔立ち給へれば。謹みてふしをかみぬ。こゝを過ぎて少しのほれば。燈籠堂とて長拾八間幅七間の堂あり。内にはあまたの佛菩薩安置して。晝夜あまたの燈明をともしつらね。參詣人こゝに獻燈をなすなり。

いかはかり嬉しからまし後の世の闇をも照す明しなりせば  
此堂に向ひて。大師の廟は立ち給へり。これを承和二年三月廿一日入定し給へる廟窟とさげは。いとまたふとくほそえて。水たむけ線香さけなとしてふしをかむ。女とちはほと／＼なみたもほしつへし。

登りきてけふこそあふけ高野山高くとふとき法のひかりを

世の塵の汚れをさけて法の師はこの山深くかくれまきけむ

此あたりのありさま。かけていはは中なれば。すへてはふさつ。昔御堂關白道長公普光院殿なともまうて來給ひしとか。今もたかさいやしき老もわかきも。此御山に足をはこふもの時をわかす。たゆるとなしときいて。

類ひなき法の光の照らすはかうやは人のまうてきぬへき。

かくてもと來し墓の中の道をかへり。金剛峯寺、六時堂、勸學院、大學校、さまざまの所を見て。宿坊本覺院に歸りぬ。法師物取りまかなひ。晝の飯勸むれば。たうへ終りて。午后二時頃。此院を辭し。これよりかこにのりて。下山の道にむかふ。三三丁にして金堂にいたりぬ。まことに高く麗はしきこと雲にそひえ。日にかやけり。こは嵯峨天皇の御願にて。弘仁年中に建られけるとそ。堂の高さ二十五間。桁行十四間四面。一層にして銅の瓦もてふさたり。其結構壯麗いはむかたなく。まかして其内部の高雅閑麗なる。又他にたくひなく。いつの年にかありけむ。歐洲人來り見て。いたくめてはやしけりとそ。さもありぬへし。此むかひの方に御影堂といへるあり。其前に三鉢の松とて。玉垣まわしたるなかに。古木の松立てり。昔阿上人これをもろこし船にのりを得てゐるしを殘す松のひとと」とよめるよし。かくてもとの山路をたどり。久度村に歸りしは午后六時はかりなりき。此久度山は慶長のむかし眞田幸村が閑居せし地の上にて。其墓所ありといへは。歸り路にかこをよせて。善名稱院といふ寺にいたり見るに。寺の内に幸村の墓あり。かたはらに昌幸の墓あり。これはちいさくて後に建てたる

ものとみゆ。今日は晝ころより雨ならむと思ひのほか。午後は晴れやかになりて。障りなく山を下りけるは。さいはひにてそありける。こたひ又森田の家にとる。

是より紀の國若山に巡り。和哥の浦にあそび。玉津高明神。紀三井寺などに參詣し。津の國住吉明神をかみ。大坂にとまり。ふたひ京都に出て。一夜やとり。大津岐阜名古屋を経て。東京にかへりし道のこととも。わづらはしければ皆はふさて。こゝに筆とめ侍りぬ。

明治三十五年五月。七十五翁三浦千春来るす。

## 第八。はまつと

てりつゝ此ころの空のわりなくあつけきた。まいて都のうちのすまひ。身ひとつのおき所なきこちして。いてやすしからむ海へにと。おもふころのうきをめては。一日もためらひかたく。妻と幼きうま子一人を伴ひつれて。汐あみにかまくらあたりを物することゝはなりぬ。明治三十五年八月四日の朝またきに。家を立ち出て。新橋より汽車にのり。西にむかひてゆく。大船といふ處にて車のりかへて。左に折れて走れば。ほとなく逗子につまぬ。こゝにて車をあり。海邊なる小坪の里にいたり。養神亭といへる家にやとを定めて。まつ此あたりの海邊を見ありくに。真砂地のきよくすすしきは。浪より秋やたつとうたかはれ。沖つ白なみは雲井にまかひて。帆あけたる船とも空にもかよふやと思ひなせるに。心もいつしかのひらかになり

て。世のちりとあつちとば。はやう忘れすてにけり。

沖つかせ雲のにふきてあらみとり空もひとつにすする白浪

真砂路の松のもとまで汐みちて秋をよせくるあきつまら浪

此まへなるはなれ屋こそ。郷三位の君のやとり給ふ所なれといへは。ゆきてとふらふ。よろつ  
のまつらひ田舎めさて。あろそかなる物から。きよけにをかしますまひなり。君のかゝる所に  
日を送らるゝは。汐あみの爲のみにあらで。かたかへのゆゑなるへし。

翌日は五日。ていけよし。けさはいとく起き出て。うま子を伴ひ。濱邊を蹴にてふみありく。  
玉藻よる小坪の磯のまなこちに足はふむともかちよりゆかむ

真砂にままれる石や貝の。美しう珍らかなるを。幼きものは。拾ひてめてまよふ。けふは朝の  
飯たうへて後。あのれひとり葉山に高崎大人のなり所尋ねて行きぬ。大人はあはさぬほどなれ  
と。入りて内君にたいめ給はりて。南表の板椽に尻かけて。何くれと物語らふ。小高き岡の上に建  
られたれは。目にさはる物なく。近くは江の島。遠くは不二のねまても。はるはると浪の上に  
見えわたり。庭には松ともむら／＼と並ひたる。垣内の秋草もかつ／＼咲そめて。そこはかと  
なき蟲の音蟬のこゑもあるしからにや。世に似すぎさなされて。なまめかしう。あいつから老  
もわすれ。よむひものひぬへさすまひになむありけり。たゞまをしけれと。さてしもあるへさ  
ならねは。いとま申して。九時ころ歸りぬ。午の後。孫の幼きをなくさめあそはせむと。手を

とりて養神亭のかたへの板橋をわたり。北さまに行きけるに。畑中にこふかくしけりたる岡あ  
り。前に石のささはしあれは。神のやしろにやと。のほりてみれば。やしろはなくで。年よる  
榎の大樹のもとに。六代御前墓とありたる石を立てたり。六代は平維盛の子なるへし。此處に  
して身まかりけるにや。思ひかけぬ人の墓をみて。そゝろにあはれをもよほしぬ。  
六日。けふは妻とうま子と東京に歸らむといへは。打連れて午前八時過ぐる頃。養神亭をたち  
て。先づ鎌倉に赴き。三橋樓に上りていこふ。また時も早ければ。あのれひとり大塔宮を祭れ  
る鎌倉宮に詣てつ。此宮は明治二年新に建てられさとぞ。御墓は扇山といへる山の上におりて  
す。土の牢は宮の後へに少し高き所にあり。ふかさ一丈もあらむ洞穴にて。内はいとくらし。  
かゝる所にもしこめられおはしけむよと思ふに。なみたのみこほれていはむすへをまらす。  
天の日の光もなとか此時にこのつちむろをてらさざりけむ  
あしなへて世の闇なりき常闇は此つち室のうちばかりかは

かくて三つ橋に歸りて。ともに晝の飯たうへて。かれらは東京の家に。われは西の方に出たしむ  
りそきて。三時に。横須賀より来る汽車にのりぬ。大船にて別れて妻とうま子を見まくり。あ  
のれは四時過るころ。西ゆきの汽車に乗りて。するかの國沖津にもむく。夜に入りて。沖つにつ  
きたるに。海水浴に便りよき宿のみなふさかりてありとて入は。まつこよひは中宿名なる十文字  
屋といへる家にやとりのぬ。十畳の間にあの人一人入れたれは。打ぐつろきていとやすし。

七日。朝のほど。雲いさゝか出てたり。午前五時。起きたを。やがて濱へに出て。れいのはたしにて浪うちきはをあるけは。あさかせよ〜とよき来て。すしさをいへはさらなり。浦風の涼くもあるか大海のちきつは夏のほかにやあるらむ。濱かせの袖ふさかへす浴衫ひとへになつこのちこそせぬ。海原とほく汽船のはしるも見ゆ。

もしほやく海を離れてたなひくは沖ゆくふねの烟なりけり

けふは江尻にとて。午前八時四十分の汽車にのりぬ。江尻につきて人力車を雇ひ。清水港より龍華寺にもせんとして出たつ。清水は世に聞えたるみなとにて賑はへり。町のうちを出はなれて。田中の道をはる〜と車ひきゆく。此あひた〜とあつし。やう〜にして觀富士龍華寺につきぬ。寺は山の中腹にありて。南にむかひ。清水港三保の松原を眼下にのぞみ。不二の高根も海原こしに見ゆといふを。けふは雲かゝりて口をし。沖にはいさりの船ともうかひ。又軍艦高ちほとかやも。港ちかく船かゝりせり。あはれ〜の景ま。はるかに田子の浦をのぞみては。赤人の高根まらへを思ひ。ちかく清見瀧を見さけては。阿佛尼か道の肥の詞をまのふ。けに舊跡といひ風景といひ。東海の道に双ひな〜といふは。うへなりけりとちほまてめてたし。かのみちのくの松島の浦を。富山に登りて見たらむこと。清見か浦の景色はこゝより見るを最上とすへし。此地は安倍郡不二見村といへは。不二のねを見るも又ほかにはまざるなるへし。

田子の浦に打出て見し言の葉や高きまらへの限りなるらむ

龍華寺の東にならひて。補陀洛山鐵舟寺といふ寺あり。其うしろに久能觀音といへる小堂のある山に登りて見るに。目にさはる物なくして。龍華寺のなかめにちとらす。鐵舟寺はむかし久能山より移して古き寺なるも。近きころ山岡氏の中興開基せるよし。昔より傳はれるくさ〜の寶物ありて。いま展覽會中なれば。幸に入りてこれを見る。其品は別にかきたる物あればこゝにはふさぬ。かくて山を下り車に打のり。江尻に歸りしは。午の少し前なりけり。なにかし亭にひるけものして。午後の一時。沖つにゆもどりぬ。夕さりつかた海邊にいて。

夕潮は今みち來らしまさこちの松かねあらうちきつまら浪

花とさき玉とくたけて清見瀧さきありそに浪のよるみゆ

磯邊に眉白翁の石に尻かけたるを見つけてちかよりて。翁は所のことまりつらむ。いにしへの清見か關の跡はいつらととふに。さたかにまされされと。清見寺の前よりすこし東の方。並木の松のあるあたりを。關の跡といひつたへ侍り。又清見瀧。清見か浦など申すも。ひろく此あたりをすへいふ名にて。世にかくれなき名所にて侍りなど。所からほこりかにかたるもことわりなり。案するに更科の日記に。清見か關はかたつかたは海なるに。關屋ともあまたありて。海まで打貫したり」と見え。又十六夜日記に。暮かゝるほど清見か關をすく。岩こそ浪の白き絹を打ちするやうに見ゆるいとをかし」とあるをみれば。其ころまでは。關やありつらむ。源頼行か東

關紀行にも。『此關遠からぬほどにれきつといふ浦あり』とあるせり。不破の關は今も其あと定かたて。いしふみなとたてたれば。往來の人も立とまり。昔を忍ぶなるに。この關はあとさへたたくしきそ。口をしきや。所の人こころなき蟹の子のみにはあらしを。

清見瀨あれて幾世になりぬらむあとも、とめぬ浪の關もり

淨見原宮の昔の關はあれてむなしき名のみと、めけるかな  
八日。今朝は宿をかへて。清見寺の前なる府中屋の靜海樓といへるに移りぬ。此家は南にむきではるく。ものごとこほりなき海つらなれば。浦風とこしなへに吹き入りて。夏を去らす。まあとに身と心をやしなふには。こよなき所にてあなる。まかのみならず。いほ原の清見か崎、三保の松原。こぬみの濱。さつたの濱まで。名ところのかすく。残りなく。むなから見はるかす。あをうな原はわか庭の池のことく。沖行く船はちりうく二葉のまとし。

五百重波千重波よする庵原の清見か崎は見れとあかぬかも  
みほの浦によする白浪立かへりみれともあかすよする白浪

天乙女袖かへしけむ故事もつたへてひさしみほのまつはら

三保の浦の松原こしに見ゆるかないつのみさきに蛋の釣船  
十一時過るころ。まへなる大路を西さまにあゆみて。板橋かけたる所にいたりぬ。此川を濁澤川といふ。こより西北なる山のふもとに。いかめしき高とのまらくと見ゆ。工事なかはに

て。あまたのこたくみとも。立はたらきをるは。是なむ井上伯爵のなり所なりとぞ。つかさ位高き人は思のまゝのまとなすものになむ有りける。けふはひねもす清水港の軍艦より。海上にむきて。大砲を打ち放つ。其ひき浪にこたへていさまし。

大筒のちとするかたを見さくれは沖つ浪間に白けふりたつ

うちはなつ筒音たかくひしくなり大海原のなみもとろく

源親行は興津にやとりて。『磯邊によする浪のちとも身のうへにかゝるやうに覺えて。夜もすがらいねられす』と。其紀行にあるせり。われは此浦の浪の音に心のちりを洗ふやうにまほえて。終日ももしろし。萬葉集に『いほ原のまよ見か崎のみほのうらのゆたに見へつ、物ちもひもな』と。よめるもこの心なるへし。この興津といへる地名は。清見寺、濁澤、勝岡、興津、中宿、洞、薩埵、八木間、谷津、横山、承元寺等の地をすへいふ稱にて。興津は其もとつ里なりといへり。又其まきつの名のおこりは。此里にふるく瀧津島媛命を祭れる興津神社又宗像神社ともいへるかあるによれるあるへし。兼好法師の興津の神をよめる歌とてつたへたるは。『まろへなされきつのはまに鳴たつこのをあはれと神はさくらむ。』此歌兼好か集に出たるにや。興津川は町の東にあり。鮎釣りにゆく人多し。此川又の衛田川ともいふ。

庵原の海に出たるまきつ川あさてもねても家をしそちもよ

文和風土記によれば。鶺鴒ありて國府の料に充てたりと見ゆ。むかしより鮎は味ひよかりけむ

かし。沖つ川の東を洞といふ。此所に古城趾あり。洞の薩埵なり。世に親ららす子ららすといへる海岸も。此あたりなりといふ。

九日。午前七時より雨ふり出て。まはらくにしてやみぬ。さてひねもす雲はれやらす。けふは日蝕なれど。雲にさしはりて見えさつき。清見寺は淨見原天皇武天の創建し給へる所にして。今をさること千とせに餘れる古禪刹なり。されは世にまれなる寶物ともあまたあり。其中に豊太閤の詠草細川幽齋の筆といへる物あり。めつらしければ其文をこゝにうつしとりぬ。

東夷征伐の爲。天正十六年三月のはしめつかた。都をたち。ゆきくへて。駿河國清見寺にいたりぬ。彼地の風景奇絶にして。殊に三保の松田子の浦の月。不二の根の雪。眼前眺望まことに其興淺からず。庭前の青葉かくれの。花の色も。めつらかに。なにくれど。怨をとくむること五六日。それより東のをひすを平らけ。みちのふくまで行めぐり。心のことく國民をまたかへ。歸るさになりて。八月二十日あまり。又彼寺につき侍りければ。常寺の大輝長老。禪刹の正宗をつき。凡俗をのかれたる志を感じて。書院の交に召加へて。かたらせ侍りぬ。彌生にみし花の梢など。やうく紅葉して。かの能因か霞とともに出しかとの歌なと思ひ合せ。一首をのこし侍り。

清見寺ゆくてに見つる花の色の幾程もなくもみちまにけり  
又かの浦の眺めを。

名にしちふ田子の浦なみ立かへり又も来てみむ不二の白雪  
かの長老のために。かさつけつかはすものならし。

清見寺の西。濁澤と長者屋敷の間に。こぬか山といふ小山あり。此山の下なる海邊をこぬ見の濱といふよし。かの俊頼朝臣の歌に。『いほさきのこぬ見のはま』とよみたるいほさきは。いほ原崎の略稱ならむと。所の人のいへる説はいかゝあらむ。とまれかくまれ。此あたりとあしはかりに定めて。

人はまたこぬ見の濱の朝あけに磯つたひして小貝ひろはむ  
沙浴に来る人多き代となりてこぬ見は濱の名のみなりけり  
朝霧きに玉藻なみよる庵崎のこぬみの濱は見るにさやけし

午後。東京より寫眞師來りて。清見寺より海原とほく見ゆるかきりをうつさむとして。寫し得ずしてさりぬ。あまりに大なる景色は寫しとりかたきものなりとぞ。畫師ならば此ところを筆すての浦ともいひてまし。

十日。雲なし。海原を見わたして。  
あきつ風吹ちこるらしわたつみの大海の原に波立ちわたる  
われひとりとほくも來にける哉と思ひて。

清見瀉清さはまへによる浪のなみに思はく來へきわれかは

此浦のけしきは。わすられかたきかたみなるへし。家よりふみの便りあり。ひらき見れば聲とむすめと。をさな子をつれて。けふ日光へ出てたつよしなり。かしては山へにて。わきてすしからむかし。

十一日。けふも晴なり。朝またき。れいのやうに。海へたに出て。まさこちを東のかたへ。中宿の町はなれまで行きたるに。このころうち雲にのみかくろへたりし不二のね。薩摩山のかひよりふとあらはれたるは。あなめつらしとうちあふかれて。

けさはしもさちたの山の幸ありて雲間に不二を見初つる哉

白雲のかさなるうへに深翠さやかに不二のみゆるけさかな

みな月のてる日の空に雪消てみとりになりぬ不二のまは山

けふは家に歸らんとて。何くれそのいそぎし。宿のあるしに物くれなとして。午前九時少し前に出てたちぬ。さて停車場にいたりけるに。ゆくりなく東京小石川なる松南宏雅氏に出あひぬ。いかにとへは。かれはさのふこゝに來たりけるか。宿の心にかなわねは。けふは沼津にも合せむとすとへり。さらはともにとて。同じ車に乗りあひしか。ほともなく沼津にてわかれぬ。これより車のうちぬふりかちなり。午後三時五十分。新はしにつゝかなくつきて。家にかへりつるは五時ころなりけり。

跋

此ころのあつさ堪を難くて。海水浴せむと。我家の子等。こそりて小田原の海邊にゆきけるに。たのれはあとよりとて。けふは例の文机の下に暑さはらいつゝをるに。三浦うしのもとより。濱菴といふものを給はりければ。やかてひらきみるに。相摸なる葉山あたり。駿河なる興津あたりを。此處彼處逍遙したまひつる。道の記なりけり。みもてゆくに。うたひ給へる言の葉をさきは。沙風の涼さ吾身にまみわたり。ねもひやれば。わか心かねてゆかはやとねもひし。小田原わたりにあくかるゝになん。さても此濱つとをめぐみ給ひしは。わか心をまゐり給ひて。促し給へるにかと。あやしうあそねもひはへれ。今かしこまりかてら。此冊子をかへしまわらすとて。

沙干かた君かあざりしあととめてひろひ残し、貝やあざらむ



#### 第四卷 萩園隨筆

波斗橋 木曾街道。上松宿と福島驛の間に。波斗橋と云ふあり。いま此ところをさして。木曾のかけ橋の古跡なりといへども。いにしへのかけ橋は。萩原澤と云ところにありしとなり。此橋所むかしはいたく難所にて。洪水に岸崩れ。橋流れて。往來の障り多かりしに。我敬公。慶安元年に。大石を壘み水の憂なきやうになしたまへり。此時宇野朱右衛門葛木小右衛門奉行たり。かゝりし後も。猶洪水に橋あやうき事たひくなりしかは。寛保元年。戴公の命を蒙り。水野伴左衛門思慮をめぐらし。在來りし長十間の橋を止めて。石垣を築き延へ。平々たる街道となせり。實に千歳の賜ものなり。今の波斗橋は僅に長さ一丈許にて。是は古跡を失なはざらむ爲に。寛保年中に架たるなり。此ところに芭蕉の『かけはしやいのちをからむ葛かつら』といふ句を添りたる碑あり。

木曾街道 木曾街道落合驛と馬籠驛の間。いにしへは湯船澤といへる所へかゝりて。艱難の山坂なりしを。戴公の御時。水野伴左衛門奉行にて。新道を開き往來を安くせり。今の街道是なり。又古歌に詠る木曾の御坂は。美濃國惠那山の古街道にありとそ。いにしへは此山を打越して往來せし故に。名にしちふ伏屋里は。さ木古跡も。惠那の麓にあり。上代よりたひく街道を改められしなるへし。按ずるに木曾はいにしへ美濃國に屬せり。續日本紀に。『大寶二年十

二月壬寅始開美濃國岐蘇山道』と見えたり。

織田家の土木 應仁以來累年の亂逆により。天下の諸道欠けて失われれば共繕ふ事もなければ。道狭く橋板朽ち去り。山路は絶え果て。谷に下り峯に攀ち。往還の人馬。艱難大かたならざりしに。天正三年正月。信長公。篠岡八右衛門坂井文助高野藤藏山口太郎兵衛に命せられ。海道筋廣さ三間半。在の大道三間とし。道の曲れるを直につけ。石を除き。牛馬の蹄。勞せざるやうにして。道の兩邊に松柳を植えまめられしか。二月下旬に至りて道橋悉出來せしかは。往還の旅人喜悅をなせりと。信長記に見也。今本州の往還道は。幅廣さ三間。兩玉縁一間つゝの定めなり。信長公の時の例にならへるにや。

一里塚 慶長九年二月四日。台徳公。東海道越後道奥州路の三道に。ちのく一里毎に兩塚を築かしめ給ふ。天正の頃に織田信長も分國の中に一里塚を築かしめ。其時迄は里數の名のみありて。一里の町數定らざりしを三十六町に極め。塚の上には板を植えけるに。此度も之に準せらるべき旨有司に命せられ。同年五月下旬に至りて悉成就しぬ。今に残りて行人之によりて里程を辨す。みな公の賜なり。

路傍の並樹 街道の兩邊に樹を植うるは。古代よりある事なり。類聚三代格七之卷に「乾政官符。畿内七道諸國驛路。兩邊遍種菓樹一事。右東大寺普照法師奏狀備。道路百姓。來去不絶。樹在。其傍。足息疲乏。夏則就蔭避熱。飢則摘子噉之。伏願城外道路兩邊栽種菓子樹木。

者。奉勅依奏。天平寶字三年六月廿二日。』とあれば。上古は菓樹を植えしなるへし。いま松柳をうゝるは。信長公の時の例とみゆ。

堤の樹 堤の上に松其外の雜樹を植ふる事。是も古例なり。令義解をみるに。營繕令云「凡隄内外並堤上。多植榆柳雜樹。充堰用」とあり。

租と税の區別 租税は年貢なりと心得れども。租と税との差別をまらぬ人あり。神祇令義解云「新輸曰租。經貯曰税也」とあるにて辨ふへし。訴訟も亦之に同じ。公式令義解云「告寇曰訴。爭財曰訟」とあり。

公事の解義 公事とはおほやけことよめり。禁中の行事を公事まつりこといふ。貞丈雜記に「禁裏にてとり行はる。御儀式公の用事の惣名なり。今時武家にて爭論を公事といふは誤なり。爭論をくじと云は口事の字なるへし」といへり。

天正中の檢地 萩原元克か甲斐國名勝志に。『天正年中毛利氏檢地の頃迄は。一步を一文とし。一畝を三十文とし。一段を三百文とし。一町を三貫文とす。一とせ上野廣俊か信濃國に行きけるに。伊奈郡北小河村なる。村木何某の家に傳はる。算書に此の如く見えたりと。語り』といへり。

田の測量 制度通云。古へ田をはかるには専ら町と云。位田職田も幾町とつもりて給る。近世百年前には百貫千貫といふことあり。何れの頃より始ると云事を知らず。或云今の見米五

十石の地を十貫とつものと。又一説には千石の場を百貫といふといへり。大やう其通りの事なるへし。其後はもはら石を以てつもりて。今に至りて之による。』

王代の量度の制 雜令云「凡度地。五尺爲歩。三百歩爲里。』延喜雜式云。『以六尺爲歩。』孝德紀通證曰「拾芥抄云。凡田以方六尺爲歩。荷田在滿云。令五尺格式六尺。無長短云々。按するに王代には土地の廣狹を積もるには。大尺を用ゆるよし雜令に見えたり。大尺は一尺二寸なり。五尺爲歩といへる五尺のうちにて二寸つゝ延ふれば。一步にては六尺なり。然れば令に五尺と云ひ式に六尺といふも。共同に長短あるおとなし。只測る所の尺に大小ある故なり。

度制 雜令云「凡度。十分爲寸。十寸爲尺。一尺二寸爲大尺。十尺爲丈。』在滿の「令一尺。今尺九寸七分三厘也。或云今尺九寸九分三厘六毛。又云本邦舊尺。當今曲九寸八分四厘二毛餘」とし。三器攻略所見に「本邦古尺據唐。大尺。當今曲尺九寸九分三厘六毛。小尺。當今曲尺八寸二分八厘強」とあり。徂徠の「開元錢唐書曰。徑八分。明人亦曰捌分。以吾邦尺一校之亦捌分。故知明尺即唐大尺。而吾邦尺亦稟唐制也。」といへり。此の如く説多けれども。畢竟正しくは知かたし。制度通に「唐の一寸は。開元通寶の錢の巾を八分と意得て宜し。一尺一丈も準し知へし」といへり。本邦の制は。全く唐の制に據りたれば。是もともに準し知るへし。而して徂徠の説の如くならば。令の時の一尺但大尺を云。雜令に銀銅錢を量る。大尺を用ふと云ふによる。に大尺を用ふと云ふによる。と當時の曲尺一尺と。大様たかひ

あるまとなし。少しの差はあるへけれとも。一二分に過くへからず。

量制 雜令云。「量十合爲一升。三升。爲一斗。十升爲一石。十斗爲一斛。三器攻畧說に『唐大升當今三合七勺八抄弱。小升當今一合二勺五抄三撮一圭強。猶可考。』と説けり。按ずるに。是も米穀等を量るには大升を用ひたるなり。制度通に『唐の時の量目は。今時の三分一より内と見えたり。一升只三合に準すへし』といへり。悉しき事は知りかたければ。大様三升を以て當今の一升とみるへし。

田制 田令云「凡田。長三十步廣十二步爲一段。十段爲一町。解云。謂段地獲稻五十束。東稻春得二米五升也。則於一町者。復得五百束也。段租。稻二束二把。町租。稻二十二束。是れ王代年貢の定めなり。今之を當今の町反に直し。年貢の多寡をみるに如左

令の時の一段三百六十步一步三積二十五尺にて此尺は大尺なる故今

當今の二百三十步零四に當る。但曲尺六尺二寸五分四

令の時の一段獲稻五十束。春米二石五斗方を以て一步と積る

當今の升にて八斗三升三合三勺有奇にあたる。稻一束には。今升一升六合六勺六撮餘を得。一把には一合六勺六撮餘を得へし。

令の時の一段租稻二束二把。春米一斗一升一

當今の升にて。三升六合六勺撮餘に當る。例へば一段の取米八斗三升三合餘の田地にて。

年貢は僅に三升六合餘出たすなり。

右年貢の法を以て。當今の町段に比すれば一段六尺二寸五分四方をの得米二石零八升五合零

有奇。此年貢米四升七合七勺三撮餘にして。

聖德以後の定に據るときは三升二合五弱の租也。

右は大寶令の定めによりて算へたるなり。其後慶雲三年九月丙辰。勅ありて之を減して。田一町の租稻十五束と改められしかは。三分一厘八毛餘の減省にして。一町の租は米七斗五升とす。之を以て當今に當て考ふれば。其租米上の朱書六の如くにて。三十分の一よりも輕し。是れ皇國の古へ王化の盛なりし時。上下相安んじて。各無爲を樂まみし所以なり。王代の治久かりし事。こゝを以てみるへし。

延喜主稅式に載せたる。尾張國正稅公廩各廿萬束。國分寺料二萬束。文珠會料二千束。修理池溝料三萬束。救急料二萬束」とある。是を米にせは合て二萬三千六百石あり。且し東數四十七萬二千束之を令の定によりて。米百石の場にて四石四斗納るつもりにして。五十八萬千八百十八石一斗八升餘なり。其頃の町段にして二萬千零九十町零九分餘。但往昔の一町は今の町段にして。二萬六千九百九十七町八段餘なり。一段に石三斗盛として。此高貳拾壹萬零五百七拾壹石四斗餘に當る。當今御知行高目錄。尾張國高四拾八萬千五百壹石八斗壹升七合とあり。日本紀に尾濃美濃の界を鵜沼川とせり。後世豐臣家の時國界を改めて。尾張の地を割きて美濃に屬せられたり。

それをも合すれば尾張の國高は四十八萬より多きなり。

大化の頃の課役 大化二年詔して「凡五十戸爲一里。每里置長一人。掌按檢戸口。課殖農桑。禁察非違。催驅賦役。」云々とあり。里は今の村の如し。長は名主庄屋にて。一村に庄屋一人をおかれしなり。戸とは家一軒にて。良人の家をいひ。良人とは公田を耕す百姓にて。即ち武士にして。私田を耕す者を奴婢といへり。右良人の家數十軒を以て。一村と立てし。大概一軒に八丁以上あるを大戸、六丁を上戸、四丁を中戸、二丁を下戸とし。一丁は計ふるに限あらず。丁とは二十一才より六十歳までの男を云。すへて一人前の課役を務むる百姓なり。されとも戸といふうちに。課戸あり。不課戸あり。課戸とは一戸の内に一人にても課役を勤むる者あるをいひ。不課戸とは皇親より八位以上の人。又は病者女下人等を課せざるにより。是等を不課戸といふなり。さて良人一人に田二段つゝ。女は三分の一を減して之を給ひ。其田より一段に稻二束二把つゝ。正税を出せしと見えたり。此給田を口分田と云。是はかりにては何程の田所にもあらず。良家身上の富榮に隨ひて。ちのか墾田等。又は私田をうけて耕種し。其利を專にせるなるへし。私田とは官職ある人の位田、職田、賜田、功田の類。又は寺田、神田、墾田等を云ひ。作人より地子を輸すとみえたり。私田の外に官田にも地子田あり。國司の公廩田没官田の類。或は位職賜田等。いまた授けざる間。其餘官人百姓へ授け。餘れる田所を地子田とせるなり。拾芥抄に載する所をみれば。格式の時租は數少く。地子は數多かりしよしなり。さも有へし。

租は二段二石五斗を穫る上田にて。僅に一斗一升を出すのみなり。地子は田地の穫稻を五分にして其一を出し。四分を作人の手前へとるなり。其事延喜主税式に出たり。例へば反に二石を得る中田ならば。四斗を出し。一石五斗を得る下田からは三斗を出すなり。

庸調の事 凡そ一戸に付き。大小を論せず。皆園地を給ふ。よりに桑漆を課せ給ふ也。上戸下戸に依て。桑漆を出すものと差あり。また戸内の正丁。是は前にいへる廿才より六十才までの男課役を務むる分を云租税の外。庸調の役あり。庸とは夫役なり。一年に十日出て、役につかはるゝなり。然らざれば一日に布二尺六寸つゝ其代りに出す。是を庸布と云。調とは家役なり。絹綿絲布の類を。所々の出産の品によりて出す。絹なれば一人前八尺五寸つゝ出たすなり。其餘も品類に依りて差あり。此外雜物といふ物ありて。鐵鹽鹽堅魚菜海藻等の類。正丁一人より出す品は。又調の副物ツキモノと云ひて。聊かなる産物を出たすなり。之を合せて調と云ふ。又雜術とて國中の諸事に役せらるゝことあり。是は六十日に過ぐる事を得されとあり。

### 位田職田功田ノ事

位田職田功田等をもてる人。其田所を百姓奴婢に渡して耕作せしめ。

地子年貢を收納すると見えたり。田令義解の文を以て知るへし。田令「凡公私田荒廢。謂位田口分田墾田等類。是爲私田三年以上有能借佃者。經官司判借之云々。私田三年還主。公田六年還官。謂墾田。年未滿限者。不合收。其限内者。輸租。限外物。地子也。とあるを按するに。位田など荒廢砂入の類なりしたるを。再墾起返りせん事を望む者あれば。其田を借りて作らしめ。三年にして主へ返すなり。其年限中は租を納め。